

Emergence

Volume XIV

number 03

創
発

Session
市民ボランティア、地域ガバナンス、公共政策 I



Tokyo Christian University | Kyoitsu Christian Institute
東京基督教大学 | 共立基督教研究所

Emergence

創 発

Volume XIV

number 03

本号は、John Templeton Foundationの助成を受けて
行なわれた研究プロジェクト「Science for Ministry in Japan:
The Theory and Practice of Christian Ministry in the Face of
Natural Disasters | 震災後の日本における宗教的ミニストリーの
理論と実践」(2014年4月-2016年12月)の研究会記録を
編集したものです。

プロジェクトでは下記の4つの研究会を2-5回開催し、
本誌では A-1、A-2、B-1、3つの研究会記録を
順次収録予定です (B-2研究会は東京基督教大学国際宣教センター編
『原発避難者と福島に生きる』[木田恵嗣・増井恵・西原千賀子著、
いのちのこば社、2016年]として刊行)。
なお、本文中に記載されている主張・見解は John Templeton
Foundationの主張・見解を表すものではありません。

A-1 研究会
「脳神経科学とポジティブ心理学」
—

A-2 研究会
「医療・看護とスピリチュアリティ、そして日本的“思いやり”倫理」
—

B-1 研究会
「市民ボランティア、地域ガバナンス、公共政策」
—

B-2 研究会
「フクシマ再生と福祉的まちづくり」
—

This project was made possible through the support
of a grant from the John Templeton Foundation.
The opinions expressed in this project are those of the
members and do not necessarily reflect the views of
the John Templeton Foundation.

本号のPDF データは
<http://www.tci.ac.jp/smj/?p=126>より
ご覧いただくことができます。

John Templeton Foundation
→ <http://www.templeton.org/>
—

Science for Ministry in Japan: The Theory and Practice of
Christian Ministry in the Face of Natural Disasters
震災後の日本における宗教的ミニストリーの理論と実践
→ <http://www.tci.ac.jp/smj/>

回復された言葉^{ロゴス}

本号では4回にわたって開かれたB-1 研究会「市民ボランティア、地域ガバナンス、公共政策」の1回目、2回目の記録を掲載している。

広井良典氏の発題は、マクロな文明史の視点にたったポスト資本主義の生産・消費・労働の変遷についてである。岡村清子氏の発題は現場に密着したミクロの対人援助サービスの話である。ただし広井氏のグローバル、ナショナル、ローカルという区別から言えば、戦後日本の福祉は措置制度から契約制度になり、ナショナルからよりローカルになっている。それでも福祉が持続可能なかたちになるためには国家からの資金が潤沢になければならないだろう。しかし、今日、国家政策はそのような福祉中心の方向に舵を切ろうとしない。人を中心にした“公共事業”ではなく旧態依然とした産業への拡大・成長路線を採っている。

そうではあっても市民の働きとしては、ミクロな人と人の関係のレベルから、自主・自律・自治の社会を創りあげることが絶対に必要であり、ミッション(ボランタリズム)に基づく働き人の育成がどうしても必要だ。ここに広井氏の地球倫理が地域の人と人の絆づくりに具体的に慈悲、仁、隣人愛として生きてくると考えるべきだろう。

岸川洋治氏の以下の発言に注意したい。「ここで紹介いただいた事例も、やはり自分の使命(ミッション)があるからできる。ですから、制度の中でやっている私たちの社会福祉法人も、ミッション——私は『ボランタリズム』と言い換えていますが一、ボランタリズムがなければ、意味がないと思うんです。そのボランタリズムの要素は、『開拓性』『先駆性』でしょう。ニーズに対応するためには制度も積極的に変えていくことが求められると思います」

長谷川(間瀬)恵美氏と岡村直樹氏の発題は東日本大震災支援についてである。長谷川(間瀬)氏は「魂への配慮」(スピリチュアルケア)を教育支援の事例として報告した。地域密着のフィールドワークから「公立学校での宗教教育の困難さ」を感じつつも、多元的なかたちでの宗教の公共的役割が「隣人の痛み・苦しみに関心して手を差し伸べること」として見直されるべきではないか、と語る。資本主義の成長路線の価値観は経済利潤優先であったが、ポスト資本主義の時代は価値観が内面に向かう時代であり、日本ではそれが大震災での苦難の時代と重なり、人間に備わったスピリチュアリティが苦難に立ち向かって生きる勇気を人々に与えることが確認されている。

震災関係でボランティア活動をした若者たちの宗教心の発達という内容が、岡村直樹氏の発題からインタビュー等の質的研究として語られた。大規模な災害などに接したときに、目に見えるかたちで助け合いの精神というのが、仏教、キリスト教、あるいは天理教などといった、どちらかというと制度化された宗教のもつ隣人愛や慈悲の心の教えから、外部社会へのボランティア活動として積極的に行なわれる。制度化された宗教というものの公共の場での他者支援もまた脚光を浴びている。しかし、その日本の主流教団も従来型でいいということではなく、現代特有の福祉や環境問題に則して自らを改革していくことによって、市民の幸福な社会を形成する原動力になっていくであろう。確かに、生まれながらに宗教心というものがある人間の心の中に具わっている。それをポスト資本主義の時代に、どのように成長・成熟させ、福祉・社会保障制度につなげていけるかは今後の課題であろう。

[稲垣久和 | 共立基督教研究所所長]

Volume XIV
number 03

03

Recovered Logos
恢復された言葉

08

Session 06
市民ボランティア、地域ガバナンス、公共政策 | 1
発題 | 1
ポスト成長時代の地域・公共政策・価値
広井良典

26

発題 | 2
ケアのあり方を考える | 老人福祉・介護福祉・幼老統合ケア
岡村清子

48

Session 07
市民ボランティア、地域ガバナンス、公共政策 | 2
発題 | 1
魂への配慮 | Spiritual Care
東日本大震災後の教育支援(釜石市立唐丹小中学校)の活動報告
長谷川(間瀬)恵美

63

発題 | 2
震災ボランティア活動と若者の宗教心の発達
岡村直樹

市民ボランティア、地域ガバナンス、公共政策 | 1

2014年6月28日 | 東京ガーデンバレス 桂の間

出席者

- 石野徳子
- 稲垣久和
- 岡村清子
- 岡村直樹
- 河幹夫
- 岸川洋治
- 長谷川(間瀬)恵美
- 広井良典
- 松葉ひろ美
- 森田哲也

ポスト成長時代の地域・公共政策・価値

広井良典

私は、かつて医療福祉や社会保障関係の研究を主に行い、「ケア」について考えて来ました。しかし「ケア」の最終的なゴールとは何かを考える過程で、「コミュニティ」というテーマが浮上しました。というのは、「ケア」は、一般に「ケアする者」と「ケアを受ける者」の一対一の関係性で捉えられがちですが、それで完結せず、一対一の関係性を超えて、ケアを受ける側であってもコミュニティの中で普通に生活していけるということがケアの最終的なゴールではないかと考えるようになったからです。その視点でコミュニティを考えると、人間の関係性というソフト面と同時に、ハード面として、まちの空間構造、まちづくりに視野が広がり、さらに雇用、生活の場としての地域と地域経済にまで話が及びます。

私はもともと、科学と宗教、生命観、死生観に関心があり、科学史・科学哲学分野を専攻しましたので、科学史・科学哲学の視点も踏まえてお話をします。

現在という時代をどうとらえるか

最初に、現在という時代をどう捉えるか、という視点から、歴史的な構造で、「ケア」「コミュニティ」という問題が浮上する必然性を考えたいと思います。まず3つの文脈で現在を捉えたいと思います。最初は数万年単位の人類史的文脈で、2番目は近代以降の数百年をポスト資本主義という文脈で、3番目は日本社会に固有の文脈で考えます。

1 | 人類史的な文脈

人類史的文脈で歴史を捉えると、「拡大・成長」と「定常化」が重要な座標軸になります。これがケア、コミュニティとも深く関わると思います。

「拡大・成長」期は、人間と自然の関係の中で、物質的な生産の量的な拡大が、社会の基本的な方向性になります。一方、「定常」期は「拡大・成長」が、ある種の資源・環境的な限界にぶつかって、人間と自然よりも、人間と人間の関係、コミュニティなどに関心が向かう時期、あるいは、外的な拡大より、内的な価値に関心が向かう時期だと思っています。

fig.01は、「拡大・成長」と「定常化」に基づく、人口学者デーヴェイ(Edward Smith Deevey)の仮説です。この仮説によれば、人類の歴史には3回の拡大期と定常期があって、1回目は100万年前(ホモ

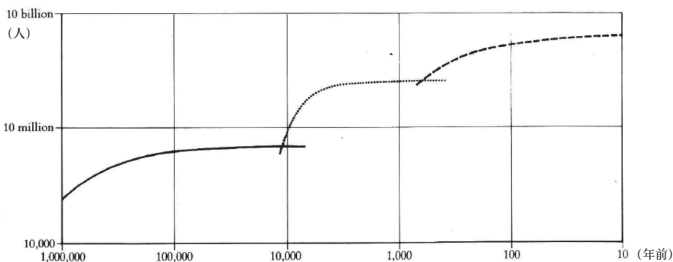
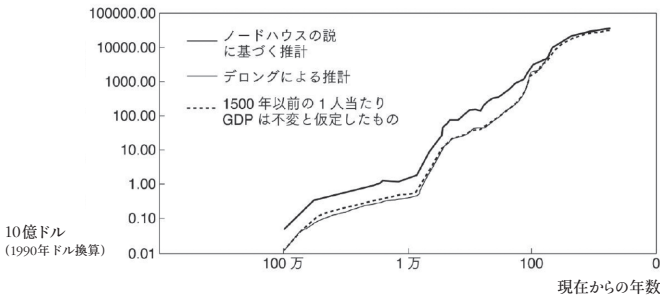


fig.01
世界人口の超長期的推移
(デーヴェイの仮説的図式)
出典 | Deevey (1960)。

01 | Karl Theodor Jaspers, 1949, "Vom Ursprung und Ziel der Geschichte."
カール・ヤスパース『ヤスパース選集Ⅸ 歴史の起原と目標』重田英世訳(理想社、1964)参照。

サピエンスなら約20万年前)に狩猟採集社会で拡大し、それが成熟・定常化した。2回目は約1万年前に農業が始まって生産が拡大し、やがて定常化した。3回目は300年ほど前からの近代社会・工業化社会で生産が拡大した。アメリカの経済学者デロング(J. Bradford DeLong)は、ここ数十万年くらいの1人当たりGDPの推移を計算して、この人口の動向に重ね合わせています[fig.02]。やはり大体3度のサイクルが示されています。現在は3度目の定常期に入りつつあります。このサイクルで注目したいのは、拡大期から定常期に入る時に、非常に大きな意識の革命、新しい価値原理が登場することです。最近の人類学・考古学で、「心のビッグバン」「文化のビッグバン」

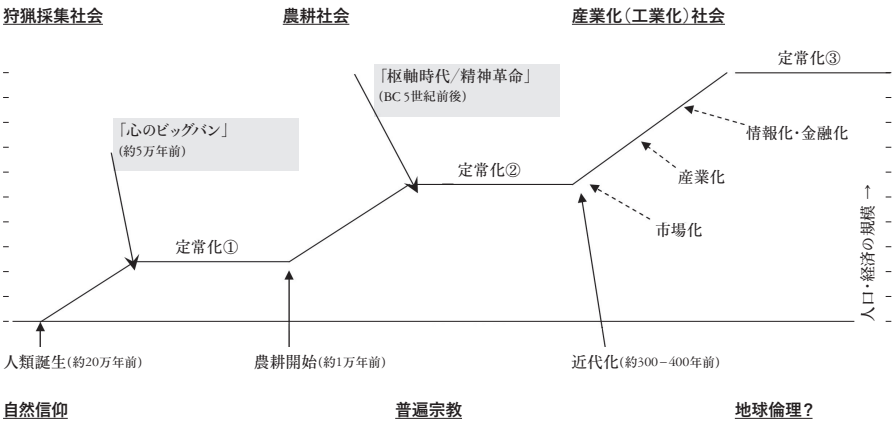
fig.02
超長期の世界GDP(実質)の推移
出典 | DeLong (1998).



あるいは「精神のビッグバン」と言われる現象です。絵画・彫刻といった芸術作品や装飾品などが、この時期に一気に現れています。たとえばラスコーやアルタミラの洞窟壁画などがそれですが、私は、狩猟採集段階で外へ外へと向かっていた人間の行動が、ある種の環境的限界にぶつかって、内側に目を向けるようになった結果ではないかと思います。農耕社会の時期でも、ドイツの哲学者ヤスパースが「枢軸時代」⁹¹と言い、日本の科学史家伊東俊太郎先生が「精神革命」と呼んでいる現象が紀元前5世紀前後に起こっていて、現在に続く普遍的な宗教や思想が地球上の各地で同時多発的に生じています。インドで仏教が生まれ、中国で儒教や老荘思想などが生まれ、中東ではキリスト教の原形である旧約思想(ユダヤ教)が生まれ、ギリシアではさまざまな哲学が生まれる。そうしたことが同時多発的に起こっています。

ではなぜ、このような現象が起こるのか。私の関連分野の環境史(Environmental History)における仮説によれば、この時期に世界中(ギリシア、中国、インドなど)で森林の枯渇や土壌の浸食といった最初の環境的・資源的限界に直面していて、物質的生産の外への拡大がある種の限界に達して、より内面的、精神的な価値に積極的な意味を見いだす「定常化」に移行した、その現れであるということです。それと同様の現象が、3度目の定常期——工業社会の「拡大・成長」期が、ある種の限界に達した——である今、起ころうとしているのではないか。つまり、現在は、価値観や世界観の分かれ目の時期ではないかと考えます [fig.03]。

fig.03
人類史における拡大・成長と定常化のサイクル



2 | ポスト資本主義という文脈

さて、ここ数百年を見ると、資本主義とその変容を考えざるを得ないのですが、それがまた「ケア」「コミュニティ」と深いところで結びついていると思います。ここで、資本主義とは何か、が前提になります。よく資本主義イコール市場経済と考えられますが、歴史家ブローデルなどは、市場経済が自由な人と人との交換であるのに対し、資本主義は強者が弱者を収奪するもので、資本主義と市場経済はむしろ対立すると言っています。私自身の理解では、資本主義の一番の本質は、市場経済プラス拡大・成長です。マルクスが、 $G-W \cdots P \cdots W'-G'$ と表わしているように、最初に持っていたお金(G)よりも、商品をつかって売って得たお金(G')が拡大している、そこに資本主義の特徴があります。ここで拡大・成長と私利の追求を肯定的に捉えるかどうか——これが「ケア」「コミュニティ」というテーマに深く影響します。つまり近代社会は、基本的には私利の追求というものを肯定的に捉えてきました。私利の追求を行うことが経済活動の活発化を通じてパイ全体の拡大につながって、他の人の利益の拡大にもつながる、と。たとえばオランダ出身の医師・思想家マンデヴィル (Bernard de Mandeville, 1670–1733)は著書『蜂の寓話 — 私悪すなわち公益』(1714)で⁰²、節約は美德ではなく、むしろ浪費とか私利を追求することが社会全体にとってプラスだという、非常に逆説的な主張をしました。つまり資本主義は私利の追求をうまく活用したシステムでした。しかしそれが根本的な限界にきているのが現在の状況です。

また興味深いことに、最近、さまざまな分野で、百花繚乱のように、人と人とのソーシャルな関係性、人間の協調的行動、あるいは利他性に注目した研究がなされています。単行本として刊行されているものをいくつか紹介します。藤井直敬『つながる脳』⁰³は、人間の脳の発達において、実は他者とのケア的な関係性が決定的な役割を果たしており、脳自体が非常にソーシャルなものであるという内容です。パットナム『孤独なボウリング』⁰⁴は、いわゆるソーシャル・キャピタル論で、社会的な関係性が決定的な意味を持っていると指摘しています。また、神経経済学者ポール・ザックは著書『経済は「競争」では繁栄しない』⁰⁵で、オキシトシンという愛情に関わる科学物質が最初から組み込まれているのが人間という生き物であると言っています。ボウルズ & ギンティス (Samuel Bowles & Herbert Gintis) の *A Cooperative Species* は、人間は協調的な行動をするところにその本質があるという、進化生物学的な視点を取り入れた経済学者による著作です。アマルティア・センとスティグリッツによる *Mismeasuring Our Lives: Why GDP Doesn't Add Up* と題された、GDPに代わる指標、幸福度研究関連の著作も2010年に刊行されています。このように、今、文系・理系を越えた学問分野で、人と人との関係性、ソーシャルな関わり、利他性、協調性に注目した研究がたくさん出てきています。

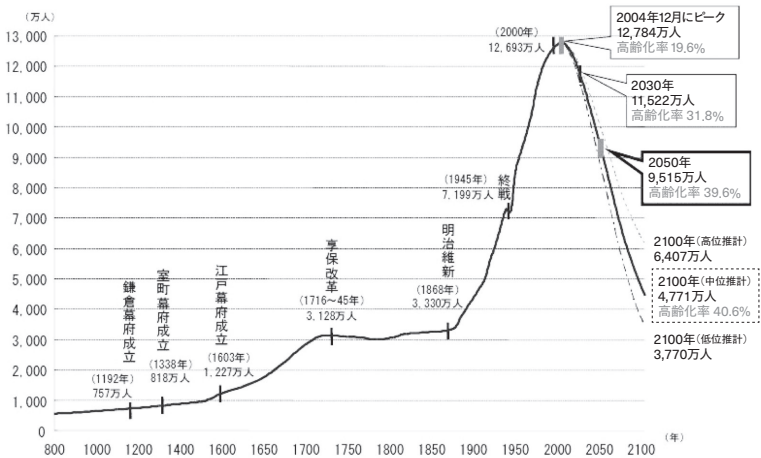
先ほど、拡大期から定常期に入る時に、ある種の意識の革命、新しい価値原理が起こると話しましたが、私は、この現象が、社会経済が「拡大・成長」を続けていた時代から、成熟期に向かっている時代構造の変化と不可分のものではないかと思っています。

3 | 日本社会固有の文脈

では、日本社会固有の文脈で、現在をどう捉えるのか。最近の人口減少社会を考えてみます。fig.04は平安時代からの日本の人口推移を表しています。江戸時代後半は約3000万人であったのが、明治以降は一気に線が直立するくらい急増して、2004年にピークを迎えます。2005年から減少に転じて、50年には1億人を切ると予想されています。非常に顕著なのは、いかに日本社会が急激な変化に晒されてきたかということです。黒船ショック以降、急激な人口増加、それから人口減少に転じると一気に高齢化も進む、この落差が非常に大きい。アジアの一国であった日本が「世界資本主義」に巻き込まれ、それに善くも悪くも急激に追いつこうとした。急激な人口増加の時代というのは、東京への中央集権制がどんどん高まり、資本主義経済が拡大・成長してきた時代です。

02 | 『蜂の寓話 — 私悪すなわち公益』 泉谷治訳 (法政大学出版局、1985)、『続・蜂の寓話 — 私悪すなわち公益』 泉谷治訳 (法政大学出版局、1993)。
03 | 藤井直敬『つながる脳』 (NTT出版、2009)
04 | ロバート・パットナム『孤独なボウリング — 米国コミュニティの崩壊と再生』 柴内康文訳 (柏書房、2006)
05 | ポール・ザック『経済は「競争」では繁栄しない』 柴田裕之訳 (ダイヤモンド社、2013)

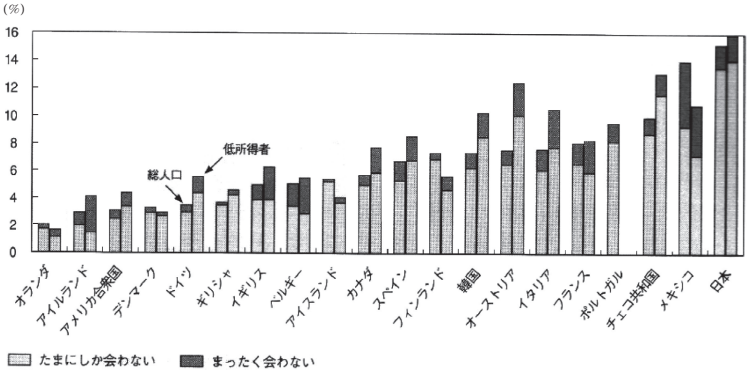
fig.04
日本の総人口の長期的トレンド
出典 | 総務省「国勢調査報告」、同「人口推計年報」、同「平成12年及び17年国勢調査結果による補間推計人口」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成18年12月推計)」、国土庁「日本列島における人口分布の長期時系列分析(1974年)」をもとに、国土交通省国土計画局作成



物質的な豊かさを得たものの、相当な矛盾や歪みをその中で抱えてきた。人々の孤立、「都市型コミュニティ」の不在があります。日本社会は集団の空気で行くので、集団を超えたつながりや原理が非常に薄い。

ミシガン大学の世界価値観調査 [fig.05]を見ると、残念ながらというべきか、やはりというべきか、日本では「社会的孤立」度が一番高い。これは個人に、家族を越えたつながりが無いということで、日本では「社会的孤立」度が一番高い。これは個人に、家族を越えたつながりが無いということで、日本は集団単位で物事が動く傾向の強い社会なので、この結果は、社会が非常に矛盾を抱えていることを示しています。日本社会の「コミュニティ」の在り方は、基本的に「農村型コミュニティ」に傾斜しがちです。私の理解では、2000年に及ぶ稲作の生産構造の中で培われてきた人々の関係性・行動様式が、急激に都市化した社会に適応不全を起こしているのではないかと思います。都市化した現在の日本社会では、都市型コミュニティ的な個人がしっかりと自立しながら、家族を越えてつながることが重要で、これが公共性にも、そして「ケア」のゴールにもつながります。では、そのような人と人をつなぐ価値原理を一体どこに求めたらよいのか？

fig.05
先進諸国における社会的孤立の状況
出典 | World Values Survey, 2001.



ポスト成長／ポスト資本主義における地域と公共政策

1 | 資本主義の進化と新たな福祉国家

現在の社会を考える上で無視できないのが、慢性的な失業です。年齢階級別失業率の推移 [fig.06]を見ると、若者の失業率が高齢者よりも高い。これは日本だけではなく、先進国に共通した現象です。なぜそうしたことが起きるかと言っていえば「構造的な生産過剰」です。資本主義は、供給(生産)を拡大することを基本的な使命としています、人間の需要は無限に拡大するとは思えない。これだけモノが溢れる状況で、需要はある程度成熟してくる。そうすると生産過剰が生じ、その結果人手が余って、失業が生じる。それが貧困につながっていく。象徴的に言えば「過剰による貧困」です。かつての貧困は「欠乏による貧困」が基本でした。生産過剰による失業が慢性化すると今

度は、仮に仕事を持っている人も失業の不安にかられて、「もっと働かなければ」と、逆に過労死が生じたりするといった悪循環に入ってきます。1972年に「成長の限界」という報告書を出したローマクラブが、90年代に出した報告書では「楽園のパラドックス」と表現してこうした状況を説明しています。生産性が最高度に上がった社会では皮肉にもほとんどの人が失業する——一見すると尋常には受け入れがたい主張のように見えますが、考えてみれば、労働生産性が高まって、少ない労働力でたくさんの生産物ができればそのぶん失業が増える、というあたりまえの状況のことです。日本でこの「楽園のパラドックス」が生じています。

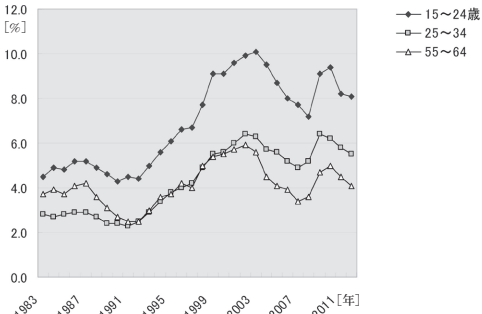


fig.06
年齢階級別失業率の年次推移
出典 | 労働力調査より作成

ですから発想の転換が必要です。私は、大別して3つの要素が重要だと思います。

1…「過剰の抑制」→労働時間の削減、ワークシェアなどです。それから2…「再分配」→これは社会保障にもなります。そして3…「コミュニティ経済」→「コミュニティ」に「経済」を付けています。これらの活性化が一つの方向になると思います。

日本社会の現状を示すいくつかの指標を見てみます。経済格差を表すジニ係数(小さいほど平等度が高く、大きくなるほど格差が大きい)を見ると、日本は、以前はフランスやドイツと同じくらいだったのがだんだんと大きくなって、OECD加盟国の平均値を超えて、イギリスやアメリカに近づいています。従来の社会保障の枠組みでは機能なくなっています。

fig.07は社会保障政策の国際比較を表しています。横軸が高齢者以外の労働年齢人口に対する社会保障(医療を除く)で、縦軸が相対的貧困率です。日本(JPN)は、メキシコ、アメリカ、トルコと並んで、高齢者以外の層に対する社会保障——私はこれを「人生前半の社会保障」と考えます——が小さくて、相対的貧困率が高い。日本はこの「人生前半の社会保障」の充実が課題であると思います。

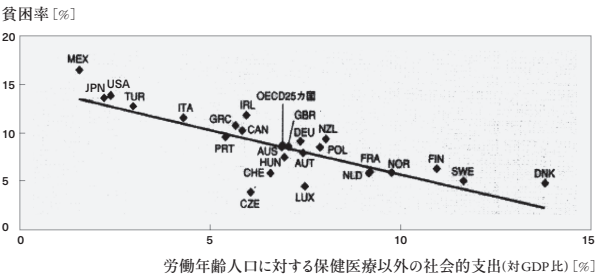
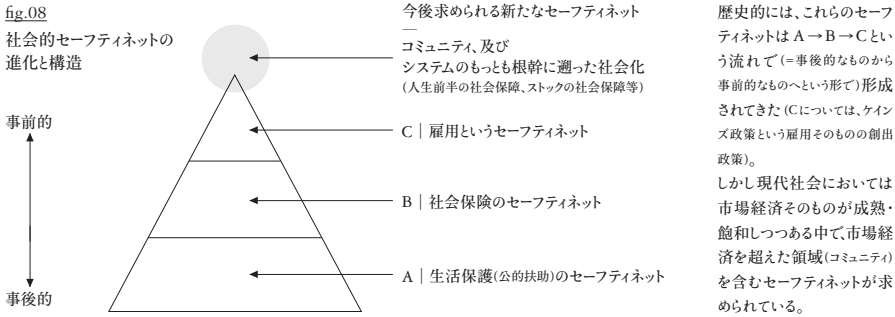


fig.07
相対的貧困率(労働年齢人口と
社会支出の相関(国際比較))
出典 | OECD『世界の社会政策の
動向』2005年

なぜ「人生前半の社会保障」が大切なのか。fig.08をご覧ください。今の社会において一定の生活を維持するには、この図のピラミッドの一番上の雇用を得る必要がある。でも人は病気になったり、失業したり、年を取って退職したりするので、その場合には真ん中の社会保険のセーフティネット——医療保険、失業保険、年金とか——が機能します。ところが実は社会保険というのは、雇用を得て社会保険料を払い続けていたことが前提ですので、仕事を離れている状況が長期にわたると機能しなくなる。そこで、ピラミッドの一番下のセーフティネット——生活保護(公的扶助)——が機能するという構造です。このセーフティネットのピラミッドは、歴史的にはピラミッドの底辺から順番に、整えられてきました。市場経済がイギリスから広がっていく中で、1601年に「エリザベス救貧法」と言われる生活保護に相当するシステムがまず整備された。それから19世紀に、産業革命を経て工業化する中で、この生

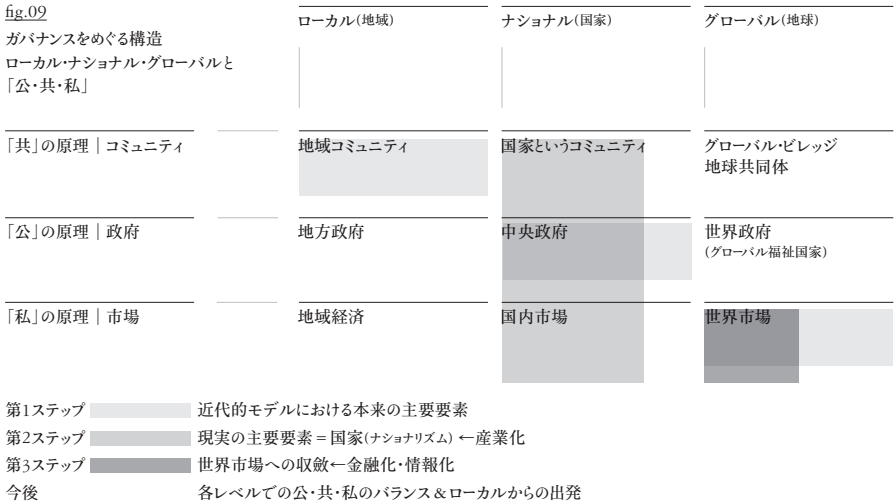


活保護だけではとても機能しなくなった。19世紀後半には、事前に保険料を払って事故に備えるという社会保険のセーフティネットが、ドイツで整備され、世界に広がった。ところが20世紀になり1930年前後の世界恐慌では雇用そのもの、ピラミッドの一番上の部分も失われる。そういった時代背景から、生産過剰を抑えるには社会主義しかないという、マルキシストの主張が広がってきたのですが、そこに資本主義の救世主のような形で現われたのがケインズです。ケインズは政府がさまざまな公共事業を行うことで需要を拡大することができ、それによって雇用をつくり出すことができると主張して、20世紀後半は、ケインズ主義的福祉国家と言われるシステムが大きな成功を見せて、成長とともに所得格差の是正・平等化が進みました。

それが、今世紀に入り、リーマンショックなどが起こって、拡大成長によって好循環を維持してきた資本主義ないし福祉国家のシステムが行き詰まってきました。市場経済を拡大するという方向が限界に達してきたのです。そこで、このピラミッドの一番上、最も根源に遡ったセーフティネットが必要になってきます。一番上のセーフティネットは、大別して2つありますが、その一つが「コミュニティ」です。最も根源に遡ったセーフティネットとは、システムの最も根幹に遡った社会化ということで、人生前半の社会保障とかストックの社会保障で、事後的な救済からより早い段階での、事前の支援という方向に移ってきた。こういう中でコミュニティがセーフティネットとして機能する可能性が浮かび上がってくると考えています。

2 | グローバル化の先のローカル化 ― ポスト成長 / 人口減少時代における

さて、コミュニティの次に重要なのが「ローカル」という視点です。「ローカル」は人々の生活保障や福祉を考えていくにあたっての、空間的なユニットです。福祉を、ローカルなレベルで考えるか、国家のレベルで考えるか、グローバルなレベルで考えるか。fig.09は横に空間的なユニット(ローカル、ナショナル、グローバル)が並んでいます。縦は、一番上に「共」、コミュニティです。真ん中が狭い意味での「公」で、政府です。一番下が「私」で、市場経済です。もともと近代社会の前提となっていた構



図は、この左上から右下にかけての組み合わせで、コミュニティは基本的にローカルなレベルで機能し、政府はナショナルなレベルで、市場経済は、究極的には国境を越えて無限に広がっていく、グローバルなレベルに行き着く。ところが実際に近代社会の基調となったのは、ナショナルのレベル(中央政府)だけでなく、コミュニティでも、『想像の共同体』という有名な著作があるように、国家が前面に出るような構図です。市場経済の領域でも、ケインズ政策とも関連しますが、ナショナルエコノミー(国民経済)という言葉があるように、国家レベルの経済が中心になる。とくに工業化社会では、「公・共・私」のあらゆる領域がナショナルレベルで機能してきたのが実際の展開です。その後、金融化、情報化が進む中で、右下のグローバル市場があらゆる領域を席卷するようになって、現在に至っています。

これからの時代は、むしろローカルなレベルから出発して、ローカルなレベルの「公」と「共」と「私」のバランスをとりながら、ナショナル、グローバルに積み上げていく社会の在り方が求められていると思います。なぜそう言えるのか、を考えるために、fig.10を見てください。これは明治以降、日本で社会資本が整備されていった流れを、S字カーブで示した図です。最初のS字カーブは鉄道。第2のSは高度成長期を象徴とする道路で、自動車産業などと一体となって整備されていく。第3のSは廃棄物処理施設とか公園とかです。この図は、1990年代に通産省(当時)が出した報告書からの引用で、これからの第4のSは、この時点ではクエスチョンになっています。しかし、ここで注目していただきたいのは、実は第1、第2、第3の社会資本はどれもナショナルレベルで考えられるべきものだったということです。鉄道をどう敷設するか、道路をどう整備するかは、とうていローカルなレベルでは完結しない。どうしてもナショナルレベルにならざるを得ない。つまり中央政府の、霞ヶ関でのプランニングが重要だったわけです。今後、第4のSがあるとすれば、それはまさに福祉、環境、文化、まちづくりといった、おのずとローカルな性格なものです。中心がローカルなレベルに移っていかざるを得ないという状況があると思います。言い換えれば、経済の拡大、グローバル化が成長した先の、定常期、成熟期の中で、ローカライゼーションが前面に出ざるを得ないし、「時間軸に対して空間軸が前面に出る時代」、あるいは「地域からの離陸から、地域への着陸へ」と言えるのではないかと思います。

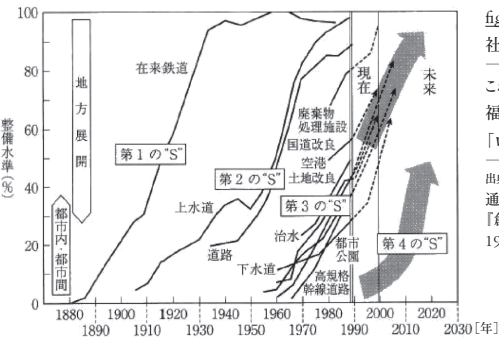


fig.10
社会資本整備の4つのS字カーブ
—
これからの時代の「第4のS」は
福祉・環境・文化・まちづくりなど
「ローカル」なもの
—
出典：
通産省
『創造的革新の時代』、
1993年

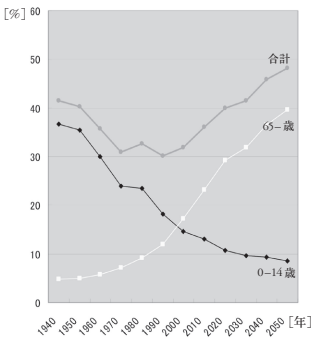


fig.11
「地域密着人口」の増加
—
人口全体に占める
「子ども・高齢者」の割合の
推移(1940～2050年)
子どもは15歳未満、
高齢者は65歳以上。
—
出典：
2000年までは国勢調査。
2010年以降は
「日本の将来推計人口」
(平成18年12月推計)。

具体例を挙げますと、最近の学生や若者は、ローカルなものへの志向が非常に強くなっています。私は、この志向は歓迎すべきもので、支援策が重要だと思っています。また、失業率の都道府県別ワースト10を見ると、大都市圏が多く含まれている。つまり、高度成長期のような、「大都市圏に行けば仕事がある」といった構造が変容していて、その意味でもローカライゼーションを考えることが要請されています。

fig.11は『「地域密着人口」の増加』を示した図です。ライフサイクルの中で、子ども期と高齢期は地域との関わりが非常に強い時期で、地域に密着します。そこで、子どもと高齢者という、地域に関わりが深い世代を足した人口を「地域密着人口」と呼びます。図は、現在をはさんで過去50年とこれからの50年の子ども、高齢者、地域密着人口(子ども+高齢者)の推移を見たものです。地域密着人口は、綺麗なU字カーブを描いています。これまでの50年は減り続けていましたが、今後は、

2050年くらいまでにかけて増え続けていく。その中心は高齢者です。つまりこれからは地域が、いやがうえにも重要度、存在感を増していく。また若い世代もローカル志向が高まっていますので、希望を込めて言えば、こういうローカライゼーション、地域を基盤としたコミュニティや地域経済が活性化していくと思います。それが今日のテーマである「市民ボランティア、地域ガバナンス、公共政策」とも重なってくると思います。

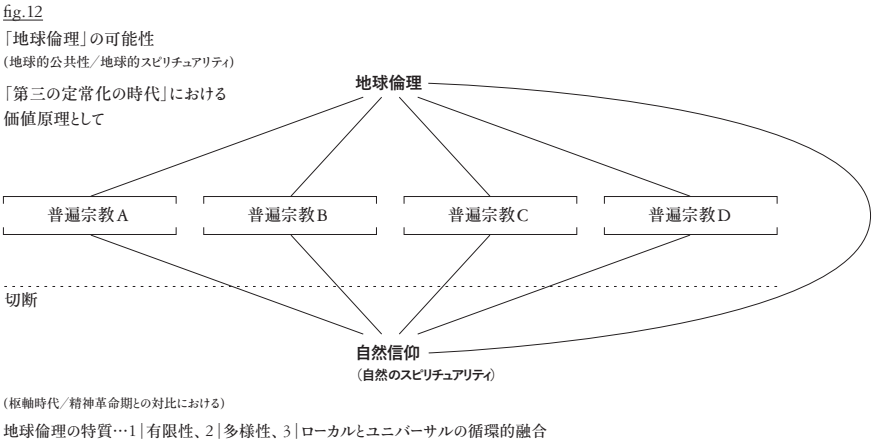
実質的には、私自身は「コミュニティ経済」というテーマを考えていまして、私利の追求が原理であった市場経済と、相互扶助が基調をなしているコミュニティを、もう一度つないでいく試みが、これからの課題だと思います。また、「経済と倫理の統合」、現代的に言えばソーシャルビジネスのようなテーマが重要になってくると思います。

理念的には「緑の福祉国家」のような社会像を考えていけると思います。ローカルレベルの経済の、地域内循環から出発して、ナショナル、グローバルへと積み上げていく方向性で、福祉と環境経済がうまく両立できれば、ある種の定常型経済・社会の実現につながります。最近、私自身が進めているのが、「鎮守の森・自然エネルギーコミュニティ構想」です。日本には、神社やお寺がそれぞれ約8万カ所あり、教会も含めてですが、福祉と宗教は歴史的にも深い関わりがありますので、そういった経緯も踏まえて、これを自然エネルギー拠点の整備と組み合わせて、地域の再生を図る企画プロジェクトです。

一例ですが、岐阜県石徹白地区では、Uターン、Iターン組の若者が中心になって、地域再生機構のNPOをつくって、小水力発電をベースに地域の再生を図る活動をしています。副理事長で30代の平野彰秀さんは、東京で外資系のコンサルティング会社で働いていた方ですが、「自然エネルギーは自然の力をお借りしてエネルギーをつくり出すという考え方であり、地域で自然エネルギーに取り組むということは、地域の自治やコミュニティの力を取り戻すことであると、私どもは考えております」と話しています。やはりこういった「経済と倫理の統合」という考え方が、これからは重要になると思います。これは「鎮守の森」の神社ですが、お寺でも教会でも、宗教性は重要だと思います。個人とコミュニティ、ひいては自然と、その根底にあるスピリチュアリティをつなげて考える試みが、これからの課題だと思います。

3 | グローバル定常型社会と地球倫理の可能性

これからが定常化の時代であることや、枢軸時代との類似性も含めて、これからの時代の価値原理を考えることが課題だと思います。もともと人間が持っていた自然信仰のようなものがあり、それから枢軸時代にさまざまな普遍宗教、キリスト教や、仏教や、その他の宗教が生成しましたが、こういったものはそれ自体大事にしながら、さらに、今日3度目の定常期に入って、「地球倫理」とでも呼べるような理念、価値原理を生成することが重要だと思います [fig.12]。



Session 06

市民ボランティア、地域ガバナンス、公共政策 | I

Discussion 1

稲垣久和 広井先生の発題では、まず文明論的な視点による「拡大・成長」から「定常化」という、生産の在り方に伴う転換を指摘され、それからより具体的な、これからのローカルでのコミュニティ形成の問題に触れられました。さらに「枢軸時代」には仏教、キリスト教などの伝統宗教が誕生しましたが、今後、コミュニティベースになる時代には、宗教性、スピリチュアリティ、自然信仰などがベースとなり、新たな「地球倫理」が求められているとのことでした。

効率性概念の転換

河幹夫 「こういう生活がいいな」と思い描くものが、人それぞれ全然違うとしたら、結果的に求められる社会像や社会福祉像も変わってくるでしょう。そのような価値観をどのように共有するのが課題になると思いますが、その共有の障害になるのは、効率の良さに対する認識が人によって全然違うということだと思います。例えば、ゆとりがある方がいい仕事ができるという人と、勤勉でないといい仕事ができないという人がいます。くだらないことのように思われるかもしれませんが、私がこうしたことが大事だと思ったのは、ゆとり教育について議論された時です。あの時、ゆとり教育派の人たちはゆとりが何かを生みださだろうと言い、アンチゆとり教育派の人たちは、そうかもしれないけれども自分にはそれがよくわからないからやっぱり詰め込もうと言ったように思います。教育の世界でも、「わからないけど、ゆとりはいいよね」という意見と、「わからないから排除するのが効率的だ」という意見が、結局ぶつかって、わからないままに、ある面では効率的な教育が進められています。福祉の世界もそういうところが、たくさんあると思います。

たとえばワークシェアリングについての議論の場合、ワークシェアリングによって仕事がうまく分配されているからいいのか、みんながゆとりを持てるからいいのか、それとも生産過剰を防ぐからいいのか、それがわからないままにワークシェアリングを推進しようとするけれども、日本の社会はあまり賛成しない。この場合にもどこかで効率論が邪魔をしている気がします。

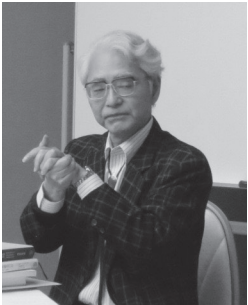
「効率」というような概念をどう考えるか。ローカルというのは、はっきりいって非効率ですよ。科学・合理性・効率に対して非科学・非合理性・ゆとりのような構図がある。本当は、ゆとりと科学や合理性が組み合わされると広井先生の議論に近づくと思うのです。その意味では「効率」と「コミュニティ」ということについてどのように考えていらっしゃるのかをぜひお聞きたいのです。

広井 核心に関わる点をご指摘いただきました。私も「効率性」あるいは「生産性」という概念を根本から変える必要があると思います。何が効率的かは、時代状況によって変わる。拡大・成長期、あるいはモノが不足している時代に求められる効率性と、モノが過剰になった成熟期・定常期に求められる効率性は違う。ところが、日本は高度成長期の成功体験が染みついているために古い効率性概念に囚われていて、それが逆説的に、社会全体を非効率にしているようです。

たとえば、労働時間の長さや労働生産性を横軸・縦軸で国際比較をすると、労働時間が長い国のほうがむしろ生産性が低い。工業化社会はベルトコンベアー労働がイメージさせるように、長時間働くほどたくさんモノができるけれども、今の時代は、ゆっくりと休養をとってリフレッシュするほうが、新しいアイデアも出て、生産性なり、創造性も高まると思うのです。それが古い時代の効率性に囚われてしまっている。

環境政策の分野では、労働生産性から環境効率性へという議論があります。つまり以前は人手が足りなくて資源は余っていたので、少ない労働力でたくさんモノをつくるという、まさに労働生産性が

稲垣久和



06 | 渋沢栄一(1840-1931)が¹1916年に著した書。論語つまり倫理と、算盤つまり利益を両立させて経済を発展させるという「道徳経済合一説」という理念を打ち出した。

求められていた。ところが今では逆に、慢性的な失業が生じていて、人手は余っている。逆に資源は足りない。だから、人はどんどん使って、資源は節約するという、環境効率性が重要になってくる。それが福祉とも非常に関係しています。福祉は非常に労働集約的な分野で、雇用創出にも一番寄与する。しかし、古い労働生産性の尺度でいうと、人ばかり使って生産性が上がらない、効率の悪い分野です。しかし、今の時代状況、新しい生産性・効率性の物差しからすると、生産性が最も高い分野だとも言える。ある意味で北欧などはそういうところにうまく資源配分をシフトしてきたからこそ、経済もプラスに働いている。河先生が言われた、効率性や生産性の概念を転換していけるかどうか、問題の根に共通すると考えます。

稲垣 「効率性」は、経済概念のようですが、河先生は少し別の意味で使っていらっしゃるでしょう。

河 「勤勉性」みたいな感じです。

稲垣 では「倫理性」ではないですか。

河 そうかもしれません。だから先ほど、ゆとり教育の例を挙げました。ゆとり教育批判をする人たちが、効率性の概念を使っているのか、勤勉性を言っているのか、よくわからないんです。

広井 日本人はもともと勤勉だったかという、江戸時代の終わりとか明治の初めに日本を訪れた外国人が口を揃えて、「これほどのんびりしている人々を見たことがない」「ヨーロッパやアメリカ人は本当によく働くのに、何で日本人はそうしないのか」と言っている。今と逆です。だから勤勉性は本来的な国民性ではなくて、時代がつくるものだと思います。拡大成長路線を突き進んでいった中で、勤勉性は定着して、日本人はよく働く(極端な場合には、過労死するまで働く)とかいうのが社会の規範とか習慣になったわけです。それが今、再び変わり目をむかえているのだと思います。

日本人の勤勉性のはじまり

稲垣 『論語と算盤』⁰⁶ ではないですが、儒教倫理では勤勉に働くことを美徳としています。二宮金次郎(の像に象徴される姿勢)は、別に急成長した明治以降からではなくて、すでに江戸時代には模範的なものだった。だから、私は勤勉さというのは、論語的な、日本的な儒教の中にあったような気もするのです。働かないでいると何か罪悪感を覚えてしまうような。

広井 これはまたすごく重要な点ですね。ただ、江戸時代の日本人にその儒教的な勤労倫理がどこまで浸透していたかという、今の、「会社のためにすべてを尽くす」というほどには至らなかったように思います。

岡村直樹 儒教思想は主に武家社会に大きな影響を与えましたが、一般市民の中には、そんなに浸透していないと思います。庶民の生活は、もとのんびりしていたような気がします。

稲垣 ただ農民ですよ、二宮金次郎は。

河 二宮尊徳はそうですね。

広井 逆に、ああいった人が注目されるようになってきたのは、そうじゃない現実があったからとも言えると思います。もちろん一定の勤勉性はあったとは思いますが、強い労働規範は明治以降強くなった面があると思います。

鎮守の森を中心とした地域コミュニティー

河 先ほどの鎮守の森の話ですが、私が今いる大学(神奈川県立保健福祉大学)の初代学長は、阿部志郎という社会福祉学者です。彼は30年前から、鎮守の森が減ってしまったことと、地域福祉は大きな関連があると指摘しています。阿部志郎は尊敬するクリスチャンの先輩で、「なぜ鎮守の森を持ちだすのか?」と思いましたが、阿部先生にしてみると、地域福祉論と鎮守の森はかなり密接なの

河幹夫



です。しかも信仰論とどこかでつながっていると思うのです。そういう意味で広井さんの鎮守の森構想とどこかでクロスしているかもしれないと心底思いました。阿部志郎の鎮守の森論を非常に不思議に思っていたんですが、地域福祉論をずっと考えてきた人には重なってくるのかもしれない。

広井 今のお話は印象深いです。阿部先生が鎮守の森と地域福祉を言われたことに非常に感銘を受けました。かつて南方熊楠が、^{みなかたぐま}国家神道に異を唱えて、本来の地域に根差した自発的な住民の自治の拠点としての鎮守の森ということを言っていました⁰⁷、そういったものは、大事な点としてあると思うんです。

稲垣 中央主権的な国家神道ではなくて、地域の分権的なローカリティ、コミュニティ形成ですね。

広井 そうです。

岸川洋治 1970年代に工業化が進んで、鎮守の森をつぶして工場をつくったのが間違いだという文脈と、鎮守の森がコミュニティの中心であってそれを失ったからコミュニティが崩壊しているのではないか、という文脈です。

稲垣 ヨーロッパでは、コミュニティの中心に教会(大聖堂)があって、日本の場合は鎮守の森、門前町、お寺という感じですね。

河 私の大学時代の福祉関係の恩師が無教会派のクリスチャンで、彼は、鎮守の森が大嫌い。五人組と鎮守の森がつるんでいる、と言っていました。したがって彼は地域福祉を日本では一切信用しなかった。だから鎮守の森とか、五人組とか、地域福祉をどう考えるかは、クリスチャンであっても違って、けっこう重要なポイントかもしれないですね。

稲垣 五人組というのは、相互監視制度ですね。

広井 そうですね。

稲垣 地域が監視社会になってしまった時代が日本にはある。そういうトラウマがあって、鎮守の森とは直接関係ないけれども、それと混同させられて、そして自然崇拜みたいなのが出てくると、何かまた回帰していくんじゃないかという、危機はあるでしょうね。

広井 それはよくわかります。私もここは非常に注意すべきだと思います。

本来の鎮守の森は、明治以降の国家神道に組み込まれていったものではなくて、地域に根差した自然信仰や、地域コミュニティと一体となったものです。もちろんその場合でも、それが何かある種の監視社会的な、閉鎖的なコミュニティになる恐れは、常に意識しながら考えていく必要があります。ただ単に古いものに回帰するのではなく、今は、しっかりした個人の自立を踏まえて、そういったことを再評価していく作業が必要になると思います。

グローバルからローカルへ——「緑の福祉国家」

稲垣 fig.09で説明された、ローカル、ナショナル、グローバルというのは、非常に意味が明快ですね。今はローカル、地域福祉コミュニティであると。真ん中にあるナショナルが、とくに日本の場合に、明治以降ものすごく肥大化して、中央集権化が進み、ローカルなものをつぶしていった。右下にある世界市場もいろんな意味で私たちを圧迫している。地域コミュニティ、中央政府、世界市場の斜めの並びは、健全なスタイルで、中央の縦(国家、中央政府、国内市場)が、近代において肥大化したことが問題だという提起が先生にはあるわけですね。

広井 ええ。なぜそういう変化が生じるのか、を考えた場合に、経済構造が根底にあると思います。つまり、農業中心の時代は、農業は基本的にローカルですから、自ずとローカルがユニットになります。工業化社会は基本的に、先ほども鉄道敷設とか道路とかの例を話しましたが、ナショナルレベルの空間単位にフィットする。金融化になるとむしろ国家の枠も越えて地球レベル、グローバルになる。それが行き着くと、人々が別のものを求めて、ある種の反転が起こり、新しい形でローカルが浮

07 | 南方熊楠(1867-1941)は、博物学者、生物学者(とくに菌類学)、民俗学者。多くの神社の鎮守の森が失われることを危惧し、神社合祀政策(1906年に勅令)への反対運動を起こした。

岸川洋治



上するのではないかと考えます。

稲垣 世界全体の流れがあるなかで、もう一つ日本の特性、良くも悪くも、儒教倫理みたいな伝統がありますよね。そういうものの中の今後の日本の設計を考えておく必要があると思います。

広井 そうですね。大きくは、「緑の福祉国家」と言いましたが、ローカルレベルの経済循環、コミュニティから出発して、ナショナル、グローバルへと積み上げていって、その中で地域間の格差を是正したり、再分配などを行いながら、一つの社会像を実現する。私の視点から見ると、ドイツ、デンマーク(オランダもそれに少し近いように見えますが)などは、それに近い試みなり方向にかなり進んでいると思います。「緑の福祉国家」のような社会像は、決して夢物語ではない。

やや単純に独断が入った整理ですが、アメリカと日本は「非環境志向・非福祉国家」になっている。「通常の福祉国家」といえるのがフランスで、スウェーデンは環境近代化的な「緑の福祉国家B」。ドイツやデンマークは分権的、脱生産主義的な「緑の福祉国家A」とモデル化できると思います。こういう中にローカル・コミュニティのテーマも位置すると思います。

河 そこていうとまさに、先ほどもお話があったように、社会保険が我が国の社会保障の中心です、いい悪いは別にして。社会保険というのは、ある面で中央国家を前提にしたシステムです。ローカルでやると非効率ですから。そういう意味では、お金の世界に限って言えば、社会保障というのは国家的につくられていると思うんです。しかしサービスの世界ではローカルにしなければダメです。お金の世界の論理(政府の論理)と、サービスの提供の論理を、どういう理論で分けるかが問題です。もちろん社会保険そのものをやめるという考え方もある。すると完全にローカルになります。そのとき、なおかつ国家レベルでの社会保険制度をつくるかどうかという議論をどこに位置付けるかだと思うんです。

稲垣 社会保険に、半分くらい税金を入れるとか、そういう議論があるから国家レベルになるというご指摘ですね。

広井 今の河先生の話には、fig.08が関係します。社会的セーフティネットは、この図のピラミッドの下から順番に整備されてきました。一番下の生活保護は、イギリスで Poor Laws(救貧法)ができます。それからドイツで社会保険制度ができ、そしてケインズ政策へと下から上に広がっていった。この流れは、実は国家事業の範囲が拡大していった流れでもあったわけです。最初は最低保証だけだったのが、社会保険をやり、さらには雇用もつくりだすというように、国家の役割が拡大していった。私はこの流れがピラミッドの頂点まで上り詰めて、逆に上からだんだんローカルに移っていくのではないかと考えます。雇用もローカルで考えていく、もしかしたら社会保険もローカル単位でやる。そして、究極的には生活保護まで地域ごとにやる。理論上はそういうところまで進む可能性があると思います。

河 今の医療保険にしろ介護保険にしろ、政策当局が意識しているかどうかはともかく、結果的には、今、広井先生が言った流れに乗っていて、地域化が進んでいる。私は、広井先生がおっしゃったことが正しいのではないかと思います。世の中は、「社会保険は中央国家がやるものだ」と考えているけれども、サービスとお金を一体にして考えるなら、むしろローカル化していくほうが、非効率ではあるけれど、いいのではないか。そういう議論をする必要がある時代だと私は思います。

地域主権の確立と地方の課題

稲垣 その通りだと思うのですが、日本の一つの大きな問題が、ローカル・ガバメントにあります。分権とか、地域主権ということはものすごく難しく、先ほどの例に出たドイツとかオランダ、北欧などは、地域主権・地方分権が徹底しているから、福祉国家の形があるわけです。日本最大の問題ですよ、地域主権が本当にできるか、というのは。

河　どこか中央政府が言っていることを前提にしてやっているから、地方議会ではヤジをとばす暇があるんです。

稲垣　私は市民的公共性を自治との関係で考えてきて、民衆のお上(=公)依存の強さを繰り返し感じてきました。公共哲学の難しさをずっと感じてきたわけです。

広井　ただ、長いタイムスパンで考えると、日本社会は、本来的には分権的だと私は思います。江戸時代はまさに分権的で、明治以降に急激に人口が拡大する中で、ものすごく中央集権が強くなり、しかもそれが効率的だった。国家を挙げて道路や鉄道を整備するのが効率的だったからそうなったわけです。それが百何十年か続いて、今、また状況が変わろうとしている。本来的には日本社会は分権的だと思うので、各地で本当に百花繚乱のように、地域再生の試みが起こっているの、そのへんに希望がある。

稲垣　確かにそうですね。一方で、日本の自治体の半数がこの50年間で消滅するという議論もあるでしょう⁰⁸。

広井　はい。これは今日のテーマとは別ですけど、東京のような大都市圏と、地方都市の農村部では、「コミュニティ」といっても、様相がかなり違います。「地域再生・活性化に関する全国自治体アンケート調査」では、「現在直面している政策課題で特に優先度が高いと考えられるもの」という問いに対して、小さな自治体・農村部では「人口減少や若者の流出」、中堅の地方都市だと「経済不況や産業の空洞化」、大都市圏になると「コミュニティのつながりの希薄化や孤独」といった回答がそれぞれ多くを占めるといった具合で、コミュニティをめぐる課題の現われ方が違う。

岡村清子　本当に地方都市の再生は、すごく難しい課題です。もう一つは、若い学生がみんな帰りたいというのは、家に引き込まれているのではないかと思います。誰が後を継ぐのかということで、子どもが3、4人もいた頃はいいんですが、一人っ子だと、「帰ってこい」と。それがいいほうに向かえばいいと思うんですけど。

広井　学生を見ていると、地域志向が強くなる傾向にあると思います。統計を見てもそうです。『ヤンキー経済』⁰⁹ がベストセラーになったりもしている。ただ、実際には雇用や生活保障の面でハードルがあるので、それを政策的に支援していけばいいと思います。人口増加期は大都市や東京に人が集中したわけですが、それとは逆の流れがこれからは進んでいくのではないかと、希望や期待を持っています。

岡村(清)　住宅もそうですね。もう東京でローンを組んで購入するなんて考えられない。

稲垣　20代、30代の女性が少なくなっ、年寄りばかりになっている。それで自治体が消滅してしまうという議論です。先生が言われるような形になるには何かのモチベーションが要るのではないですか。

岡村(直)　Uターンだけでなく、Iターンが起これないと、本当の意味でローカル・コミュニティはつくられないと思うのですが、その辺になると、今度は政府の役割になると思います。

都市と農村

広井　そうですね。言い換えるとこれは「都市と農村」というテーマです。私は「都市と農村」というテーマをもう一度、正面から考えるべき時期だと思います。戦後の日本は、基本的に農業は海外に委ねて、都市化と工業化を進めてきた。ところが、実は都市は農村なしにはやっていけない。マテリアルフローの面からは農村があってこそ都市がやっていけるので、都市と農村の共存をもう一度考え直していく必要があると思います。都市と農村は非対称の関係にあって、放っておくと都市がどんどん豊かになっていくので、それを再分配する、自然エネルギーの固定価格買取制度とか、農業補助金とか、いろんな仕組みを併せて考えていく必要があると思います。

08 | 日本創成会議の人口減少問題検討分科会(座長・増田寛也)が2014年5月に発表した提言(増田レポート)で、少子化と人口減少が止まらず、「2040年までに全国の市町村の半数(896の市区町村)が消滅する」と指摘した。

09 | 原田曜平『ヤンキー経済』(幻冬舎、2014)。サブタイトルに「消費の主役・新保守層の正体」とあり、「若者がモノを買わない」時代に、唯一旺盛な消費欲を示しているのがヤンキー層(鉄パイプ片手に暴れ回る不良文化ではなく、ファッションも精神もマイルドな新ヤンキー)であるとして、「給料が上がりても絶対地元を離れたくない」などといった「ダラダラ系地元族」などとしてマイルドヤンキーを分析している。

岡村清子



10 | 「地域福祉の展開と位置づけ——コミュニティ・ケアをめぐる」(『ジュリスト』537、pp.154-158、1973年6月25日号、有斐閣)

11 | 「グロスアラカワハピネス(Gross Arakawa Happiness: GAH)」とは、荒川区民総幸福度。荒川区は、区民の幸福度を数値化し、区政の指標とするため、2006年から調査研究を進めている。

稲垣 なるほど。グローバル経済の中では日本には農村はなくていいかのような議論になってしまってますね。

広井 今まではそうでした。これは先進国と途上国という話と構造は共通しています。

自治会の活性化

岸川 ローカルのさらにローカルの話でぜひ聞きたいのですが、私は横須賀基督教社会館というところで働いておりまして、コミュニティセンターです。戦後直後からですから70年くらいの歴史があります。ここで今やっている仕事は、子ども、高齢者、障害者に対する直接的なサービスと地域づくりです。住民が主体となった活動を展開する、これに力を入れていまして、私は、ずっとそちらに関心を持って仕事をしてきました。40年くらい前から、住民の人たちが自主的な活動をするようになって、日本で最初の高齢者給食が始まった町でもあります。

阿部志郎前館長が、1973年に『ジュリスト』に「コミュニティ・ケア」の定義を書きました¹⁰。その中で「ある一定の地域の中で」という要素があります。それから「住民相互の助け合いによる活動を基盤として公私の専門機関が連携して活動するのがコミュニティ・ケアだ」とも言っています。その理論の背景には、私どもの施設での地域の活動があると見ていますが、これからもますますそのことを実践しようと思っています。

先ほどの、コミュニティ、国家、世界につながる図にのっとって考えると、小さなコミュニティができて、さらにある程度のコミュニティができ、結局それが市町村であり、国家であるとなると、やはり小地域での活動をしっかりやっていかないといけないと思います。その際、自治会というのが今30万くらい日本にあります。その30万ある組織を活かさない手はない、と思うのですが、先生の著書の中であまり自治会には触れていないような気がします、その辺りの理由が何かおありですか。

広井 私は、自治会は再評価して、肯定的に捉えていいと思います。たとえば、私も少し関わりがありますが、「グロスアラカワハピネス」¹¹で有名な東京都の荒川区が、幸福度指標の試みをやる中で、自治会、町会の役割を非常に重視しています。高齢者の見守り活動や防犯です。それで荒川区は孤独死がほとんどないことを自慢にしています。また、横浜市も意外に自治会の加入率が高い。つまり、五人組ではないですが、一時期、自治会・町会はやや古い地縁的な共同体として、マイナス面を指摘される傾向がありましたが、また、NPOのような新しいコミュニティとの葛藤¹²があったりして、常にうまくいくわけではないですが、そういう自治会・町会が持つ問題点も意識しながら、うまくNPOと連携したり、荒川区のような形で活性化したりするのは意味があると思います。

岸川 倉沢進先生がコミュニティ形成には3つの方法があると書いておられます。自治会自体が活性化に努めるのが1番で、2番目としては、自治会は旧態依然とした古い体質だから、それとは別に新しい、ボランティア団体を形成する。3番目は、自治会とボランティア団体の2つをミックスするべきだと。私はそこだと思っています。私の実践も、自治会があって、新たなボランティアグループがあって、それで自治会が活性化されていく。他にもいくつかの事例を経験してまして、そんなところを少し全国的に広げていったらどうだろうかと考えています。

広井 2つをミックスするのは、非常に有力な案だと思います。伝統的な自治会・町会・町内会が持つマイナス面を、うまく、現代のミッションに即した形で、しかも若い人も入りやすいように変えながら、新たなNPOなどとミックスしていくことは、すごく重要だと思います。

定常期に入る先進国と新興国

岡村(直) 先生の冒頭のお話では、ビッグストーリー、ユニバーサルな展開の中で、今は第3の定常

期に向かいつつあるとのことでした。日本や西ヨーロッパを頭に思い浮かべると、まさにそう思うのですが、たとえば中国・インド・ブラジルを考えると、まだ定常期に入っていないのではないかと思います。その辺の落差が、ユニバーサルエコノミーや金融を考えると、フリクションを生み出していると思うのですが、中国やインドも定常期に向かっていて先生は思われますか。

広井 それは大きな問題です。今、JICA(国際協力機構)の理事長をしている国際政治学者の田中明彦さんが、1990年代に『新しい「中世」』¹²という本を出されました。私はそれを先駆的だと思います。中世は定常期で、国家以外に、教会などさまざまな多元的な団体が活動してネットワークを結んでいた。これからの世界はそうした、新しい中世ともいうべき方向に向かうのではないかという指摘で、私もその通りだと思います。ただ問題は、新しい中世になろうとしている西ヨーロッパや一部の先進国に対して、中国とかインドのような新興国は、近代化の真っただ中にあるので、その両方がぶつかり合う。それが、ここ数十年の世界の問題だというのは、その通りだと思います。ただ、実は中国も拡大しているように見えて、2020年代の半ばには、一人っ子政策の影響などもあって人口が減少期に入っていく。そうした意味では、意外に早くアジアも定常期に入っていくと思います。大きな話になりますが、2050年あたりまでが、日本も高齢化が進んでいますけど、正念場になると思います。

稲垣 今日は先進諸国に焦点を当てたお話でしたが、中国が日本以上に超スピードに高齢化になっているので、日本の高齢福祉のモデルを輸出しようというビジネスもありますね。

岡村(直) アメリカはたとえばメキシコのような発展途上の国がすぐ隣にあって、福祉の労働を考えると、アメリカの福祉はメキシコの労働人口に依存している部分があって、家や老人ホームのケアテイカーの3分の2以上はメキシコ人です。いびつな国際関係がそこにある。日本もその方向に向かいつつあるような予感がします。

広井 私は、「介護は賃金が低いから外国人労働者参入」というのは筋として違うと思っています。むしろ介護労働者の賃金・報償を上げて、その分野が国内にも発展していくようにすることが国内雇用にもつながっていく。北欧はそういう方向です。

森田哲也 たとえば新興国では、ローカルになると、地方政府どころか中央政府の手も届かないので、サービス自体がない。そうするとセルフヘルプ、自治会というよりも、住民たち自身で10円20円とお金を貯めながら、自分たちのお金で自分たちの保険制度をまとめていく、そういう制度が実際に動いています。インドでセルフ・ヘルプ・オーガニゼーションは進んでいます。いろんな自治体を見ると、比較的にサステナブルだなと現場に行くと思いました。まさに政府に頼らないやり方が逆にアフリカやインドでは実践されていて、先進的ではないかと思ったんです。あえて、それを民営化しなくても、地の力というか、本来の意味での自立を促したほうが効率的だと私は思いました。先生は今後の流れとしてのボトムアップに関してどう思われますか。

広井 私はそのような方向に大賛成で、共感します。国際協力で海外に行った人に話を聞くと、むしろ日本のコミュニティのほうが危うい、途上国と言われる地域のほうがしっかりしていると言います。そこがしっかり機能していれば、効率的でもあるし、サステナブルです。それが農業から工業化社会になると、どうしても国家、ナショナルの比重が大きくなるのですが、その中で、ローカルなものを維持していくことが重要でし、日本はそこを疎かにしてしまったので、今、問題が出ている。ローカル・コミュニティをいかに積極的に位置づけていくかが非常に重要でし、それが効率的であり、サステナブルであるのは、まさにそのとおりだと思います。

今の政権と若者の動向

稲垣 ローカル礼賛というのか、アフリカのほうがローカルのコミュニティが発展しているということでした。私は先ほど「新しい中世」という議論をされたときに思ったのですが、fig.09のローカル、ナショ

12 | 田中明彦『新しい「中世」』(日本経済新聞社、1996)

森田哲也



ナル、グローバルという中で、今、われわれはもう一度、ナショナルなレベルからローカルを回復するという議論をしていますが、「新しい中世」という議論は政治学の議論ですね。先生の今日のお話は、工業化社会とか、わりと経済のフローのものだったと思いますが、政治の世界で、ローカルからナショナルに転換するのは17、18世紀頃、まさに工業化社会の中でだと思えます。私は、「新しい中世」という議論に、経済よりも政治のレベルから見たときに、関心があります。中世は、巨大な近代国民国家における国家主権という概念はまだないですから、私の言葉では「領域主権」ということですが、それぞれの地域地域で、こじんまりと暮らしていて、巨大な主権国家は存在しなかった。そういった中世後期から近代初めくらいの、わりと多様な主体が生活圏として営まれていて、経済もまだグローバルにはならない、そういう時代のほうがむしろ私たちに必要だと思うのです。今の日本は、とくに今の政権を見ているとそれに逆行しすぎていて、ものすごくナショナルなものに強く向かっているの、その辺がこれからの課題だろうという議論をしているわけです。

広井 今の政権は本当にそうです。私から見ると、まさに高度成長期の成功体験が染みついていて、ひたすら拡大・成長、しかもナショナリズムで、国中心で今後も考えようとしている。ただ、これは決して世代論ではないのですが、だんだんと高度成長期モデルしか考えられない層から次の世代へと移っていくわけですし、若い世代のローカル志向も生まれています。やはり時代構造が、人の価値観とか世界観をつくるということがけっこう大きいと思います。高度成長期の日本の非常に特殊な成功体験モデルからいかに脱却するかが非常に重要で、しかも日本は変化のスピードが非常に大きいので、難しいと思いますが、今、若者だけに限らず各地域で地域再生の動きが出ているのを見ると、新しい流れや風が吹き始めていると、一方で確かに感じます。

岡村(直) 若者のローカル化は私もあると思いますが、並行して若者の右翼化もある。今、日本は中国とすごく仲が悪いのですが、大なり小なりすごくその影響を受けています。中国の覇権主義に対する危機感で、日本も軍備強化すべきだということと、中国の経済成長を見ながら、何で日本はああではないんだと、昔は日本もああだったのにと、思っている人がすごく多いと思います。その中で若者も右翼化する、そうした何か微妙な力関係があると思うのです。

広井 現状はそうだと思いますね。そもそも今の日本と中国を同じレベルで比較すること自体が問題です。ドイツとフランスは戦争を繰り返していたのが、ヨーロッパ統合の中心となったように、歴史認識や見方を変えてやっていくしかないと思います。

日本にあるもの失ったもの

傍聴参加者A だいぶ前ですが、私が発展途上国に行っていたころ、向こうの人と話すと、「いやあ、日本はいいね。健康保険もあるし、失業保険もあるし、本当に素晴らしい国だ」とよく羨ましがられました。ですから「確かに私はいい国にいるんだ」と思って、感謝していました。皆さんのお話をうかがってましたら、地域がしっかりすべきだということですが、皆さん方はいい国家に自分たちはいると思いますか。それとも、日本はつまらない国なのか、どう感じておられますか。

岡村(直) 高齢者福祉を考えると、見守りとか、広い意味でのスピリチュアルケアの部分と、先進医療が、バック・トゥ・バックでくっついている。だから見守りに関しては、回顧主義的なロマンティズムを感じる部分があり、でも日本の、高い先進医療を考えると、日本でよかったと思う部分と、そこに微妙なミックスがあると思います。だから、さっき話題になったインドに、私が住みたいかという、先進医療を考えると躊躇します。しかし、では日本に、精神面でのケアや素晴らしいコミュニティがあるのかとも考える。その両方を私たちが欲しがっているのだとすると、どう折半するかは難題だと思います。

石野徳子 結局、日本は高度成長期に、物質的な豊かさを得ますが、それによって、互いを思い遣るとか、弱い人を助けるとか、大切な何かが失われた気がします。それが一気に失われたのではなく、

石野徳子



競争によって成果が求められる中で、誰かを犠牲にしなければやっていけないというのが、社会でも企業でも、学生にも求められた。そういうものが学校のイジメの問題であったり、夫婦の離婚であったり、過労死であったり、今のパワハラとか、目に見えない負の遺産をもたらしだと思います。

医療においても、確かに技術はかなり高くなっておりますが、今の社会は少子高齢社会なので、ケアを受ける人が増える。でも働く人口は減る中で、本当に働く人が生きがいと誇りを持って働いているのかというと、精神的な満足度は決して高くはないと思います。私も自分自身が仕事をしていますから、確かにその仕事で収入を得ていますが、でも「豊かですか?」と問われたら、決して自分は精神的に、豊かとは言い切れない。

30年ほど前に、エジプトの病院に派遣されたときに、医療の水準は日本と比べたら格段に低かったのですが、働いている人も、今、亡くなろうとしている本人も、家族も、笑顔が全然違う。彼らが貧しい中でも本当に人間として神の御加護の中に生かされているのが、ありありと見えて、私たちが人間として、何を目標に生きるのかということを、その当時すごく考えさせられました。

稲垣 石野先生は精神科の医療・看護にずっと携わっておられます。いわゆる心の病というのでしょうか、今すごく増えている、そういう社会でもあるわけですね。

石野 もう一点、都市と地方が話題になっていますが、都市は医療環境もよく交通の便もいいですが、人間的なふれあいは少なすぎる。では農村かというと、たぶん人間的なきずなは都会に比べればやや深いものがあると思うのですが、生命の安全を守る医療は非常に少ない。もう少しそういう落差を縮めていく必要がある。私は若者がローカルに戻る気持ちがわかるような気がします。自然や、きれいな空気とか、自分を癒してくれるものがきつとあるのだと思います。もう少し都市と農村のギャップを縮めながら、そこで生きる人たちが、生きていてよかったという人生が送れる、そういう国家のあり方に持っていかなければならないと思います。

広井 同感ですね。私も海外から帰って東京の地下鉄に乗ると、みんな暗い疲れた顔をしていると気づく。これにはさまざまな要素——労働のあり方とか社会的なもの——があると思いますが、やはり精神的な拠り所が大きいと思います。拡大・成長から定常期の時代へ、と言いましたが、高度成長のなかで失ったものをいかに回復するかという、非常に大きな新しい課題があります。先進国と途上国、日本国内の都市と農村の構造は非常によく似ていて、その両方が持つ長所をうまくつないで、人口減少時代、成熟期に、これまですべて都市に向かっていくベクトルをもう一度逆方向に回していくことで、つながっていくと思います。

森田 最近フランスの経済学者ピケティの『21世紀の資本』という本が、アメリカですごく売れている。その内容は、これまでの200、300年の歴史の中で、税収入などをいねいに定量的に調べ上げて、資本主義を推し進めると、ほとんどの富が数パーセントの資本家に集まってしまうことを実証して、政府は贈与税だとか金持ち層への増税を進めないと、健全な意味での資本主義は成り立たないと指摘しています。アメリカでそれを称賛している機運もあるみたいです。

それを見ると、今は定常の時代に来ているとしても、今までの資本主義の上に定常化がある。だから今までの資本主義のオルタナティブを探すよりも、その上に乗ったうえで次の時代を見ていく必要があるのではないかと思います。そうしたマクロの視点で見たときに、増税だとか、今の日本政府にどういう政策を先生は求めておられるのか。コミュニティも大切ですが、政府としての役割はこれからどうなると思われますか。

広井 ありがたい質問です。それは今日の話に不足していた部分で、簡単に言いますと、私は基本的に高福祉・高負担型の社会が、あえて言えばヨーロッパ的な社会モデルが基本的にいいと思っています。そういう意味では消費税も、私はヨーロッパ並みの15%以上に早くしないといけないと思っています。ただ日本が今直面している問題はもっと手前にあって、もう1000兆円もの借金を将来世代に全部先送りしている。これは相当無責任な話です。そういった意味でも、現役世代が負担

して将来世代に先送りしないこと。そして、世代間の配分ということで、人生前半の社会保障と言いましたが、公的教育費が日本は先進諸国の中で最低だったり、若者失業率が高かったりするので、もっと人生の前半期に保障を手厚くするべきです。それから、日本の年金は報酬比例なので、高所得者、お金持ちの高齢者ほど高い年金がもらえる制度になっていて、社会保障が逆進的な機能を果たしている面もある。若い世代、子育て世代に回すとか、全体としては高福祉・高負担的であっても、将来世代への先送りを避け、世代間の配分を考えることが重要だと思います。

稲垣 おっしゃるとおりだと思います。長時間になってしまいました。これで終わりにします。どうもありがとうございました。

ケアのあり方を考える | 老人福祉・介護福祉・幼老統合ケア

岡村清子

このたびはタイトルにあります、私が最近関心を持っていることをお話させていただきます。なぜ「ケアのあり方を考える」のかといいますと、「幼老統合ケア」と呼ばれる「高齢者と子ども」を共にケアするあり方に関心をもったからです。

広井先生は、すでに2000(平成12)年頃に建物の合築や統合ケアのことを書かれていますが、私は、WAC(長寿社会文化協会)の研究会に参加し、これまでは全国的には知られていなかったさまざまな取り組みを知りました。2005(平成17)年に行われた介護保険法の改正により小規模多機能ケアが急速に展開しています。小規模で多様かつ柔軟なサービスを展開し、一人一人ができる限り住み慣れた地域での生活を継続できるような「小規模多機能型介護」「夜間対応型訪問介護」などの「地域密着型サービス」が創設される、地域包括ケア体制を支える地域の中核機関として、新たに、1…総合相談支援、2…虐待の早期発見・防止など権利擁護、3…包括的・継続的ケアマネジメント支援、4…介護予防ケアマネジメント、の4つの機能を担う「地域包括支援センター」の設置を進めることになりました。⁰¹

幼老統合ケアにはメリットもデメリットもあります。メリットは地域社会は老若男女で成り立っており、共にケアをするというあり方は自然です。さらに、実際に携わる方たちの中には自分の退職金の全額を投じたり、「自分はこれまでの生活さえできればいい」と自分のミッションとしての取り組みを実践しておられる方もいます。これらの実践についての結論から申しますと、現在では、ある程度経済的に恵まれた人でなければできないですが、何らかの国の支援があれば広がる可能性もあるのではないかと思います。

ここでは主に老人(高齢者)福祉、介護保険制度、そして地域三世代共生ケアを中心にお話したいと思います。

社会保障の展開と老人(高齢者)福祉

1 | 老人福祉法

1963(昭和38)年に老人福祉法が成立しましたが¹、その社会・経済的背景として昭和32(1957)年版厚生白書「貧困と疾病の追放」では、「日本は先進国である」と述べていました。1946(昭和21)年に旧生活保護法が成立し、1947(昭和22)年から50(昭和25)年にかけて児童福祉法(1947年)、身体障害者福祉法(1949年)、新生活保護法(1950年)が成立して新たに社会福祉三法体制となりました。戦後対策としての戦争孤児や戦争により障害を負った多くの男性や戦争に巻き込まれた人々のために、児童福祉法と身体障害者福祉法が成立しました。このような社会保障制度が施行され、精神障害者福祉法(1960年)、老人福祉法(1963年)、母子福祉法(1964年)の制定により福祉六法体制となりました。

老人福祉審議会の「老人福祉施策の推進に関する意見」(昭和37年12月5日)の前文では「老人が一般国民に対して特殊な身体的、精神的ハンディキャップに起因する弱者であること、その過去に

01 | 「地域における新たな支え合いを求めて―住民と行政の協働による新しい福祉」『これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書』1-46(厚生労働省、2008)
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/03/s0331-7a.html>

においては社会に貢献してきた者であることの2点に着目し、これを社会的に保護し、優遇すること」(増田・小島、2000)と述べており、老人福祉法の基本目的となっていました。このように当時は、弱者であっても過去には社会に貢献してきた人々としてとらえられていました。なお、当初の施策としては、ねたきり老人対策(1969年)、ひとりぐらし老人対策、老人福祉電話設置・老人介護人派遣(1971年)、老人ホームでの食事サービス事業の創設(1973年)などが実施されました。

2 | 老人ホーム体系の模索

老人ホームの体系については、1972(昭和47)年に中央社会審議会が「老人ホームのあり方に関する中間意見」をまとめ、「『収容の場』から『生活の場』へ」「福祉ケアとして老人の心身機能に応じた内容と個人のプライバシーを重んじる一般の住宅水準に劣らない内容を有するようにすべき」などの意見が示されました。当初、老人ホームの入所者にはスティグマというネガティブがあり、家庭で介護が受けられない高齢者が多くみられました。実際に奥多摩に老人ホームを建築する時には人々からの反対運動がみられました。現在では、「是非いらしてください」と歓迎しています。また、現在では誰でもが利用できる生活の場となり、さらに、福祉におけるケアの分野においてはプライバシーが守られるようになりました。

また養護老人ホームの個室化が進みましたが、当時は4人部屋で、実際に4畳半に4人で暮らしている部屋もあり、些細なことでのトラブルがみられました。一方で老人ホームの地域開放が進み、東京都内でも入浴介助や地域に居住する人々の介護等を支援するようになりました。

基本は在宅処遇原則で、当時、ねたきり老人調査とか、コミュニティケアなどの調査が実施されましたが、当時の主な施策は老人福祉施設への入所とホームヘルパーの派遣が中心でした。さまざまな在宅サービスも広がりましたが、経済的な弱者や虚弱老人が対象でした。このような中で、1983(昭和58)年に施行された老人保健法により、老人保健という立場からの機能訓練が始まりました。

また、先ほどの一部の低所得の高齢者だけではなく、多様な老人福祉サービスの主体としての民間企業などが参入し、多くの高齢者にサービスを提供するようになりました。当初の社会福祉サービスの利用は措置制度による厳しい審査があり無料で提供されていましたが、現在では、市場に開かれており、スティグマという社会的弱者としてのあり方は払拭されています。

このように、地域の特性に応じて必要ときに誰でも(普遍性)、どんなニーズでもいつでも(多様性・柔軟性)利用できる、そして自立の場(接近性・地域性)としての、従来の老人ホームとは異なった新たな方向性へと展開しました。

3 | 高齢者福祉の新たな展開

高齢化が進む中で、痴呆性老人の問題が新たな問題となり、痴呆という用語は後に認知症という名称になりました。介護問題についての調査が実施され、要介護者は「軽度」、「中等度」、「高度」、「非常な高度」に分類されましたが、当時は、「嫁」が主介護者の役割を担い「犠牲」となっていることが指摘されました。また、1986(昭和61)年には民生委員による全国調査が実施されて、痴呆性老人の問題が浮上しました。

現在では、QOL(クオリティオブライフ)が求められていますが、措置制度の時代には貧困者や身寄りがいない人たちが対象であったことも影響してか、おざなりにされがちでした。QOLという考え方により、「収容」から「入所」へ、「欠陥」から「障害」へと用語が新たに使用されるようになりました。その後、「障がい」「障害」という用語も使われています。1987(昭和62)年には、「社会福祉士及び介護福祉士法」が成立しましたが、この頃から介護の社会化に伴う介護労働者の不足が大きな問題となり、老人福祉サービスの提供主体の多様化が進みました。たとえば武蔵野福祉公社の発足の際には、「福祉が

有料とは何ごとだ!』という反対意見がみられましたが、『有償住宅福祉サービス』という名称で、公益財団法人武蔵野福祉公社により開始され、2015(平成27)年3月に終了しています。

介護福祉の展開

1 | 介護保険制度の展開

介護保険制度では、『必要な人にはすべて、誰もが』利用できる保険という形が求められます。当時は、介護保険を制定するために『福祉の計画化』による様々なプランが策定されました。1980年代には『高齢者保健福祉推進十カ年戦略』(ゴールドプラン)が、90年代は『新ゴールドプラン』が登場しました。在宅福祉サービスは市町村が、施設福祉は都道府県が窓口となっていました。『在宅福祉サービスも施設福祉サービスも一本化』して市町村でさまざまな施策を展開するようになりました。しかし、市町村で独自の福祉サービスを展開することは難しく、都道府県による『高齢者保健福祉計画』や『高齢者健康福祉計画』が策定され、老人保健法等が改正されました。また、新たに『福祉人材確保法』や『看護婦等人材確保法』が制定されて、どのように人材を集めていくのかが、1990年代頃から問題になっていましたが、現在では、ますます人材不足となっています。

1994(平成6)年の『21世紀福祉ビジョン』ではさまざまなビジョンが打ち出されました。『国民誰もが、身近に、必要な介護サービスが手に入れられるシステム』の構築がうたわれ、高齢者の介護に必要なサービスを総合的に提供できるシステムや、本人の自立のために最適なサービスが選べるような利用型のシステム、質の高いサービスが提供されるシステム等です。また新ゴールドプラン⁰²も1994(平成6)年に策定されました。

同年に、公的介護保険制度の創設に向けて、社会保障制度審議会社会保障将来委員会からさまざまな提案がなされました(『第2次報告』)。その中で、『当面の基盤整備は一般財源に依存するとしても、財源を主として保険料に依存する公的介護保険制度を導入する必要がある』と社会保険方式による公的介護制度の導入の必要性が指摘されました。また、1994(平成6)年の同時期に、高齢者介護・自立支援システム研究会による『新たな高齢者介護システムの構築を目指して』と題する報告書がまとめられ、応益負担や保険料の負担が求められるようになり、これまでとは異なった方式になりました。

すでに措置制度で特養に入所している方たちは従来通り継続して利用していますが、新たに介護保険制度に移行してからは、利用者にとっては混乱がみられました。その後、社会保障制度審議会の『1995年の勧告』が出され、1995(平成7)年には『高齢社会対策基本法』⁰³が策定されました。

2 | 介護保険法の制定と改正

老人福祉法から介護保険法へという流れの中で、『措置から契約へ』『権利性の明示』『保険料を負担する人たちが受け取るという保険給付の権利』、そして『サービスの標準化』など新たな展開がみられ、民間事業者の参入が進みました。また介護保険法では、老人福祉と老人医療を一本化して、介護という共通の新たな制度ができました。介護保険は、介護サービスを受けるための制度であり、1…原則65歳以上が対象(例外として16の特定疾患の対象:40歳以上)、2…介護度によってサービス利用に限度がある、3…認定がおりないとサービスが受けられない、という内容となっています。

介護保険制度のお金の仕組みを fig.01 に示します。問題は、低所得者層でした。福祉の社会化をめざした基本理念はよかったのですが、施設入所の希望者が多くみられ、みんな待機者リストに登録していました。経済的に余裕のある方は有料老人ホームの利用も可能ですが、低所得層の多くの方たちは利用が難しく、1970年代に私が訪問した特養の例では、措置制度による貧困世帯

02 | ホームヘルパーの6.8万人の増員、デイサービスやショートステイ、特別養護老人ホームについても目標量を大幅に上回る、高齢者保健福祉推進十カ年戦略(ゴールドプラン)の全面的な見直しがされる。
03 | 高齢社会対策基本法は、基本理念に『公正で活力ある社会』、『地域社会が自立と連帯の精神に立脚して形成される社会』、『健やかで充実した生活を営むことができる豊かな社会』の構築をあげている。

fig.01
介護保険制度のお金の仕組み

税金 50%	保険料 50%
市町村 12.5%	市町村 20%
都道府県 12.5%	
国 25%	国 30%

税金:
施設等給付の場合は国20%、都道府県17.5%
保険料:
人口比によって国と市町村の割合が認定される。

04 | 2009年に群馬県渋川市の老人福祉施設「静養ホームたまゆら」で火災が起こり、入所者10人の死亡がみられた。施設は無届けだが実質的な有料老人ホームであった。運営していた元理事長に対して、埼玉地裁は2013年に、業務上過失致死罪で禁錮2年(執行猶予4年)の判決を言い渡した。

05 | 改正の主な点は、①「予防重視型システムへの転換」、②改正前の「予防給付」を、対象者の範囲、サービス内容・マネジメント体制などを見直し、③「新たな予防給付」の対象者として、要介護1の者を要支援2として、対象を拡大した、④2005年10月から介護施設入所者の食費・住居費の全額負担の導入、など。

06 | 伊藤周平『介護保険を問いなおす』(ちくま新書/筑摩書房、2001)

07 | 上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理・神野直彦・副田義也編『ケア その思想と実践』第5巻『ケアを支えるしくみ』(岩波書店、2008)所収。

08 | 杉沢秀博・杉原陽子・中谷陽明『介護保険制度の評価—高齢者・家族の視点から』(三和書籍、2005)

09 | 東大作『縛らぬ介護』(華書房、2001)

の方が多くみられました。介護保険の場合には所得との関連はみられませんが、待機者リストは多数となっています。2009(平成21)年に「たまゆら」という施設で火事がありましたが、被害に遭った人たちは、老人福祉法の時代には優先的に入所できた人たちです⁰⁴。老人福祉法の時代には利用料は無料から月額23万円まで細かく区分されており、高所得者は高額となり、低所得者は無料の人もおり、月額平均4万円程度の費用で入所していました。

介護保険法では要介護認定により要介護度が決定し、それぞれの要介護度に応じたサービスが提供されるが、実際には介護サービスを受けられない人が多くみられ、2005(平成17)年に介護保険法が改正されました⁰⁵。これまでも様々な改正がなされて来ましたが、本稿と関連した改正が「地域密着型サービス」です。このサービスは、独居高齢者や認知症高齢者の増加に伴う在宅支援の強化で、統合ケアや地域包括支援センターの設立、居住系サービスの提供などが可能となりました。また、平成23(2011)年度には改正介護保険法が成立し、新たに保健師、地域における介護予防マネジメントや総合相談の業務などが開始されました。

介護保険法の問題点は、『介護保険を問いなおす』⁰⁶で指摘されているように、介護保険施行前からの問題が顕在化したといえます。介護保険導入前より提供されるサービスは減少し、家族の負担の増大、社会福祉従事者の過重労働や低賃金の問題、サービス事業者の経営難などが問題となっていました。介護現場にはあきらめや無力感が漂い、高齢者自殺、老老介護の夫婦心中事件、孤独死等、地域社会全体への荒廃につながり、生活不安や社会不安が深刻化しているという現状もみられました。

とりわけ大きな問題となっているのは、介護労働者の労働力不足です。「介護保険の通信簿」という論文⁰⁷では、介護保険は「介護の社会化」実現への第一歩であり、「自立支援」の思想であると高く評価しています。「介護の財源が増えた」とか「権利性が増えた」と評価される点もありましたが、これまでの期待が失望に変わりつつあり、実際には保険料を払っているのに利用できないという点では大きな問題となっています。「措置」の時代ならば、「自分は該当しないので仕方ない」と納得することもできます。また、社会保険はたとえば医療保険なら健康保険証さえ持っていれば、保険診療での診察が可能です。しかし、介護保険制度では待機リストのままで利用できないという事例が多く、どのように解決して行くのかは今後の課題となっています。

3 | 介護の社会化は進んだか

東京都三鷹市では、介護保険制度施行前の1996(平成8)年と98(10)年、施行後の2002(14)年と04(16)年に、繰り返しの横断調査を実施しました。その結果、在宅サービスの利用者(割合や利用回数)は施行後の方が増えているという結果でした。在宅サービスの利用拡大という意味では介護の社会化は進みつつあるといえますが、東京都老人総合研究所の調査結果⁰⁸によると、サービスを利用しても、「家族主体」の在宅介護態勢のままで、「在宅サービス主体」への転換が図られていないことが指摘されていました。今後、介護者の身体的・精神的・社会的負担をどう軽減するのが大きな課題となっています。

また介護保険制度と利用者及び家族のQOLですが、介護保険制度施行以後は身体拘束は原則として禁止され、QOLという視点からみると徐々に向上しています。身体拘束については、以前は当たり前ベルト等で縛りつけていましたから、現在ではだいぶ改善されたと思います。『縛らぬ介護』⁰⁹が出版され、福岡では「抑制廃止福岡宣言」(1998年)、2000年5月には「身体拘束ゼロ作戦」が表明され、QOLという視点では徐々に改善されてきました。先にも述べたように、一方で、2004(平成16)年から「痴呆」という呼び名を「認知症」と改め、2005年度からは新たな言葉を普及させる意味もあり、「認知症を知る1年」と位置づけられました。

地域三世代ケアの意義と課題

2005(平成17)年の介護保険法改正では新たに「小規模多機能型居宅介護」が公表されて「地域三世代共生ケア」と呼んでいます。2005(平成17)年に法律で制定されましたが、具体的な取り組みは、地方から発信されました。「このゆびと一まれ」(富山市)はこれまでもマスコミを中心に「富山方式」として紹介されてきました。その他に、「ホームひなたぼっこ」(宮城県岩沼市)や「NPO 法人地域の寄り合い所 また明日」(東京都小金井市)など多くの事例がみられるようになりました。ここでは、「地域三世代共生ケア」とは何か、その意義と今後の課題についてみていきます。

1 | 小規模多機能ケアとは

「小規模多機能型居宅介護」とは、fig.02に示すように、「通い」を中心とした訪問やグループホームでの家族のような生活や介護のあり方です。かつて、近所づき合いがみられたように、みんなで集まって地域のコミュニティで雑談し、障害の有無にかかわらず、子どもの参加と一緒に交流しあう場となっています。当初は子どもの参加という発想はなく、「通い」を中心に要介護者の様態や希望に応じて、随時「訪問」や「泊まり」を組み合わせることでサービスを提供することにより、在宅の生活を継続して支援しています。基本的には在宅で最後まで暮らすという考え方です。1事業所の登録者は25人までの定員制となっており、「通い」と「泊まり」の上限は各15人と9人です。従来の在宅サービスは利用時間に合わせて支払額が決まっていたのですが、小規模型はサービスの種類や利用時間にかかわらず1か月単位の定額です。このように障害を持って家に閉じこもりがちなたちが集まる場となっており、画期的な試みといえます。

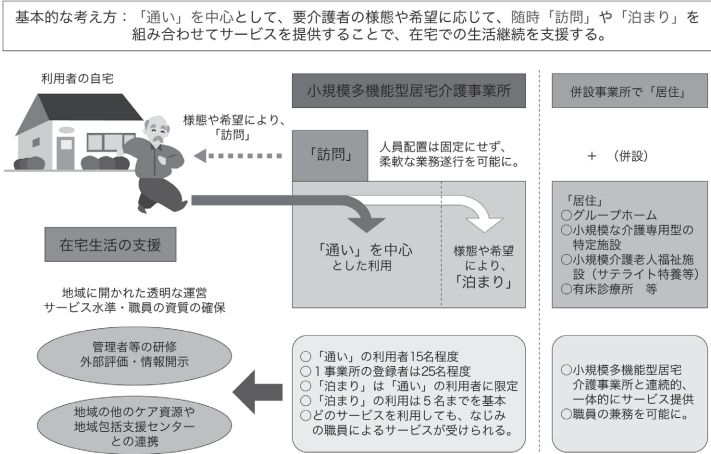


fig.02
小規模多機能型居宅介護（仮称）のイメージ

2012年度より、「サテライト型」が新設されました。本体に付属するサテライト事業所が2つまで増設可能になりました。私が訪問したお宅は、一軒家の自宅を開放していた方が、前の家が空いたのでそこを借りて、「サテライト型」に拡大しています。また「複合型サービス」として、小規模型の訪問看護があり、看護師配置が2.5人という限られた利用者の中で採算をとるのは難しいですが、希望すれば看護師さんによる訪問介護サービスも可能となっています。

小規模型は、2003(平成15)年に「2015年の高齢者介護」で提唱され、「宅老所」という名前が使われていました。「通い」「訪問」「泊まり」「住まい」の4つの機能があり、「小規模」「多機能」「地域密着」+「泊まり」という形になっています。日中のデイサービスは自主事業で宿泊の有無については事業所によって異なり、東京都では登録制となっており、自治体としては初めての公認でした。現在では、様々なあり方が可能になっていると思われます。ここでは、私が訪問した3箇所の事例を紹介します。

2 | 事例紹介 1…「このゆびとーまれ」(富山市)

「このゆびとーまれ」の代表の惣万佳代子さんは、1993(平成5)年に富山市の住宅を利用してデイケアハウス宅老所「このゆびとーまれ」を開設しました。スタッフは、病院に看護師として20年間にわたり勤務した惣万さんと、同様の志を持った看護師さん2人の3人でした。病院で最期を迎える多くの患者さんに心を痛めていたので、「いつでも・だれでも・いつまでも」、「面倒な手続きなしに利用できるデイサービスを」というあり方を実現するために立ち上げたそうです。

創設理念は、「介護を要する高齢者、障害のある人、障害のある子ども、ない子どもも利用できるような場」にしたいと。しかし、富山市役所に相談しても、縦割り福祉行財政のシステムが立ちはだかっており、当時利用できる制度はなく独自事業として開始しました。当初の利用料は一般のデイサービスと比べると約5倍の自己負担があり、1日の平均利用者は2人に満たず、給料や必要経費を支払えなかったとのことでした。

ここから「富山型デイサービス(富山方式)」が富山県で独自に始まりました。当初(1996年)は「在宅障害児(者)デイケア事業」の委託から始まり、要援護高齢者、身体障害児(者)、知的障害児(者)、重症心身障害児(者)へと利用者数の算定対象が拡大しました。全国で初めて、富山県・市が行政の縦割りシステムを超えて柔軟な補助金運営に取り組んでいました。この「富山方式」は、「赤ちゃんからお年寄りまで、障害があってもなくても一緒にケアする活動方式」で、行政が柔軟に補助金を出し、富山県が初の試みであり「富山型デイサービス」(富山型)と呼ぶことになりました。

「このゆびとーまれ」は、ホームページでも、最近ではデイサービスという言葉を使っており、子ども、お年寄り、中年、障害者など、「誰でも必要なときに必要なだけ利用」できるので、「このゆびとーまれはなごやかな空気に包まれていて、まるで昔の大家族のよう」と説明しています。

「このゆびとーまれ」では、2004(平成16)年には、「このゆびとーまれ茶屋」という、従来のデイサービスに加えて、障害者も受け入れ可能なショートステイ、および認知症対応型グループホームと3つの機能を持つようになり、2005(平成17)年には「デイサービスこのゆびとーまれ向い」を増設し、ここでは2013(平成25)年には「はたらくわ」という簡単な作業所も開始されました。1日平均して約32人が集まってきます。健常児・障害児・障害者・お年寄りなどさまざまです。

活動内容をみると、高齢者の在宅支援サービスはすべて介護保険が利用し、障害者(児)の在宅支援サービス、ケアプランの作成などがあり、年中無休となっています。実際に看取りなどの場合には、ずっと1週間惣万さんが付き添ったり、交替しながらやってきました。

「このゆびとーまれ茶屋」では、お年寄りは介護保険の通所介護を利用し、障害者(児)は生活介護または放課後等デイサービスなどを利用しています。健常児は1日2500円、半日(4時間まで)1500円となっています。

惣万さんたちは看護師時代に、お年寄りが入院する際に家族にしがみつकिながら「入りたくない、入りたくない」と叫ぶ姿を何度も見てきました。そこで思い切って定年退職になる前に、このデイケアを始めたわけです。惣万さんは、病院で看護師として働く限界を感じたと語っていました。病院でいくらお年寄りの命を助けても、最後の場面で「家に帰りたい」「昼の上で死にたい」とお年寄りが泣いている場面をたくさん見てきました。また以前訪れた老人ホームでは、まるで生きる気力をなくしているかのようなお年寄りが全く話もせず一日を過ごしている姿を見てきて、そうした姿に違和感を覚えたそうです。

そして、「子どもと一緒に笑ったり、怒ったり、歌をうたったりすることは、どんなリハビリよりもよい。子どもがいればリハビリなんてする必要がない」という思いで、「誰でも利用できる『暖かく〜て楽しい施設』『民家のような『ひとつの家』』『介護される家族にとっても、たのもし〜い施設』と皆に呼ばれる施設のあり方を実践してきました。

行政との連携では、1996(平成8)年に在宅障害者に対するデイケアへの助成が始まり、翌年には

民間事業者がデイケアを行う際の運営費への助成制度ができました。そして、事業者の活動に合わせた全国でも初の柔軟な補助制度が創設され、先にも述べたように、高齢者と障害者、子どもと一緒にケアする活動は、行政の柔軟な補助金の出し方と併せて「富山方式」と呼ばれるようになりました。さらに、2003(平成15)年には構造改革特区を申請して、富山型デイサービス推進特区の認定を受けて、さまざまな制度を利用しながら運営してきました。

1999(平成11)年には「このゆびとーまれ」が、富山県内で初めてのNPO法人として認証されました。2002(平成14)年5月には「人間ドキュメント『笑顔の大家族』」(NHK総合)が放映され注目を集めました。筆者自身もテレビを通じて、「本当に素晴らしい取り組み」に出会い、実際に訪問しました。『笑顔の大家族 このゆびとーまれ ― 富山型デイサービスの日々』¹⁰という惣万さんの著書も出版されました。また、惣万さんはこの活動で、2004(平成16)年度女性のチャレンジ大賞(内閣府)を受賞しています。

2 | 事例紹介 2…「ホームひなたぼっこ」

続きまして宮城県岩沼市の「ホームひなたぼっこ」(代表理事・布田幸子)についての紹介です。「赤ちゃんからお年寄りまで一つ屋根の下で大家族のように」という理念で介護・託児の共生ケア事業を行っています。介護保険指定事業所(ひなたぼっこ桑原、ひなたぼっこ二本)のほか、障害福祉サービス事業所「ひなたぼっこハーモニー」、託児所「ひなたぼっこ子どもの園」、さらにサロン活動として「地域交流サロンひなたくらぶ」、「介護仲間のおしゃべりサロンあまやどり」「ママのおしゃべりサロンこがねのみ」「えほんのへや“とんとん”」というふうに、布田さんは「これが欲しいな」と思うと、次々と開設してきました。

布田さんは、「住み慣れた地域で乳幼児・高齢者・スタッフ、そして地域の人々が、かつての大家族のように互いに支え合う、心と心の触れ合いを大切にしたい」とのことで、当初から自宅を開放して託児事業を始めたそうです。御自身は保育士ですが、自分がゼロ歳児の息子を保育園に預けることに疑問が生じたようです。そんな小さい子を保育園に預けたらいけないと考え、自分の家でみて、せっかくだからと3人をみたそうです。「だいたい保育ママさんというのは3人ですよね。で、ここでは一人ひとりの子どもの気持ちや成長に合わせて、生後2カ月から学童までを預かっているのです」と話していました。今は(育休を)1年くらいとれることもありますが、以前は産前・産後とも各6週間の休業でした。

託児事業を始めて、子どもたちを連れて散歩に出ると、お年寄りたちが「かわいいね」と言いながら寄ってきます。そして、「これからはお年寄りも一緒にしよう」ということで、利用者の家庭環境やニーズに合わせたきめ細かいサービスや、個人とのコミュニケーションを密にして活動を継続してきました。

2000(平成12)年に民家を借りて、子どもたちの遊び場として活用するところから始めて、翌年には近隣民家を「託児棟こどもの園」として移設、そしてNPO法人の認証を得て、2003(平成15)年に認可外保育施設の認可を得ました。2008(平成20)年に「ひなたぼっこ二本事業所」や「ママのおしゃべりサロン、こがねのみ」を始めました。その後も「これが欲しいな」と思うと次々と開設してきました。

東日本大震災の際には、被害に遭った地域の高齢者の方々は、はじめは、娘や息子のところなどに身を寄せていたわけですが、結局はいられなくなって、彼女のところで生活した方たちも多いそうです。これらもきっかけで「おしゃべりサロンお茶っこ」も始めました。みやぎ宅老連絡会・甘利てる代『「証言」― 3.11宅老所の真実』¹¹には宅老所では、地震に被災した人たちをかなり預かっていたと書かれていました。

「えほんのへや“とんとん”」は子どもたちに本を読ませたいということで作りました。「ホームひなたぼっこ」も、90歳の末期がん患者の看取りをした体験から、「ひなたぼっこ」の利用を嫌がった家族を

10 | 惣万佳代子『笑顔の大家族 このゆびとーまれ ― 富山型デイサービスの日々』(水書坊、2002)

11 | みやぎ宅老連絡会・甘利てる代『「証言」― 3.11宅老所の真実』(バドワイメンズオフィス、2013)

説得したことや、「あの世にいくときには身内や家族に看取られていきたい」という本人の希望を叶えること、また看取った側の家族の後悔が少ないということで、満足感や自信に満ちたお別れができた、という評価をされています。

3 | 事例紹介…「地域の寄り合い所 また明日」

ここでは、NPO法人「地域の寄り合い所 また明日」について紹介します。東京都小金井市にあり、森田真希さんが代表で当初は「鳩の翼」という名称でした。ここでは「共生を軸とした認知症地域支援の取り組み～支えられる存在から支え合う力を生み出す存在へ～」という理念で運営しています。

以下は、鳩の翼の日中の過ごし方についての記録です。平成14年度「ミニデイを活用した地域三世代子育て支援事業報告書」(2003年3月)から、森田さんの言葉を抜粋したものです。

「鳩の翼で、母親が子どもたちと会った時には、ぜんぜん違う表情になりました。――顔が別人のようになり、子どもをあやしたり、歌をうたったりします。そういう表情を引き出してくれた鳩の翼にきている子供たちに感謝します。お母さん方に是非よろしくお伝え下さい」

「いろんな問題をかかえた方がいらっしゃるので、お母さんたちに理解してもらうには時間がかかることです。けれどもゆっくりと一つひとつ丁寧にお伝えして、一緒に理解していく様に努力することは大切なことだと思います」ということで、多くの報告書も作成されてきました。

4 | まとめ

最後に、残された課題としては、1…地方都市の実践が多い、2…安定した経済的な基盤が必要、3…ミッションに裏付けられた活動が多い、4…自宅の開放などの事例が多い、5…運営資金の調達が困難、6…創始者のミッションの次世代への継承、などが挙げられます。創始者が私財を投じているなどの点で、誰もが実践できる内容とはいえませんが、今後の継続や展開が求められています。

Session 06

市民ボランティア、地域ガバナンス、公共政策 | 1

Discussion 2

稲垣久和 広井先生が言われたローカルなものにスポットを当てての報告でした。従来の縦割り行政(補助)を排して、コミュニティの中の老人ホームや託児所を一緒にしていく、自治体やNPO等々の試みですね。前の議論に繋げると、ローカルなコミュニティ形成で、こうした試みがどんどん出てくれば、これからの市民社会をつくっていく大きな原動力になる気がします。富山方式については私もある福祉の会合で聞いたことがあります。惣万さんをはじめ3人の看護師さんが立ち上げて、新しい試みを始めた。今も非常に盛んにやられていますか。

岡村清子 はい、全国あちこちで。先日岐阜の学会に来ていただきました。私は会えなかったのですが。

稲垣 それをモデルにしたものが全国的に広がっているということですか。

岡村(清) たくさんできています。最初に始めた人は田部井康夫さん¹²という方です。惣万さんも田部井さんにお会いしてから始めています。布田さんとの出会いは田部井さんがきっかけです。

稲垣 こういう試みは大変いいですね。広井先生、何かご感想はありますか。

広井良典 非常に印象深くかいました。私も「このゆびとーまれ」には行ったことがあって、そのときも思ったことが2点あります。

基本的に非常に素晴らしい試みだし、縦割りを超えているという点は確かだと思いますが、地域に十分開かれているかという点、限界も感じました。極論すると、高齢者と障害を持った人を集めて、一歩間違えると、それが地域から排除される対象になってしまう可能性はないのか。言い過ぎかもしれませんが。

それからもうひとつ、これもないものねだりですが、地域全体ですでに人口バランスが崩れていて、今は都会型限界集落といって団地などが完全に高齢者ばかりになっているところもある。だから地域のあり方自体も併せて考えていく必要があると思います。たとえば、千葉のユーカリが丘では、山万という不動産会社が、世代間人口のバランスをとることで持続可能な地域にしようと、いろんな世代が入ってくるように、わざと時間差をつくって入居を認めていく試みをしています。何かの福祉活動をやっていくとなると、結局は地域全体のあり方、持続可能性まで自ずと視野が広がることになると思います。

岡村(清) 当事者は普及させようというより、運営するだけで金銭的にも精一杯です。しかし「ホームひなたぼっこ」の布田さんの場合には、お母さんたちをはじめいろんな人に来てほしくて図書・資料室をつくりました。障害者ケアを始めたのも、双子の男の子の障害者がいらして、6歳で2人とも障害を持っていて歩けない。お母さんが、「2人を置いて買い物に行けない」というので、「じゃあ預かりましょう」ということで始めています。ニーズがあれば、できるだけ受入れています。本当にやさしい方です。配偶者の職業が安定していることも大きな要因です。ニーズがあればできるという人は限られていますから。

ユーカリが丘は大規模な例で、今回のケースは小規模なところばかりです。現在は、共生ケアのグループのネットワークができ始め、全国会議なども開かれておりかなり広まっているとは思いますが。

もう一点、ハンセン病患者さんの世代間交流が始まっています。たとえば在日韓国人の金正美さんが、ハンセン病の詩人・桜井哲夫さんとの、まるで孫娘と祖父のような交流を描いた『しがまっこ溶けた』¹³ (「氷が溶けた」という意味)という本があります。私は、その桜井さんが居住しておられる栗生楽泉園に、2000(平成12)年に初めて学生と一緒に訪問しました。栗生楽泉園は地域との交流も多くありますが、本当に山の上にありました。昔の施設は児童施設を含めて、逃亡を防ぐためにバスも途

12 | 田部井康夫(たべい・やすお、1947-)は、社団法人「認知症の人と家族の会」副代表理事・群馬県支部代表。著書に『18坪のバラダイス―デイセンターみさと奮闘記』(筒井書房、1994)、『ぼけと二人三脚―デイケアの人間模様』(ぼけ予防協会編(筒井書房、2002))。

13 | 桜井哲夫『しがまっこ溶けた』(NHK出版、2002)



広井良典

申までしか通らず、そこからさらに歩いていかなければいけないような場所にありました。以前はそのように施設についての考え方が本当にひどかったわけです。これは高齢者とも共通する面があります。

稲垣 福祉というと、措置制度の時代は施設収容型が主流でしたが、今は地域密着型になっています。しかし、本当にどこまで地域にオープンにできるのかは疑問です。措置制度の時代のようにまた施設は閉じてしまうかもしれない。コミュニティ形成は開かれた形でないと、福祉によって地域を興し市民社会をつくるという方向にはいかない。

ミッションとしての福祉とその限界

長谷川(間瀬)恵美 三つおうかがいします。私は福祉の分野はとても疎いので教えていただきたいのですが、QOLについてのお話がありました。私の世代からすると、「昔は縛られていた」というそういう福祉があったこと自体が驚きですが、今現在におけるQOLは何なのか。これが1点目です。また「残された課題」の中で、「ミッションに裏付けられた活動が多い」と指摘されました。お話しいただいた事例は、一つのミッションに基づいたものなのか、それともそれぞれが違ったミッションを持っているのか。これが2点目です。

最後に、「ミッション」とは、宗教的な背景を持った言葉ですが、福祉のベースに宗教がどう関わっているのか、日本なのでキリスト教ではなく神道的・仏教的な背景を持った団体もたくさんあると思いますが、いかにして宗教が関わっているのか。以上の3点です。

稲垣 関連してうかがいます。この「ミッションに裏付けられた活動が多い」との指摘は、今まではミッションに裏付けられた活動が多かったけれども、残された課題として、今後はこれではやっていけないという指摘でしょうか。

岡村(清) そうですね。そういう志のある人だけではなく、誰でもが参入できないと広がっていきませんが、自分の思いを実現しようという思いが見られ、特別な人しかやれていないようです。

稲垣 個性の強い人がパッと立ち上げるものが多いけれども、これからは誰でもが立ち上げられる、そういうものが必要だという意味ですか。

岡村(清) 経済的には皆さん老人福祉関係の仕事をしながら生活しています。「介護保険で何とかやっていけるから経営できる」と話していました。子どものためにやりたくてもお金がつかないわけです。障害者の場合は少しくかもしれませんが、その辺は難しいです。これからいろいろ調べたいですが、必ずしもお金のある人だけではないと思いますが。

稲垣 福祉はすごくお金がかかりますが、老人福祉の場合は、介護保険制度ができていて、お金の出所がある。しかし、児童とか、障害者とかは、あまりお金は入らないけれども、ミッションに裏付けられてやってきたということでしょうか。

岡村(清) そうですね。

稲垣 でもこれからはそれではダメだということでしょうか。

岡村(清) ええ、広がらないわけです。

稲垣 では広げるにはどうしたらいいでしょうか。

岡村(清) やはり財政的な裏付けです。縦割り行政を変えるのは難しいですが、最後にご紹介した「また明日」は、森田さんが保育士さんで、配偶者の方は介護福祉士です。2人で、借家で、そんなにお金もないけれども、自分のお子さんがいらっしゃらないので、十分楽しみながらやっています。だから安い借家が提供されれば可能かなと。都内でも、空き住宅などを使っているところも多いですね。先ほどの質問のQOLということでも、昔は冷めた食事が出たりしました。私が勤務していた職場の特養は5時に職員が帰るので、それまでに夕食を終えなければなりません。それで「夜が長くて困る。ご飯を食べてからずっと夜が長いんだよね」とか言われました。現在では夕食は午後6時くらい

長谷川(間瀬)恵美



にはなっていると思います。措置制度のときは貧困世帯の方が多くおられましたが、今は、いろんな階層の方がいらっしゃいます。

稲垣 介護保険はまあ機能しているが、障害者や児童に対してはお金がないので予算措置が必要だということですね。福祉行政にどうい問題があるかを岸川先生から教えていただけますか。

岸川洋治 たとえば障害者福祉の中で、私どもでは、放課後等デイサービスという障害児の小学生のデイサービス、大人の障害者のデイサービス、それから知的障害者のB型支援事業、もうひとつが中途障害者の社会復帰のための活動支援センター、をやっています。それぞれについて、管轄する法律が違います。私たちは、職員も兼務して、一体としてみていいではないかと思うのですが、役所は全部ダメだと言う。こういう縦割りの問題を私は痛感しています。もう何回も、何回も、担当者や役所に顔を出して、結局、決着がついたのは、私たちが理想と思っていたものとは全然違う形です。ですから私は制度に則って仕事をするのは限界があると思いました。

費用についても、そういう制度のがんじがらめと、当然同じようなことがあると思います。ですから、今の私たちみたいな民間の施設で一番問題なのは、制度の壁をどう破るかです。そのためには、極端に言えば、自費でやるしかないとなります。それでもやろうというのは、やはりミッションが必要だと思います。役所が何と言おうとこれをやる、というミッションがなければできないと思うんです。

今、介護職の方の離職率が高いですが、離職の理由が統計で出ています。給料は確かに安いですが、それが一番の理由ではない。勤めている社会福祉法人の理念がはっきりしない、という理由が一番です。実はそういう経営者が多すぎるんです。

稲垣 逆の人もありますね。無報酬で。

岸川 そうですね、ミッションとして。今日紹介いただいた事例も、やはり自分の使命(ミッション)があるからできる。ですから、制度の中でやっている私たちの社会福祉法人も、ミッション——私は「ボランティアズム」と言い換えていますが——、ボランティアズムがなければ、意味がないと思うんです。そのボランティアズムの要素は、「開拓性」「先駆性」でしょう。ニーズに対応するためには制度も積極的に変えていくことが求められると思います。

先ほど岡村(清)先生から時代背景をうかがいましたが、私は1969年に現場に入って、ずっと見てきました。その中で日本の福祉政策がかなり揺れ動いている、確立していないと実感しています。たとえば1971年には社会福祉施設の整備5カ年計画が出て、施設をつくろうとしました。ところがオイルショックがあって財政が落ち込むと福祉見直し論が出ました。そこで在宅福祉にシフトします。

ところが在宅福祉とコミュニティケアをきちんと議論しないまま、いつのまにか地域福祉論にシフトしたところに私は問題を感じています。その地域福祉論をやりながら、一方では入所施設をどんどんつくっていく。揚げ句の果てには、施設を造っても待機者が増えて、また政策が変わると思います。

そのような体験から、私は、これからの福祉を考える、一つの指標があるのではないかと感じています。ペイリーというイギリスの知的障害者の専門家が *Mental Handicap and Community Care* という本を1960年代に出しています。彼女は、Care in the Community ——これは単に地域の中に施設があるという捉え方で、それから Care by the Community ——これは地域がある程度協力しながら運営する、もう一つが Care with the Community ——地域とともに、ということで、3つを区別しています。で、まさにその議論を、福祉見直し論、在宅福祉論、コミュニティケア論までもう少しきちんとしておかなければいけないかと、私は思います。施設が辺鄙なところにあるのは、Out of the Community です。だからその議論をもう一度、今、展開しなければいけない。それがこの研究会の大きなテーマ「市民ボランティア、地域ガバナンス、公共政策」につながると思います。先生の今日のお話で具体的な事例が出てきた背景をもう少し遡って詰めてみる必要があると感じました。

稲垣 ありがとうございます。福祉の広い意味での制度的な設計が、措置制度から、今は契約制度に変わって、それぞれメリット/デメリットがあるのですが、どちらかというと、予算措置云々を言う



岸川洋治

のは、下手をすると「措置制度のほうがいい」かのような方向に向かう危惧はありますね。契約と言っても、商取引の契約みたいになるとまた大問題だし、そのへんの福祉の難しい問題、倫理的なテーマと経済学的なものとはかみ合わないのですが、やはりそれがドッキングしているのが福祉の問題です。だから Care in the Community、by the Community、Care with the Community という、その with、コミュニティとともにどうケアするか、そこにわれわれは今いろんな意味で遭遇していて、これは非常に重要な問題です。

岡村先生にもう一度確認で、先ほどの長谷川先生の質問とも関係しますが、ミッションに裏付けられた活動が多い、また「残された課題」6に、「創始者のミッションの次世代への継承」とありますね。ここでのミッションというのは「使命」でしょうが、創始者の使命感みたいな、パッションだけでは限界があるという言い方が一つあって、しかし岸川先生の議論は逆に、やはりミッションがなければ福祉社会はできないという、問い掛けでもあるのですが、その辺はどう考えておられますか。

岡村(清) ミッションというのは今までの生活の中で養われていくものだと思います。惣万さんの場合は、お母さんがずっとリウマチで寝ていたけれども、いつも笑顔でいらしたとのこと。その背景にはいろんな人が家に来て話し相手になってくれたからだ。だから「そういう関係をつくりたい」というのが惣万さんにはありました。

岡村直樹 ミッションの共有という部分はどうですか。惣万さんのミッションに地域のボランティアの方が共感して、広がっていくと。

岡村(清) そうですね。職員以外の方がボランティアでたくさんいます。

傍聴参加者B 2年くらい前ですが、NHK ラジオで朝4時からの「こころの時間」という番組で、惣万さんの話を聴きました。そのときに私は感心したのですが、富山弁まるだしてお話しになる。話もすぐおもしろかったのですが、この人は自分を飾らないなと思ひまして。

岡村(清) そうです。本当にフランクで。

岸川 たぶんその人柄に、周りの人が惹きつけられて、仲良くなって、そのミッション、使命感とともにやられてきた、そういう印象を持ちました。ですから全然怖いものなしで話しておられて、ずいぶん大変な役所との折衝もあったと思いますが、彼女が生身で闘ったから、今できているんだと思いました。

岡村(直) 広がりて考えると、たとえばミッションに共感してボランティアで一生懸命やっている人たちが、じゃあ今度は私が他でこういうものをつくろうというふうにはなっていないのでしょうか。

岡村(清) それはやはり家がないとダメですね。だから空家があればできるかもしれませんが、みんな自分の家を提供したり、他を借りたり。

稲垣 公的なものではなくて、全然私的なものですね。

岡村(清) そうですね。

制度とミッション

傍聴参加者C 私は茨城県の田舎で知的障害者の施設で働いています。それとは別ですが、土浦めぐみ教会というキリスト教会に所属していますのでその教会の例をお話します。教会では今、認可外保育施設をしていて80人くらい来しています。それから児童教育ということで、小学校・中学校の子どもたちが15人くらい来しています。学籍はそれぞれの地域の学校にあって、フリースクールという形で来しています。これは、自分で地域の学校に行けるのだけれども、うちの教育を受けたいということで来ている人たちです。それから高齢者介護で、デイサービスと、訪問介護、居宅(介護支援)をしています。デイサービスには毎日15、16人が来ていて、訪問も同じくらいです。それから納骨堂があって墓地もやっています。そういう意味では全年齢層をケアしていますが、個人負担はありません。先ほどミッションを持っている個人は非常に大変だということでしたが、逆にこちらは教会がミッションを

岡村直樹



持っていて、そのミッションに従っている。だいたい教会員のメンバーが500人くらいで、それが一つのコミュニティという形でミッションとしてやっている。

稲垣 かなり広いところでやられていますね。

傍聴参加者C 土地は3600坪くらいですが、そういった土地の広さよりも、コミュニティを構成する人がいることと、その教会が持つミッションに賛同しているということで作られている。職員は、その教会のメンバーが多いのですが、他の教会のクリスチャンの方もいます。有給の職員が50人くらいいますので、労働基準法で産業医を置くとか、法定雇用率を満たすとか、そういう社会的なことも考えています。

先生がお話しになったように、コミュニティが形成されているかどうかという意味では、うちの教会はコミュニティがあって、教会のミッションのもとで福祉ができていて、個人の負担ではなく、事業として成り立っています。

長谷川(間瀬) 今の例は、はっきりと教会という宗教的なバックグラウンドを持っているからできるということですね。私が聞きたかったのはそこです。今日ご紹介いただいた事例に宗教的なバックグラウンドはあるのかどうか。

傍聴参加者C 私たちはバックグラウンドを持っていますが、一つには制度という問題があります。制度は、日本全国同じ福祉を受けられるためにありますが、制度に則ってやるとお金がついてきますから、制約がある。常にその制約の中でしか動けない。制度だけでは、ミッションとは掛け離れた世界になって、コミュニティに広がらなくなってしまう。

過去の福祉の流れを見ると、やはり、ミッションを実現するために、私財をなげうつなどして、工夫してお金を集めてきた、そのお金が制度に則って流れてきた面もある。われわれも介護保険だけは制度に則っていますのでお金が当然来ますが、他の部分、とくに認可外保育施設はいただく保育料では全然間に合わないですから、教会が、年間1千万円近く出しています。教会というコミュニティの中では、「これから子どもたちを育てるために私たちみんなでそのお金を出そう」といって、別にお金持ちがいるわけではないですが、ちょこちょこ献金しています。小中学生の教育も同じようにお金を出しながら、ミッションを持ってやっています。

ですから、うちの場合は制度と制度外のものを必ず両方やります。介護保険も制度に則ったものをやるけれども、制度外のものもやる。たとえば介護保険でここはやっていいけれども、ここはやってはいけないというところがあります。目の前にいる人がそれをやってほしいというときには、名札をひっくり返すんです。そうすると教会の事業の名前になって、それも教会の有料の事業として安く精算してあげて、また終われば名札をもとに戻して介護保険の請求をすればいいのです。要するに、利用者の必要に応じて、制度を使いながら、ミッションができるようにする。制度外だけをやるとお金がなくて、ミッションができない。制度だけだとお金はあるけれどもミッションができない。経済的に継続して、広く皆さんに提供するためには、制度を使います。

そういう意味ではコミュニティが教会にはあるというのは大きなことですから、これが教会だけに止まるのではなく、いかに地域に広がっていくかがわれわれの使命です。われわれの教会の隣にイオンモールがあるんです。ここには何万人も来る。教会とイオンモールの間に福祉施設の建物があるので、地域との接点の役割が果たせるかなと期待しています。

宗教と福祉

稲垣 広井先生が最後にスピリチュアリティについて触れられましたが、何か一言ありますか。

広井 今のお話が今日のかかなり核心にあるテーマの一つです。この「宗教と福祉」というテーマをこれからしっかり議論すべきだと思っています。ヨーロッパの場合は、皆さんもよく知っているとおり、ス

14 | 清水安三(しみずやすぞう、1891-1988)は、教育者・牧師で、桜美林学園創立者。

テート・アンド・チャーチという問題があって、福祉や教育の主たる担い手は教会なのか国家なのかという葛藤もあります。北欧の場合はうまく連携しています。日本で今、社会的孤立が高まる中で、人と人をつなぐ拠り所になるのは一体何か。仏教による福祉の歴史も一方でありますが、それはキリスト教に比べると必ずしも社会性が強くはなかった。これから「宗教と福祉」をどう考えるかは、すごく大きなテーマだと思います。

また、「制度とミッション」も、これはいずれか一方というよりは両方大事で、戦後の日本の福祉は、制度だけが先に走って、その制度の根底にあるべき思想とか理念があまりにもなかった。だけどミッションだけでは経済的な基盤が不足しますので、うまく制度とミッションの両方が強くなる必要があると思います。

ボランティアと寄付・献金 ― アメリカと日本

岡村(直) 市民社会を形成する中で、よくボランティアに行き仕事をしというのは強調されます。しかし、お話をうかがうと、ボトムラインとなるのがお金の場合が非常に多い。そのお金を政府(補助)に求めるのではなく、タンス貯金をしている一般の人たちに求める。たとえばクリスチャンのミッションとして福祉をしようとすると、私はボランティアとして時間を捧げますという人もいれば、私は仕事があるので、時間ではなくてお金を捧げますという、そういうミッションマインドとか、ボランティア精神もあるだろう。アメリカでは教会で施設を運営しているところも多いですが、アメリカはそういう宗教的な施設にほとんど一銭も出さないんです。ものすごく寄付金を集めることに長けている人を理事長に据えて、運営していくんです。

長谷川(間瀬) うちの大学(桜美林大学)がそうでした。清水安三氏¹⁴ですね。

稲垣 ミッションスクールですね。ミッションがあるとそれだけパワーが出るんですよ。

岡村(直) だからそういう形のボランティア精神も強調されないと、時間を捧げる人とお金を捧げる人と、どちらがいい悪いではなくて、両方大切だと。

稲垣 アメリカの場合はまさに寄付文化が建国以来あって、自由主義(リベラリズム)の一面は、国家は福祉にお金は出しませんということです。福祉に対する国家の負担は、アメリカは、日本よりももっと少ない。しかし、アメリカには寄付文化があって、草の根的な教会の数もものすごく多い。国家と教会は分離(Separation of church and state)していても、ボランティアリズムの中のミッション、クリスチャンスピリットが旺盛です。

日本はどうすべきかが大問題で、まさにそのミッションですよ。

岡村(直) うちの学生がボランティアで東北の被災地に行ったときの経験を話してくれました。つぶれてしまった家の廃材処理で、釘を一本一本、額に汗して抜いていたんですが、そこにアメリカの、ごっそりカネを持っているボランティア団体もやってきて、彼らは、最新の機械を使って、ものすごく効率的に釘を抜いていて、みるみる廃材の山がなくなっていく。アメリカでもものすごい人たちが寄付をしているので、その団体もお金があるそうで、ボランティア精神のあり方の違いをまざまざと見た。日本の周りの人は、額に汗して釘を一本一本抜くことを美德として強調するが、効率はこんなに違う。

もちろん額に汗するマインドも非常に大切ですが、話を聞くと、やはりお金がボトムラインです。そうすると寄付もボランティアだという文化を定着させていくのも、市民社会形成の大きな部分だと思います。

稲垣 そうですね。

岸川先生に、天理教社会福祉研究会のパンフをもらったのですが、「教祖(おやさま)に学ぶ福祉の心」とある。天理教徒は100万人くらいいるそうです。こういういわゆる新宗教団体も含めて、日本の人口の20-30%は何かを信じている。日本人は宗教性が弱いと言われるそうですが、神社やお寺と同時に天理教、創価学会もそうですがそういう新興宗教も多数ある。広井先生、これからの日本に

について、先ほどのスピリチュアリティの復権ということも関連して何かありますか。

広井 被災地のボランティアの話も出ましたが、学生でも、社会貢献意識を持っている層が今は増えていると感じます。私は、宗教性なしに、その社会貢献性意識はどういう形であり得るのか、そこに関心があります。スピリチュアリティへの関心も全体的に高まっていると思いますので、期待しつつ、それをどう発展させていくかが課題だと思います。

傍聴参加者 A 岡村(清)先生がアメリカの寄付文化が素晴らしいと言われました。私も同感ですが、アメリカ人すべてがお金を出すわけではない。アメリカに行ってある会議で、「ファンドレイジングをしたい」と言ったら、「リンケージはあるか?」と問われました。「リンケージ」つまり「つながり」です。「あなたを知り、あなたの働きの趣旨を理解している人を、あなたは何人持っているか?」という意味です。私はある教会を代表していますが、個人的にお金を出してくれそうな人は特別知らなかった。「特別に個人的なリンケージはない」と言ったら、「だったら非常に難しいだろうな」と彼は言いました。

その同じ会議で会った大学の学長さん(女性)が、こう言ったんです。「Fundraising is eating, eating, eating.」と。みんな大笑いしましたが、「募金活動は会食の連続だ」というわけです。つまり人とのつながりをつくる、会食とか、パーティをやって、挨拶して、握手して、そういうつまらんことをして初めて自分の趣旨を言って、それでお金をもらう。だからアメリカ人すべてが出すわけではない。

基本的にこれは日本人も同じです。ミッションを理解してくれる人とのつながりを持つことが重要です。アメリカに行ったら、すべての人がお金を出すわけではない。普段からいい人間関係をつくっておくことが大事だと、私は思います。

ミッションの共有はどのように可能か

稲垣 ミッションの必要性をどうやって私たちが共有できるかということでしょうね。

傍聴参加者 D 私は単行本の編集者で、ボランティアガイドやガンの患者団体の本などを興味があってつくってきました。そうした本の読者カードは、この頃は学生、主婦、それから退職後の方からの返りが多いです。時間のないビジネスマンからは来ない。

お金のことでいえば、今はNPOが4万団体くらいに増えました。昔はゆうちょボランティア貯金がいふん足しになっていたようですが、ほとんど今はないです。国際協力だと外務省の一部から少しおりのだけです。ただ、震災以降は、復興関連に絡めて、小規模のファンドを利用したり、新しいところではインターネットでファンド的なものをつなげて多くの人へ呼びかけるといった方式(クラウド・ファンディング)が少しずつ加わりつつあります。あと、すごく変わった方法としては、日本財団——お好きな方も嫌いな方もいると思います——が、最近、「おひとりさま」が増えて、その人たちが亡くなると、誰も係属がないと財産は国に没収されるわけですね。で、そうなる前に「おひとりさま」たちに呼びかけて、それを社会貢献に使いましょうという、キャンペーンをやっています。まだ数は多くないと思いますが、すごくお金のあの方からのお話も財団に来つつあるそうです。こうした高齢社会ならではのアイデアも考えられると思います。

傍聴参加者 E 私は横浜市青葉区で2000年から障害者のIT化支援のグループをつくっていて、社会福祉協議会を拠点として活動しています。そこを使わせていただいて、助成金もいただいてきたのですが、当初100万円近かったものが去年から20万円に下がってしまいました。そういう中で、自立といますか、NPO化するとか、独立してやったらと勧められるのです。しかしそうすると、実はその拠点は使えなくなるし、今まで使っていた機材なども置いていかなければならなくなる。そう考えると、なかなか独立できない。じゃあ寄付金を集めましょうといっても、「それだけ寄付が集まるのなら助成も切らせていただきます」と最初から言われていますので、びびってしまう役員が多いです。非常に困っています。

稲垣 寄付金が集まるのなら公金を入れないということですか。

傍聴参加者E はい。社会福祉協議会からそう言われました。だったら今のまま続けたほうがいい、場所代がかからないし、広報もありますね。

共同募金の現状

稲垣 昔は共同募金とかでやっていたんでしょう。

傍聴参加者E 今もやっていますが、募金額が下がっていますので、振り分けられるお金も減っているわけです。

岡村(直) 日本全体の募金活動は今はどうなっているのでしょうか。上がっているのか、それとも下がっているのでしょうか。

傍聴参加者A Japan Fundraising Association (JFRA 日本ファンドレイジング協会)という組織があって、2日ほど前に新聞にも出ていましたが、兆単位の募金を集めるように全国的にプロモーションをしていて、鶴尾さんという方が理事をしています、ムードとしてはそういう方向です。けれども逆に、かつて阪神淡路大震災の際、公益募金に対する税制控除が導入されましたが、それが廃止されようとしています。ですからJFRAと、シーズという団体も、非常に危機感を感じて、政府にどう対応しようかと、何回も相談会を持っています。結局、日本の政治家の意識が低い。大震災があればパーツと盛り上がるのですが、ちょっと熱が下がれば、すぐやめようかとなる。日本の指導者たちの意識が育っていないと、私は思います。

寄付とアカウンタビリティ

森田哲也 寄付したら、どう使われているかに関心がいくと思います。日本の場合はアカウンタビリティという面は、とくにNPOは弱いと言われます。政策提言とかの際に、NPOは一樣に、アカウンタビリティはこういう基準を満たしなさいと。上からそうなれば、市民社会は萎縮するかもしれませんが、やはりボトムラインを設けて成果を出すようにしないと、寄付するほうもインセンティブも無くて、それでは寄付文化は定着しないと思います。

ただ、そのアカウンタビリティという考え方自体がまず日本にはないのかなとも思います。とりあえず寄付をして、いいことをしたと思って、それで終わり。また団体も運営で大変なので、とりあえず評価までする時間もお金もない。そういう段階に今はあるかもしれません。

今回、先生に紹介していただいた団体は、実際にミッションを持たれているとは思のですが、じゃあ具体的にそれに賛同している方々は、お金に限定すると、どこまでアカウンタビリティに参画しているのかをうかがいたい。もう一つ、長谷川先生も質問された、ご紹介いただいた団体のミッションに宗教的なベースがあるのか。お金のことはともかく、ついていきたいと思わせる何かがあったのか、そのベースとなるフィロソフィーは何なのか、そこは私もおうかがいしたい。

稲垣 たとえば富山方式では、寄付や助成をしてくれた人たちへのアカウンタビリティとしてPR活動をするとか、会員との交流などはされていますか。

岡村(清) ないですね。皆さん本当にやりたいからやっているという感じで、それを広めようとも思っていないようです。

稲垣 市民社会に対してのPRはないと。

ミッションの継承の問題

岡村(清) ないですね。でも今は全国会議があって、それに毎年出していますので、それを整理すれ

森田哲也



ばまたいろんな流れは出てくるかもしれません。だから有名どころの人たちからは、利用者が喜んでくれるというだけで自分たちが満足して、それを普及しようという声はまったく聞こえませんが、富山では惣万さんをはじめ3人で始めたのですが、みんな未婚の方たちですから、今度は誰が継ぐのだろうか、といった心配もあります。

稲垣 その代で終わってしまうのでしょうか。

岡村(直) ミッションの継承の問題ですね。

稲垣 アメリカなら財団に寄付するとそのぶん税金が控除される。そこが日本とは違うんですね。

岡村(直) それで財団の理事会が次のリーダーを決めていきますね。

稲垣 募金するほうも控除されて、いいことをしたという満足感は味わえるし、PR 活動でアカウンタビリティを聞いて、自分は世界とつながっていると思えるようにしないと、やはりダメでしょうね。日本で、そのへんは難しいですか。

森田 難しいですね。私も日本で自閉症の子どもたちを支援する団体を友人と2年前に始めましたが、ずっと赤字状態です。しかし、団体の運営はまずそこがないと評価もないし、成果もないというところに行き着くんです。もちろんミッションありきですし、友人が始めて、私たちが支援して。友人も病気を抱えていて、継承の問題もあって、いつつぶれるかわからない。そうすると、アカウンタビリティは、すごいプライオリティというわけではないんです。岡村先生がおっしゃったように、それをファウンデーションとか、制度とか、何らかの形で組織化するのが課題だと私は思います。組織化は先ほどの制度かミッションかの議論に近いですが、「組織か」「ミッションベースか」のどちらかではなく、両方を押さえないがらす。

でも私は、この議論に一番欠けているのは持続性だと思います。ミッションが強くて、自己資産を出している方はやはり熱い。ただ、長続きするかという、冷めた目で見ると非常に課題が多い。でもそれを誰も指摘できない。ミッションが素晴らしいので「ごくろうさまです」で終わってしまう。客観的に、それを言う場がないと思います。

NPO の場合にはたとえば理事会がガバナンスとしてありますが、形だけのところが非常に多い。おそらく理事会は形だけで、議題もすべて決まっていて、採決するだけで終わって、そのあとお茶会みたいな感じの組織がほとんどです。その形骸化している理事会を、何か制度的に強制力をもってアクティブにすると、真ん中をうまくカバーできると私は思うのですが、どうでしょうか。営利組織だと社外取締役とかがその役割なのかもしれませんが、その社外取締役さえ形骸化していると言われています。であればこそ、まさしく利他的な精神で始まっている NPO は、そういうことを社会から言われる前に、システムとして機能するように、そもそも NPO 法人をつくる段階でやらないといけない。NPO 法人を立ち上げるのは大変ですが、比較的、創設しやすい。理事会もやりようによってはさっと形式的に通ってしまう。そこをもう少しハードルを高くして、どこかで組織的な動き方をしないと、何か定着していかないと私は思います。

岡村(清) 今のお話をうかがって、ジェンダーの違いもあるのかなと感じました。というのは、これをもっと継続して高めていこうという女性が私も含めて少ないのではないかと思います。自分たちがやれることをやるだけで、継続していくことは考えられない人が多いのではないのでしょうか。継承はこれからの問題です。NPO もバーッと百花繚乱でできたけども、その後どうなのかの追跡調査が必要ですね。

稲垣 そこは大問題です。私は大企業の CSR (企業の社会的責任) 担当の人たちと議論をしたことがあって、福祉と比較して非常に興味深いことに気づきました。さきほど森田さんが「利他的」とおっしゃった。企業は儲けることが目的ですから「利己的」です。それで企業は、何となく社会に対してうしろめたいので、「企業の社会的責任」をものすごく PR する。実際に責任を果たしている企業はけっこう多いんです。たとえば東日本大震災のときでも、ボーンと相当な額を寄付して、名前は外に

15 | 石井十次(いし・じゅうじ、1865–1914)は、明治期の慈善事業家。英国のキリスト者のジョージ・ミューラーをモデルにし、キリスト教信仰に根ざした岡山孤児院を創設した。

16 | 大原孫三郎(おおはら・まごさぶろう、1880–1943)は、日本の実業家。倉敷紡績(クラボウ)、倉敷絹織(現在のクラレ)、倉敷毛織、中国合同銀行(中国銀行の前身)、中国水力電気会社(中国電力の前身)の社長を務め、大原財閥を築き上げる。その傍らで、石井十次の影響もあり、社会・文化・福祉事業にも熱心に取り組み、倉紡中央病院(現・倉敷中央病院)、大原美術館、大原奨農会農業研究所(現・岡山大学資源生物科学研究所)、倉敷労働科学研究所、大原社会問題研究所(現・法政大学大原社会問題研究所)、私立倉敷商業補習学校(現・岡山県立倉敷商業高等学校)を設立した。

松葉ひろ美



は出さない、そういうことをやっている企業もある。ところが、社会福祉法人は、良いことをしているという思いがあるのか、それをきちっと社会に説明する責任が欠けているところがある。社会福祉法人は、国から結構なお金が出ていて、今まである意味では守られてきたわけですが、これからはそうではないでしょう。その辺に問題があります。

岸川 継承の問題で、僕が理想としている姿があります。岡山孤児院をつくった石井十次¹⁵が亡くなって、大原孫三郎¹⁶が引き継いで、石井十次の理念がなくなったからといって孤児院を閉鎖する。理念がなくなったからやめるというのは、何かすごくかっこいいなと思います。私どもの法人の幹部職員たちも「この仕事をしなければ社会館らしくない。ぜひ取り組まなければ」という言い方をする。もっと言えば、この社会館という法人の理念が継承できなければ、もうやめちゃってもいい、むしろやめるべきだと思っています。たぶん前館長の阿部志郎もそれは支持してくれると思います。あるから続けるというもおかしな話で、だから、まさにそこは法人の主体性の問題ですし、理事会が真剣に取り組んで、決めるべきだと思います。親子代々で継承していくような社会福祉法人は絶対おかしいと思います。だからそこを断ち切るには、やはりきちっとしたビジョンとか、理念を持つ人材を育てていかなければいけない。広くは人材育成の問題、大学の教育の問題かもしれません。

新しい道徳性に関くには

稲垣 広井先生が『論語と算盤』という話をされました。「論語」は倫理的規範性で、「算盤」は今という経営、経済、お金です。これをいかに調整するかという問題です。期せずして、岡村(清)先生が最初に勤務した養育院には、渋沢栄一の銅像があって、先生は26年間、その銅像を毎日見ていたそうです。渋沢栄一は福祉の世界でも貢献したことは有名ですが、徹底して『論語』を読み込んで、経営における儒教の大事さを説くことが彼のミッションとしてあった。儒教、そして仏教もまだまだ生きているはず。そうしたものをもう少し新しい視点から、21世紀にどう活かすか。まったく新しい精神革命になるのか。まさに広井先生の主張しておられることとつながると思います。何かそのことについてありますか。

広井 日本社会はわりと小さな集団でまとまってしまう。仲良しグループで自己完結してしまう。それはそれで良さもあるんですが、より開かれた公共性が弱い。それはたぶん日本社会の永遠の課題みたいな部分だと思います。ただ、渋沢栄一の『論語と算盤』のように、もともと一定の理念を日本が持っていたこともあったと思います。日本に即して言えば、神・仏・儒 + 個人 + アルファと私は言っていて、キリスト教も入ってくると思いますが、枢軸時代的な基盤になる理念に、近代的な個人があり、さらに新しい時代の地球倫理という理念みたいなものが今は問われている。希望を込めて言えば、NPOでもアカウントビリティとか公共性とかしっかりしたものが出てきていますので、その辺りがいかにこれから発展していけるかがポイントだと思います。

稲垣 そうですね。広井先生が紹介しているように、渋沢栄一の『論語と算盤』に「富をなす根源は何かといえば、仁義道徳。正しい道理の富でなければ、その富は完全に永続することができぬ」という言葉があって、「仁義道徳」というのは、なにも儒教に限ったものではなく、私がやってきた公共哲学の中でも、モラル・フィロソフィー(道徳哲学)とモラル・ソサエティ(道徳的社会)によらないと今後はやっていけないなと思ってきたのです。この仁義道徳等々、儒教の五常(仁、義、礼、智、信)も非常に大事なことです。

松葉ひろ美 渋沢栄一の言葉で印象に残っているのが、人を助けたり慈善事業をやったりするのは人間の自然な性情だ、というものです。人間の自然な働きが、慈善というか人を助けることなのだと。今日の研究会にもそれにつながる部分があると思ひまして印象深くお聞きました。

稲垣 まさに「ケアする動物」という面が一方であるのだと思います。私は脳科学をテーマにした別の

研究会(本誌 XIV 巻 01 号参照)をやっていますが、人間が本当に利己的になりきれのかというと、そうではない、利他的な側面も生命原理の中にある、そういう議論が脳科学者の中から出てきて、すごくおもしろいと思いました。

岡村(直) 一つだけ確認ですが、長谷川先生の質問にもあったように、惣万さんには宗教的な背景は一切ないのですか。

岡村(清) そうですね。ただ、お母さんがずっとリウマチで寝たきりだったのですが、いつもニコニコしていて、いつも子どもが遊びにきていた、そうした経験が一番大きかったそうです。お母さんがとてもいい療養生活を自宅で送っていたと。

傍聴参加者 F 東京都葛飾区で一般事務職ながら福祉畑に長くいましたが、今は退職しています。今日ご紹介いただいた事例は富山をはじめ予算措置という面からすごいと思います。自治体職員の立場からいうと予算措置はすごく難しくて、何々法の何々という予算措置でないとお金をつけられない。ですので、最初のミッション、パッションで立ち上げたあとは、頭を使って、これは何々法のこういった施設かという格付けをして、それに当て嵌めてお金をとらなければいけない。今、自治体は自分では動けないので、民間との共同作業として、葛飾区は NPO の資格を持っていないとダメでしたが、法人にお金を出して自由にやらしてもらおう。そういう形がどこの自治体でもすごく増えています。それにはやはり単に文書だけではダメで、自治体や地域の中で NPO の会員を知恵を絞って集めるとか、たとえば葛飾でいえば「アムネかつしか」というところが社会福祉法人を取るときにみんなで寄付を集めてまわった。そういう中で広がりやつながりを得ていく、仲間を相手方につくっていくことがすごく大事だと思います。

稲垣 自治体の民間との協働ですね。委託事業とかは法律的にもまだ整備されていなくて、自治体と民間だとどうしても自治体のほうが強い権限を持つので、ちゃんと平等な形で民間と協働するのは、まだ法律的に未整備ですね。

傍聴参加者 F そういうアイデアはやはり民間の側が持っています。だからそれをどんどん出してくれれば、自治体のほうも遅ればせながら、「なるほど、なんとかしましょう」と努力してくれる人は必ずいるはずです。

稲垣 いろんな自治体でそういう話は聞きます。自治体によってはすごく先をいく職員がいて、そういうものをパッと法制化できるのですが、多くはそうではなくて、いつも民間が下になる。そこが日本の大問題ですね。

傍聴参加者 F 課長とか部長はそうかもしれませんが、一般職員のレベルではやはり同じボランティアの仲間になっていけば違ってきます。

傍聴参加者 D ボランティア本を出している者の立場から感じたことですが、福祉ボランティアと国際協力ボランティアでは組織の持ち方もやはり違います。先生がお話しになった地域の中から自然に出来上がったような、NPO までいかないような団体は、やはり女性たちが介護で長年苦勞して、地域の中で女たちのつながりがあった、そういうベースでしか成り立たないんです。これは全国で、自然発生的に女の苦勞の結果、モチベーションの高い人たちが一代限りでやっていますから、同じことを同じ形で男たちがやれるかといったら、やれません。

それでもいづれか希望は持っています。教育の中でとくに小中学生でボランティアとか社会貢献が入っていて、私が関わっている NPO では、そういった子どもたちのレポートや夏休みの宿題への対応や、また地方からの修学旅行で NPO に見学に来るケースが非常に増えていまして、逆に通常業務に差し障るほどの殺到の仕方をしています。これが 10 年後どう結実するかに少し希望を持っています。

もう一点、私は孤立死の本もつくっています。現在(数は正確ではありませんが)年間 3 万人と言われているのですが、いずれ「おひとりさま」世帯が 3 割以上になると、年間 20 万人以上になるのではないかとされています。今、孤立死がメディアなどで取り上げられますが、これはまだ珍しいケースなので取

り上げられているだけで、これからはあちこちで孤立死が増えます。厚労省はもうずいぶん前からお金がないから、地方自治体だけではなくて、その周辺の貧困問題とか孤立死問題に関わっているNPOに協力をしてもらって、何かのネットワークをつくってくれと、懇願だけはしている。それで調査をしたものがあるのですが、自治体で対策を組めているのは当然ながら2割もないし、そのようなNPO自体もまだ少ないです。

ただ、非常におもしろい例があります。たとえば「ライフリンク」という自殺対策支援の有名なNPOがあります。まず自殺しそうな人の発見が重要ですが、足立区の女性区長が、足立区の全職員にそのライフリンクと提携して研修をさせています。ガスが止められているとか、個人的に話を聞くとか、そういったさまざまな兆候から自殺しそうな人を発見するための研修を職員にさせる自治体がある。その後も少しずつ増えています。

たとえば有名な湯浅誠さんにしても、お兄さんが車椅子だったとかいう決定的な原体験が彼の活動の原点にある。そういう方が多い。そういうモチベーションが強い人がNPOを立ち上げるわけですね。湯浅さんは、問題を「見える化」して派遣村を立ち上げた。そういった上手なメディアとの連携とか、今まで啓蒙の講演会をやっているだけのNPOも山ほどあったのですが、NPOもいろんなアイデアをもっと立ち上げるべきだと思います。

稲垣 おっしゃるとおりだと思います。長時間になってしまいました。これで終わりにします。どうもありがとうございました。

市民ボランティア 地域ガバナンス、公共政策 | 2

2014年10月25日 | 東京ガーデンバレス 白鳳の間

出席者

- 石野徳子
- 稲垣久和
- 井上貴詞
- 岡村清子
- 岡村直樹
- 長谷川(間瀬)恵美

Emergence
創発
—
Volume XIV
number 03

魂への配慮 | Spiritual Care

東日本大震災後の教育支援(釜石市立唐丹小中学校)の活動報告

長谷川(間瀬)恵美

はじめに

2011年3月11日、東北地方太平洋沖地震(マグニチュード9.0)の揺れは大地を揺るがし、巨大な津波が多くの人々の生命と暮らしを飲み込みました。さらに追い討ちをかけるように起きた原発事故、放射能への不安は、現在も人々の心をかき乱しています。この未曾有の大津波により、岩手県釜石市唐丹町は破壊的被害を受けました。唐丹町は人口2100人、956世帯の小さな漁村です。住民の家の3分の1が全・半壊、死亡・行方不明22名、唐丹駅は水没、海辺に位置した市立唐丹小学校は全壊、唐丹中学校の校舎は地震により摩滅しました[photo.01]。私は微力ながら唐丹小中学校の教育支援活動に携わっています⁰¹。

2011年から、毎年12月13日に唐丹小中学校を訪問させていただいていますが、大震災から3年半経った現在も、唐丹町にはまだ瓦礫の残骸が残り、津波に倒れた堤防の下も片付いていません。町民の心の支えである盛岩寺の修復工事はようやく始まったところです。

今回は、公立学校の教育支援(とくにスピリチュアルケア=魂への配慮)を続ける中で、現場での臨床経験(子どもたちの成長に携わること)から見えてきた宗教的情操教育の必要性、また宗教者が現場に関わることの意義を、支援途上ではありますが、ご報告させていただきます。

東日本大震災と釜石市唐丹小中学校

1 | 支援活動の始まり(支援募金活動)

2011年3月11日、私は京都にいました。ふわっと体が揺れ、「めまいかな?」と思いました。これが私の経験した東日本大震災でした。津波による甚大な危害によって現地が大混乱の状況にあることを知ったのはその日の夕方でした。そしてこの震災で突如として肉親を奪われ泥まみれて悲嘆に暮れている子どもたちに、何かできることをしなくては、と切実に思い始めました。

震災の2日後、岩手県在住の友人で高校の教師を定年退職された高舘千枝子さんから電話を受けました。高舘さんとは、1998年に私がスウェーデンに留学していたときに初めてお会いして、以来ずっと交流を続けてきました。その電話で高舘さんから「自分の教え子の住む町が被災したので、この町の教育を支援する活動を始めたいのだが」という相談を受けました。即座に協力を約束したことが私と被災地・岩手県釜石市唐丹町の子どもたちとの関わりの始まりでした。

震災の4ヵ月後、まだ余震が続く被災地に足を運び子どもたちに会いました。子どもたちが「死」を目の前にして何をどのように受け止めたのか深刻に考えざるを得ませんでした。そのときに、ただ頭の中だけではなく全身から子どもたちに届く「魂への配慮(スピリチュアルケア)」のニーズを感じました。震災を経験した子どもたちが「死」という現実から目を背けず力強く生きて欲しいと願い、宗教者として何ができるのかを思案しました。その結果、友人のキャロル・サック宣教師とともに企画・実施したのが「魂への配慮～穏やかな祈りとともに希望へと歩むことをお手伝いする支援者と唐丹の子ども

01 | 桜美林大学国際学研究所編「東日本大震災と知の役割」(勁草書房、2012)参照。

photo.01
全壊した唐丹小学校と一部損壊した
中学校校舎(2011年4月)



photo.02
唐丹中学校の校舎の中。
案内する藤館先生(2011年7月)



photo.03
ガラスの散乱する
理科実験室(2011年7月)



photo.04
唐丹中学校の窓から(2011年7月)



photo.05
プレハブ校舎の建設が始まる(2011年8月)



たちの集い」でした。「死に直面し苦しむ人々を目の前にして、宗教が今、彼らの精神にどれだけの意義を持つことができるか。それを宗教学の立場から明らかにしたい」、という研究目標は、正直に言えば、あとからついてきたものでした。

2 | 岩手県釜石市唐丹町と震災

2011年7月、私は当時のゼミ生と唐丹小中学校を訪れました。盛岡の駅で高館さんが出迎えてくれました。彼女の車に乗って、約2時間、遠野の山を越え、被災地に入りました。あまりの惨状に目を疑いました。当時、唐丹中学校の校長であった藤館茂先生に中学校の校舎の中を見せていただきました。「子どもたちはトラウマになるから入れないんだ。取材者も校舎の中には入れない」と言いつつ、それでも高館さんの信頼もあり、私たちを中に迎え入れてくれました。ガラスが散在し、天井は落ち、壁にはひびが入り、窓からは破壊された堤防が見え[photo.02, 03, 04]、当日の地震と津波の威力を肌で感じることができました。それでもその日の海は青く美しく何ごとともなかったかのように穏やかでした。

唐丹小学校は津波で全壊して、子どもたちは隣の平田小学校の1階の2部屋を借りて勉強していました。

私たちが行った翌月から校庭に小学校と中学校を合体したプレハブ校舎を建てる工事が始まり[photo.05]、1年半後に完成し、今はそこで子どもたちは勉強しています。

3 | スピリチュアルケアの実践

2011年

最初の訪問の際に、藤館先生は「子どもたちを元気にしたいと、コンサートやお笑い芸人からのオファーが来ているが、すべてお断りしている」と説明されました。「一時的な笑いはその場限りで、その後の寂しさを助長するから」と。それにもかかわらず藤館先生は、12月13日に私が友人のアメリカ人宣教師キャロル・サックを同伴して、パストラルハーブ(祈りとして存在するハーブの音色と歌声)によって子どもたちの心を癒す、また祈りの時間を持つことを許可してくださいました。公立の学校でこうした宗教的な行事を許可していただけることは滅多にありません。藤館先生には私の思いが伝わったのだと思います。唐丹小学校の青笹光一先生にもその後お会いして理解を得ることができました。「12月13日に訪問したい」と日にちを指定したのは理由がありました。12月13日はスウェーデンでは「ルシア祭」という、希望の女神の到来を祝う日です。長い冬を忍耐して待つ人々にとって、南から太陽の恵みをもたらすルシア女神の到来は希望と喜びなのです。宗教者には人々の精神的な復興を願って待つという忍耐の時間が必要です。私は一人の小さい宗教者として、子どもたちが忍耐して希望の到来を待つといったことの大切さを魂に訴えたいと思いました。

キャロル・サックはルーテル教会の宣教師です。ホスピス病棟や刑務所を訪問して、死を目前に控えている人にハーブの演奏をして魂を癒すパストラルケアに従事しています。私は、彼女がハーブを奏で、祈りの時間を持つことが、子どもたちの心を癒す時間となり、それが亡くなった方への鎮魂になると思いました。

この企画への支援は日本各地だけでなく世界中からも届きました。スウェーデン、フランス、アメリカ、台湾から応援の言葉が、アメリカや日本のさまざまな方からプレーヤショールが届きました[photo.06]。プレーヤショールとは、編む人がそれを手にする人のために平和を祈りながら編んだショールのことです。段ボール10箱分(約200枚)の祈りのショールが届き、パストラルハーブが奏でられるあいだに、被災した生徒124人、教職員、遺族の方々にも配られ、一人ひとりの肩を暖かく包みました。

2011年12月13日。唐丹中学校の生徒は体育館をパーティション(衝立)で仕切って辛うじて勉強

ができる状態でしたが、その体育館の前の半分で「ハープの調べと支援者の集い」という鎮魂の集いを開催しました。小学生はバスで駆けつけてくれました。

最初に、真っ暗な中で、私がなぜこのような企画をしたかという話をして、そのあとキャロル・サックのハープが奏でられました。そのあいだはロウソクの光のみです。12月のとても寒い中で、子どもたちは一生懸命耳を傾けていました。ロウソクの光は、電灯とは違って暖かい。それを子どもたちはハープの音色とともに感じてくれていました。プレーヤショールが一人ひとりの肩を暖かく包みこんでいました。涙を流す中学生たちの姿がとても印象に残っています。



photo.06
送られてきたプレーヤショール

2012年

翌2012年、唐丹町はまだ瓦礫の残骸が無残にも辺りに残っていました〔photo.07〕。破壊された堤防はそのままの姿を止めていました。さらに驚いたことには、山の中腹やトンネルの脇などに白い仮設住居が無造作に建てられていたことでした〔photo.08〕。次は盛岩寺〔photo.09〕の修復です。お地藏さんが1年目は倒れていたのがようやく戻されていました〔photo.10〕。お寺の中はまだまだグシャグシャでした〔photo.11〕。

復興が進んでいるというメディアの報道はあてにはなりません。被災地はまだ被災地で、1年たってもほとんど変わっていませんでした。

私たちの訪問は、2年目はタイトルを「支援者の集い 唐丹・サントルチア」と改めました。前年と異なり、プレハブ校舎が完成していたので、体育館の全面が使えたことです。

チラチラと暖かいロウソクの灯火が灯された体育館に、小中学生が数列の弧を描くように着席しました。ステージには低学年の子どもたちが行儀よく座り、サントルチアの曲が歌われる中、ロシアの女神に引率され、1年生がキャンドルライトを灯して入場して着席しました。この年にはロシアの女神としてキャロルの娘のベサニーがアメリカから参加してくれました。パストラルハープが静かに奏でられる中、国内外から届けられた祈りのショールが新1年生の子どもたちと被災者たちの肩にかけられていきます。20分ほどの演奏に続いて、1分間の黙とうが捧げられました。「聖フランシスコの平和の祈り」を私が朗読したあと、盛岩寺の三宅和尚が廻向の読経をしてくださいました。諸宗教者の祈りがともに捧げられた貴重なひとときでした。最後に子どもたちは、「ホワイトクリスマス」の歌に合わせて、桜美林大学のチャペルから貸し出されたキャンドルライトを手にも、ゆっくり振りながら目を輝かせていました。

photo.07
震災1年後の唐丹町(2012年)



photo.08
建設中の仮設住宅(2012年)



photo.09

修復中の盛岩寺(2012年)



photo.10

元に戻されたお地藏さん



photo.11

盛岩寺の内部(2012年)



photo.12

新たに建てられた碑(2013年)



photo.13

手前から、明治、昭和の碑。
その奥が今回建てられた碑(2013年)



photo.14

工事が始まった盛岩寺



2013年

2013年7月、海辺に被災地の碑が立ちました [photo.12]。津波記憶石といえます。この唐丹は、明治29年、昭和8年、そして今回と、3回津波の被害に遭っています。それぞれに石碑が建てられています [photo.13]。盛岩寺では、お堂の工事がようやく始まりました [photo.14]。

今回は唐丹のルチアが始まる前に、学生と一緒に食事をすることができました。プレハブの校舎の中で支援者の皆さんと給食をいただきました。

そして12月13日、3回目の唐丹サントルチアが開催されました。

小学校1年生児童と担任の先生は、この年、初めて自らの手で冠と杖を作成して、ルシア女神とスターボーイの役を担ってくれました。自分たちでこの日の舞台をつくり、動き、歓迎してくれていると感じました。同時に復興の兆しを少し感じました。子どもたちは弱いけれども、同時に力強い。そう思わせてくれました。

この年はうつむいて泣いている子が一人もいませんでした。そしてパストラルハープの演奏時間が短くなっていることに気づきました。パストラルハープはそこにいる人の息遣いに合わせて、曲が選ばれ奏でられます。演奏される時間も変化します。最後にキャロル自身が作詞作曲した「I, You, We」という歌を子どもたちと支援者とが一緒になって歌いました。その後に、小学生63人と中学生40人が舞台上上がって合唱してくれました。合唱曲は小学生が「変わらないもの」、中学生は「郷愁歌」でした。涙が止めどもなく溢れました。私の役目は終わったかもしれないと、感じた瞬間でした。

4 | 募金と支援者

教育支援の中で私が担当しているのはスピリチュアルケアですが、高館さんは最初から募金活動を続けてこられました。物質面と精神面とが両輪になって支援が続けられました。募金活動なくして教育支援は成立しなかったと思っています。

震災の支援活動をしている立野泰博氏は本の中で、「仕事と家があれば心のケアの90%は終わる」というスタッフの言葉を回顧しています⁰²。「仕事があれば希望が生まれ、未来を考えることができる」と言いますが、私は被災者にはまず金銭的な援助が必要であり、その援助のもとで信頼関係が生まれてくるということを苦くも体験しました。子どもたちは親の苦しみや悲しみ、痛みを敏感に感じ取ります。仕事と住居と家族が安定していない子どもたちには金銭的な支援がどうしても必要であると実感しました。

私たちの活動に対する募金額と支援者数の推移を見ると、最初の年は800万円集まりました。それが2012年度になると金額も支援者数も減っています。しかし、2013年、14年になると、支援者の数も募金額も同じくらい集まっています。

最初の年は学校に一括寄付をしました。各家族に10万円ずつお渡ししようという話も出ましたが、保護者から「学校にまず寄付してくれ」という要望がありました。2011年度と12年度は、学校側は、子どもたちの保護者からは、給食費や教材費、PTA会費といった必要な経費を、一切集金しなかったのです。募金の中からそうした費用が賄われて子どもたちは学校に行くことができたのです。12月の聖ルチア祭のときには、1万8000円を各家庭に生活支援金として渡してくださいとお願いして、学校のほうから各家庭に配っていただきました。2013年度、14年度は150万円を学校に寄付し、そこから各家庭に4000円ずつ配ることができました。

今は小学校・中学校に100万円ずつ、そしてクリスマスに1万円ずつ、そして卒業式には紅白餅を配ります。紅白餅は唐丹でつくっています。こうした形で援助が続けられています。

5 | 子どもたちの声

参加してくれている大勢の子どもたちからたくさんの喜びのメッセージを受け取りました。励ます立場

02 | 立野泰博『被災地に立つ寄り添いびと』(キリスト新聞社、2014)

が、逆に励まされてきました。支援者の一人として私は震災後の子どもたちの成長に携わらせていただいていることに感謝してきました。

EEC 通信⁰³に掲載されて、子どもたちの声が伝えられてきています。そこに支援活動も、また募金⁶がどのように使われたのかも詳細にアップされています。

2011年にたとえば、次のような声が寄せられました。

—
「ハープは初めて見ました。すごく大きかったこと、大きくてきれいな音を出すということにびっくりしました」

「心がとても落ち着きました。全国各地の皆さんがここまで私たちのことを思ってくださって支えられていると思いました」

「たくさん泣きました。本当にたくさんの方の支えに感謝したいです」

2012年(EEC 通信32、33号)には、

—
「とても落ち着きました。悩み事をじっくり考えることができました。自然と涙が出てきました。ありがとうございます。ケーキもうれしかったです。おいしくいただきます」
このときはクリスマスケーキをみんなに配ることができたのです。

—
「ペンライトを振りながら音楽を聴いているときに僕は津波のことを思い出しました。亡くなった人へのお祈りをしました。これからは僕は亡くなった人のために復興に近づきたいなと思いました。ハープを弾いてくれてありがとうございました」
「二度目のハープの会、ありがとうございます。ハープの音色と歌の音がとても心に響きました」

2013年は、声を聞くことができなかったので、2013年に建てられた碑に刻まれた子どもたちの詩を紹介します。

—
「津波が来たら逃げろ。胸に刻み生きていこう」
「津波なんか怖くない。怖いのは悲しみ」

—
この2013年には、子どもたちの支援の難しさを感じはじめました。子どもたちが心の中にどのような傷を負っているのか外部者にはわかりません。表面的には明るく振る舞っている子どもたちですが、私の手をギュッと握る子どもたちや、いつまでも手を振って見送ってくれる子どもたちとお別れすると、一年に一回の訪問がとても無力に思えました。そこで今後のスピリチュアルケアのあり方を再考したいと考えて、小中学校の子どもたちに簡単なアンケートをお願いしたのですが、許可していただくことはできませんでした。

6 | 社会・コミュニティの関わりの中で一苦悩の変化

震災1年後は、住む場所、食べる場所、勉強する場所という、社会・コミュニティの再建が中心でした。しかし震災2年後は、住む場所、シェルターでの大人たちのいがみ合いに苦しむ子どもたちの姿がありました。今まで仲良く交流できていた近所さんが、壁一枚を隔てて生活することになると、お互いの家族構成や生活環境の違いがあらわになったのです。漁に出る父親を持つ家族は朝早く起きて夜は早く床に就きます。一方で工場勤務の若い家族の朝はそこまで早くないし、夜の時間帯も異なります。そこで生じた感覚はあろうことかお互いの生活を乱す迷惑な存在としての他者意識でした。生活共同体、コミュニティの崩壊でした。そして震災3年後は経済格差を目の当たりにして苦しむ子どもたちの姿がありました。シェルターから出られるお隣さん。自分は亡くしたペットを新し

03 | Education Exchange Community
= EECが毎月発行する通信。
主宰 | 高館千枝子
<http://eec-2020.com/index.html>
ホームページには、「EECは岩手と北欧との文化交流を20年ほど行ってきました。この度の東日本大震災で裸一貫となった多くの人たちの力になりたいと『東日本大震災教育支援募金』プロジェクトを立ち上げました。そして、被災者の顔が見える支援をしたく、釜石市唐丹町という小さな漁村集落を支援する事に致しました」とある。

い家で飼うお友達の姿、等々、現在は子どもたちの学校の施設の入札不調を憂う子どもたちの姿があります。

7 | 教育支援活動について

今後、支援がどこに向かっていくのか、実は正念場でもあります。教育支援は震災当時、1年生だった子どもたちが中学校を卒業するまでの2020年3月までと区切って続いています。また唐丹の写真巡回展「花を植えよう」「お抹茶体験」などのボランティア活動も始まっています。

教育支援の実践からの考察

1 | スピリチュアルケア〈理論〉

支援活動は、緊急支援、復旧、復興という順序をたどると言われます。その全過程の根底に必要とされているのが「ケア」であると思います。私はその care(ケア)を「配慮」と訳しています。それは医療の現場で使用する cure(キュア、治療)とは違って、キュア(治療)目的としない「気遣い、心配り」のことだからです。この意味での「ケア」を必要としている人は、気持ちの中で内心密かに、何らかの困難を抱えている人です。私が携わっている実践では、被災地の唐丹小中学校の子どもたちが対象ですが、その子どもたちが、その意味でのケアを必要としているかどうかの判断は難しく、またそれを本人たちから直接聞くことは許されていません。

しかし、私は震災の四カ月後、最初に学校を訪問した際の昼休みに起こった出来事を忘れることはありません。

突如として「ドーン」と足下から突き上げるように襲った余震に、その場に居合わせた子どもたちはただ黙々と掃除を続けていました。叫び声を上げることも、笑い声を発すこともしませんでした。その無表情な姿に、私は恐怖を感じました。そして次の瞬間、この子どもたちには「魂への配慮(スピリチュアルケア)が必要だ」と察知しました。こうして、子どもたちの苦しみ・痛みを共感し、心の叫びを受け止めたことで、私と唐丹小中学校の関係は始まりました。

魂への配慮(スピリチュアルケア)は、スピリチュアル・ペイン(spiritual pain)に関わります。スピリチュアル・ペインとは精神的な傷、魂の痛みのことを指します。身近な人、両親や友人を失うという悲痛な経験から、残された人々は悲嘆の中に心を閉ざしてしまいます。「死ぬ」ということを自己存在の喪失と捉えることは、何よりも精神的な苦痛をもたらします。ですから、死を目前に経験して、危機的な状況にある子どもたちの苦痛の緩和、魂の痛みに対して必要とされるものは、「魂への配慮」(spiritual care)にほかなりません。

こうしたスピリチュアル・ペインは数値データに換算することはできません。震災後、子どもたちはたくさんの恐怖を体験しました。地震の恐ろしさ、津波の恐ろしさ、原発の恐ろしさ……。また、たくさんの「死」を体験しました。見て、嗅いで、触れて、身近に感じた残酷な「死」は、そう簡単に受け止められることではありません。気持ちの整理がつくまでには長い時間がかかります。そういう過酷な状況の中で、宗教の果たすべき役割は何なのか。熟慮を重ねた結果の答えが、「祈り」と「音楽」という二つの力を携えて訪問することで子どもたちの魂を癒すという試みでした。

ですから、友人のキャロル・サック宣教師の助けがどうしても必要でした。彼女の奏でるハープは、演奏家としてのハープではありません。あくまでも牧師の使命(ミニストリー)に発して、魂への配慮(パストラルケア)を目的とした、パストラルハープです。祈りを込めたハープの音色と歌声を、私は被災地の子どもたちに届けたかったのです。

このようにして、人の魂に配慮し、生命(いのち)に向き合い、共感的に関わることができるのは、宗教であると思っています。

2 | 日本の政教分離と公教育(宗教の役割を考える)

唐丹小中学校は公立の教育機関です。2011年に被災直後に私たちを受け入れてくださった小学校、中学校の校長先生は二人とも、次の年に、本人の意向に関係なく他校へ転校されました。その後、赴任された校長先生は、前任の校長先生から私たちの支援活動について引き継ぎをされており、12月13日の集いを受け入れてくださいました。しかし、それでも公教育の場で宗教的な行事を行うことには気を揉まれました。その一例が、まずは12月13日に行なわれる行事の名称でした。

2011年にお願したのは「スピリチュアル・ケア(魂への配慮)」としての開催でしたが、このタイトルは二転三転して、最終的には「ハーブの調べと支援者の集い」となりました。2012年は「支援者の集い 唐丹・サントルチア」、2013年には「唐丹サントルチア」でした。2014年からは、10月に唐丹小学校学習発表会に参加するという形で展開しました。

これは日本社会にはびこる宗教アレルギーに起因するものであって、これを克服する教育の必要性を強く感じました。また同時に、公教育における宗教の役割、宗教的行事に対する態度や距離の取り方など、解決すべき大きな課題がまだまだあるということを痛感させられました。

そこで、いま、改めて問題にしたいのが「政教分離」という理念です。日本の公立学校は「公的空間」であり、そこにおいて宗教がタブー視されるのは「政教分離」の原則によるものと思われます。たとえばアメリカの政教分離(separation of church and state)は建国当初の歴史的背景をもって形成されました。そのピューリタンの信仰においては、「信仰」は個人の良心の問題として扱われます。それがゆえに、政治と結びつくことをひどく嫌ったのでした。アメリカに渡ったピューリタンたちは、純粋に個人の信仰を同じくする者同士で宗教の団体をつくろうとして政治から離れ、その結果として「政教分離」が成立したわけです。つまり政治と宗教の関わり方を検討するものがアメリカの「政教分離」であったのです。一方、フランスの政教分離(Laïcité)は封建的旧体制とカトリック教会の癒着を否定するものであり、公共空間に個人が特定の宗教を持ち込むことを禁じました。

日本の政教分離も自国の歴史から紐解くべきであると考えます。戦時下に「国家神道」が強制された歴史があるがゆえに、特定の宗教を公的空間に持ち込むべきではないとアメリカ(GHQ)流に解釈するのであれば、「特定の」ではなく「諸々の」宗教が協働して、公共空間に関与するのであれば、これは認められるべきではないでしょうか。2006年に教育基本法が改正され、その第15条には、次のように「宗教教育」に関する言及がなされています。「国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない」とあります。

この言及は「諸宗教」であるならば尊重するということですから、「諸宗教」に立脚したつまり牧師や神父、僧侶や神官、ウラマーやラビたちの協働による一スピリチュアル・ケアの実践であるならば容認されないでしょうか。そうであれば、「諸宗教の協働の働きかけ」は公共の空間にたやすく受け入れられるはずです。

私の視点からすれば、公教育において「宗教多元主義」の教育を目指すということが、3.11以降、人々のニーズに応じて、日本の社会に貢献することのできる諸宗教の役割であると考えています。

3 | Bottom up の支援、Volunteer、そして Glocal という視点

一人の市民が始めた教育支援活動は、四年経った今、一つの立派な社会活動として捉えることができます。この活動には、親として、教師として、同郷人として、また市民として携わる、さまざまな人々がいます。動機も多種多様です。私は、そこに一人の宗教者として紐帶的な役割を果たしてきました。私は、支援に関わっている人々の根底にあるものが、実は不可視の「宗教心(利他の精神)」であることに気づき始めています。それは「無私」の精神(忘己利他)ではなく、他を利することで自分を利するという「自利利他」の精神です。さらに、その先に存在するのは「皆を利する」という公共善(Common Good)であると考えます。

04 | 西村恵信(にしむら・えしん)仏教学者。
1933年生まれ。花園大学名誉教授・元
学長。文学博士。
05 | 小西達也(こにし・たつや) 武蔵野大学
看護学部教授。

稲垣久和先生は Common Grace (共通恩恵) という概念を提示されています。先生は聖書の言葉「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」を引用して、神につくられた人間はキリスト者である・ないに関わらず、等しく自然の恩恵を受ける権利があるということ、また敵・味方の区別なく、神の恩恵の中に生かされている人間の命を神は養ってくださる、と主張されています。この理論に基づけば、Common Grace を享受している人間が自ら進んで「神のみこころを行なうこと」(ボランティア活動)は当然として考えられると言われます。この Common Grace という宗教観には、一切の見返りを求めない「純粹贈与」の精神が根底にあり、それがボランティア活動の原点となっています。ですから、「宗教心(利他の精神)」のない人々に支援は長続きしないと考えられています。しかし、ボランティア活動は「他人のため」だけではなく、「自分のため、そして皆のため」とも考えることができて、これがグローバル(普遍的)な価値として評価を受けるのではないのでしょうか。このグローバルな価値のもとでローカル(地域)の場で活動が行われていくのであれば、これがグローカル(glocal)の支援の望ましい姿として評価されるのではないかと私は思うのです。ここでいう「グローカル(glocal)」な視点とは、“Think globally, act locally” のことです。こういう姿の支援がボトムアップ的に展開されることが期待されているのではないかと考えました。

4 | Mission (使命)、Spiritual Care (魂への配慮)、そして関わり方

私は、宗教の役割を問われたときに、恩師である京都の西村恵信老師⁰⁴のことを即座に思い浮かべます。温和で小柄なのですが、大きな声で話すお方です。国際学会で、禅仏教の社会的貢献について質問されたとき、老師は堂々と「None、そんなものはない、Mu、無」と喝破されたことを、私は昨日のここのように憶えています。老師は、貢献「度」というような量を測る方法、「貢献」という上からの目線の態度、「社会において」という曖昧な見方を戒められたのです。契約や業績原理、データに基づく社会的役割ではなく、個人に寄り添い、個人の心の救済、魂への配慮こそが真に社会貢献につながるものだ、と老師は諭されたのだと思っています。その上で、宗教者としての私の使命(ミッション)を問うと、日本の将来を担う子どもたちに生きる勇気と希望を与えること、子どもたちの魂に潜む小さな希望の種に水を注いで養育すること、そのために、日本の伝統宗教が宗派を超えて一体となり、同じ方向をめざした活動をすること、つまり相互信頼のもとで宗教のエキュメニズム(諸宗教一致)による協働(協力して働くこと)を推進していくことだと考えます。

被災した唐丹の子どもたちの教育支援におけるスピリチュアルケアに携わる今、私は、子どもたちが置かれている現実を正しく理解することによって生きる方向性を見出していくプロセスをサポートすること、そして希望への道(人生の目標)を歩むことをサポートすることを実践的に学んでいます。「サポートする」とは一人ひとりの魂に寄り添うこと、そして子どもたちを心配して思いやることに尽きる、と思っています。

チャプレン(キリスト教のスピリチュアルケア提供者)としてケアに携わっている小西達也氏⁰⁵は、スピリチュアルケアではケア提供者自身のあり方がその提供されるケアの質に直接的に関わってくる、と述べています。「あり方」とは、その人がどのようなビリーフ(信念、信仰、価値観、世界観など)を持ち、それがその人の精神生活にどのような影響を与えているかということだ、とも述べています。つまりスピリチュアルケア提供者自身のビリーフがその実践において深く関与していることの重要性を指摘されているわけです。小西氏は個人の人生の基盤を成立させるものとして「ビリーフ」という言葉を使用されていますが、私はこれを「宗教観」と捉え直しています。私にとっては、自分の依って立つ信仰を意識化させることがビリーフ/宗教観ですから、宗教観とは、宗教についての考え方であると定義することもできると考えます。

スピリチュアルケアの実践の場では、個人の宗教観を相手に押し付けることがないように気をつけることが大事だと、私自身、実践を通して学びました。私とキャロル・サックはルター派のキリスト教徒であり、キリスト教にコミットすることで自身の生き方が支えられています。私たちの奉仕の精神や利

他の心というボランティア精神は「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」(ローマの信徒への手紙 12章15節)、「人にしてもらいたいと思うことはなんでも、あなたがたも人にしなさい」というキリスト教の教えによるものであり、それは人生の心の支えとして、また信条として、私たちの生き方を支えてくれています。それでも、唐丹小中学校の子どもたちへのスピリチュアルケアに携わるあいだは、キリスト教という特定の宗教を前面に押し出すことは極力控えてきました。これは私たちが共通にして持っている宗教観であり、それぞれのスピリチュアリティを尊重するという考え方に基づいています。

被災した唐丹町の盛岩寺(天台宗)の和尚は、震災後二年目の唐丹サントラルチアで読経(廻向)をしてくださいました。支援に携わる者たちの中には、エスペランティスト、大本教の宗教観に立脚される方々もおられました。支援者の一人ひとりが自身の宗教観をベースに持ちながら支援を続けます。支援のあり方に宗教の垣根はありません。スピリチュアルケアに携わる人の使命の根拠にある宗教性を「スピリチュアリティ」(霊性)と呼ぶのであれば、それは諸宗教に普遍的に存在する本質として定義できるのではないかと考えています。

おわりに

被災した唐丹小中学校の子どもたちを支援するという目的で始められた支援活動を紹介してきましたが、私が何よりも深く考えさせられてきたことは、公共の場における宗教の役割、そして地域とのつながりでした。震災後、公共(コミュニティ)を育む人々とは、言わずもがな現地の人々であり、さらに広義の公共の場では、現地の人々の苦悩の中に入っていく臨床宗教者であり、開かれた宗教性を携えた支援者でした。こうした公共空間では、それぞれの「開かれた宗教観」に従ってさまざまな活動が繰り広げられていたように私の目には映りました。

確かに、ケアには覚悟と労り・愛・忍耐が必要です。長時間一緒にその人の重荷を負い、痛みを共有し、時間と労力を注ぐ覚悟が必要だ、という意見もあります。しかし、私は、スピリチュアル・ケアにはいろいろな形の「関わり方」があることを学びました。「解放」や「希望」そして「人間の成長」という子どもたち自身の変容を測定することは困難で、おそらくできないことでしょう。だからこそ、自分の力ではなく、それををはるかに超えた存在の力(恩寵)に委ねることの大切さを学ぶわけです。この恩寵(grace)は、care に携わる人のスピリチュアリティ(魂の次元)と、そして care される子どもたちのスピリチュアリティ(魂の次元)に注がれます。

震災後、子どもたちは「魂のつながり」を大切に受け止め始めています。人々がお互いを必要と感じ、支え・支えられて生きている、この「支・縁」(し・えん)の社会のあり方こそが、共生(ともいき)の思想の原点であり、spiritual care の第一歩でした。そこには、覚悟という気負いはないし、あつてはならないと感じました。

持続可能な地域社会(sustainable community)における支援のあり方とは、社会契約や業績原理、データに基づく社会的役割を担うことなく、ただ隣人(となりびと)の痛み・苦しみに共感して手を差し伸べること、個人の内面の救済、魂への配慮に携わることであり、このことが宗教者の果たすべき大切な役割であると、私は心に銘じました。そして、弱さ・痛み・苦しみの共感をもって、人から人へ、親の世代から子どもの世代へと、同じ志をつなげていき、誰もが安心して暮らせる持続可能な社会を回復していく、それが今、宗教者に求められている「魂への配慮」(spiritual care)の課題であると考えています。

ご清聴ありがとうございました。

宗教に対する公の受け入れ側の対応

稲垣久和 唐丹町とは、今も関わりはあるんですね。

長谷川(間瀬) はい。年に1回ですが、12月13日に行っています。

稲垣 いろいろな問題が凝縮されていたと思います。宗教というのは、欧米では、キリスト教が中心となって、市民社会形成に大きな役割を果たしています。日本では、宗教というプライベートなことで、市民社会形成というところまでつながらない。それもあって、公共の場は、市民社会ではなくて国家によって占められてしまう。「公共」の場である市民社会が「公」(お上・国家)に置き換えられてしまう。日本は今に至るまでに市民社会をつくれないうち難しい社会だと感じてきました。その中で、東日本大震災に際した個人の働きは、公共的な側面を持ち、ここからの問題提起をしっかりと考えなければいけないと思ひ知らされました。

唐丹小中学校側の受け入れの態度が変わったという話がありました。校長先生が代ったからなのか、公立学校という制度化された中での、宗教的な要素の強いスピリチュアルケアに対する排除なのか。アンケート調査を拒否されたとのことですが。

長谷川(間瀬) 公立の学校はカリキュラムが決まっていたなかでスケジュールを組みます。小学校からバスで体育館に移動してスピリチュアルケア(魂への配慮)の催しを1時間行なうというスケジュールを組み過程で、「これは宗教的な行事ではないのか」との声が出ます。それに対して、「これは教育活動の一環だ」と1年目の校長先生は、はっきり言ってくださいました。2年目の校長先生は、支援(お金)を受けているので、受け入れなければという思いと、精神的なものは排除したいという思いのジレンマがあったようです。こちらの思いもあって、この2年目の交渉が一番きつかったです。3年目になると、こちら側が折れて名称も変えました。それは、学校側の受け入れの問題というよりも、やっていて子どもたちがものすごく明るくなったと感じられたからです。役目を果たせたと感じて、先生方から迷惑に思われているならば、こたわらずに違った形でやってもいいかなと思うようになりました。私にも葛藤がありました。

岡村清子 アンケートが拒否されたというのは、子どもの負担になるということなのではないでしょうか。

長谷川(間瀬) そうです。小学校も中学校も両方の校長先生から拒否されました。「このハーブの会で何を頂きましたか?」「このハーブの会を毎年して欲しいですか?」などの実際のアンケートの内容を見せたときに、その中の「そのハーブを聴きながらあなたは震災のことを思い出しますか?」といった問いに対して、校長先生のほうから、こうした質問は、「すごく傷つく子どもがいる。120人の中で1人でもその言葉に傷つく子がいる可能性があれば自分ではできない」と。それで、私も引き下がりました。

岡村(清) ルシア祭、女神が来るということで、学校側はそれを宗教として捉えたのでしょうか。ハーブの演奏も含めて文化的なものとして捉えたら問題にならなかったのではないのでしょうか。公立の学校でもクリスマスパーティは平気でやったりしますから。

長谷川(間瀬) 私もそうだと思います。ただ、スピリチュアルケアとして行きたいという思いが強かった。「スピリチュアル(魂)」という言葉はすごく宗教的ですよね。最初の藤館校長先生は、「コメディアン等は全部断っているけれども、宗教的な要素は必要だ」と理解がありました。そこで私がやろうとしていることが、サンタルチアというルシアの女神到来なんですという話を通じました。また2年目には盛岩寺の和尚さんが読経をしてくださった。私にとっては宗教的要素が大切でした。もちろん文化・伝統としてやることは可能だったと思います。

岡村清子



「心」と「魂」

傍聴参加者A（ジャーナリスト） スピリチュアルケアを「魂への配慮」という日本語に移し替えていらっしゃいますが、「魂への配慮」といって私たちが思い浮かべるのは、ドイツ語の seelsorge です。普通、パストラル・ケアみたいな概念として教会で使う。とくにルター派を背景に出てきた言葉だと思えます。私は編集者で、ある震災関係の本を編集したときにこの言葉が出てきた。翻訳者と相談して、一般の人にわかりやすいように、「心のケア」と訳しました。先生はあえて「魂への配慮」という宗教的な匂いのする言葉を使われた理由は何ですか。

長谷川(間瀬) 「心」ということばは使いたくありませんでした。「心」というと、胸を指す人もいれば、頭(脳)を指す人もいます。spiritual care を「魂」と訳したのは、キリスト教的な「ルーアッハ」「スピリット」という言葉に限定したくもなかったんです。「アニマ」と言ったほうがいいのか、でもアニムズム的な「アニマ」でもない。ネオアニミズムですね。「魂」と言えば仏教の人にも響く、また神道の神官の人にも響きます。「魂への配慮」という言葉を使われたのは賀来周一先生⁰⁶でした。私はそのことばがいちばんしっくりしたんです。care というのは、「気遣い」「心配り」ですから「魂への心配り」でもよかったのですが、「心配り」というと一方的に人が人へ心を配るということになってしまうので、「配慮」のほうが、お互いがお互いを配慮するという柔らかな表現になると思いました。子どもたちはものすごくセンシティブで、遠方から来る支援者のことまで考えてくれる。それで最後まで手を握る、最後まで手を振ってくれる。そういったお互いがお互いを配慮して成り立つケアというところで、私は「魂への配慮」という言葉を使ってきました。

稲垣 私たちの別の研究会ではまさに「スピリチュアルケア」をテーマとしてやっています。先ほど引用された小西達也さんも参加されています。小西さんは、禅仏教徒ですが、アメリカでチャプレン養成講座を終えて、仏教の立場でスピリチュアルケアを実施しています。小西さんは、「ビリーフ」という概念に到達して、このビリーフが相手の中で転換されることをスピリチュアルケアの目標にしています。「転換される」というのは「改宗する」という意味ではなくて、視野が広がって全然違う見方が人生に対してできるようになることです。それがスピリチュアルケアと彼が呼んでいるものの内容なんです。それはターミナルケアからスタートしたのですが、今はこういう場合も含めて一般のところでもやられています。

長谷川(間瀬) 確かに「転換」「ビリーフ」は至る所で行われています。宗教間対話の場所もそこにあると思います。

「フランシスコの平和の祈り」を唱えたあと、お坊様が廻向してくださったとき、子どもたちの空気が変わるんです。そこできっと彼らは、違う宗教のそれぞれの祈る時間の大切さというのを感じてくれたと思います。そういったことが公共の場で行われることがあまり日本ではない。そうしたことが普通に行われれば、もっと宗教間対話も広がっていくと思います。

祈りと音楽——宗教と文化

傍聴参加者A（ジャーナリスト） 宗教的な役割として祈りと音楽を携えて行かれたということですが、祈りというのは具体的にどういうことをされたのでしょうか。

長谷川(間瀬) 1分間の黙祷を入れました。ハーブ演奏の後に黙祷をして、アッシジのフランシスコの祈りを、私がまず日本語で唱えて、キャロルが英語で唱え、そして最後にチーンとゴングを鳴らして終わりました。2年目は、英語での祈りのあとにお坊様の廻向があってゴングが鳴るという形でした。

傍聴参加者A（ジャーナリスト） 子どもたちも唱和して一緒に祈ったのですか。

長谷川(間瀬) 「1分間の黙祷を捧げます」と言うと、彼らは目を瞑って頭を垂れていました。廻向の

06 | 賀来周一(かきしゅういち) | キリスト教カウンセリングセンター理事長。1931年、福岡県生まれ。日本ルーテル神学校、立教大学大学院、米国トリニティー・ルーテル神学校などで学ぶ。日本福音ルーテル教会牧師として諸教会を牧会。ルーテル学院大学教授などを歴任。



井上貴詞

あいだもじっと聞いていました。

アッジのフランシスコの祈りというのは、「私を平和の道具としてお使いください。争いのあるところには平和を。悲しみのあるところには喜びを」という、とてもとてもわかりやすい祈りなので、子どもたちはじっと聞いてくれていました。

井上貴詞 会のタイトルは二転三転して最終的には「ハーブの調べと支援者の集い」になったということですが、2012年は「支援者の集い 唐丹・サンタルチア」でした。サンタルチアというのはもともとキリスト教徒の中では光の女神の象徴ですが、とはいえこれはスウェーデンでは一つの民間のお祭りになっています。ですから、キリスト教そのものというよりも、クリスマスのように文化的なものだ紹介をすれば受け入れられやすい。そういうところから出てきたタイトルですか。

長谷川(間瀬) そうですね。一番最初に子どもたちの前で、サンタルチアというのはこういうお祭りなんだよと話をします。被災地のような真っ暗な中にも必ず南のほうから光が灯される。私たちも南(東京)のほうから光を灯すためにやってきました。いつまでも暗いわけではない。灯火を灯したらあとは自分たちでろうソクの光をどんどん広げていってね、と。

スウェーデンでもクリスマスの前がサンタルチア祭です。教会の中をロシアの女神が行進するんですが、これはキリスト教と土着の文化の融合です。唐丹とスウェーデンは、同じくらいの暗さや寒さなので、祭りとして受け入れてもらいたかったという思いはありました。ローカルなコミュニティにおける祭りの力というのはすごく大きいです。

井上 それで受け入れてもらったけれども、最初(2011年)はタイトルを「ハーブの調べと支援者の集い」としたのは、いろんなやり取りがあったからですか。

長谷川(間瀬) とにかく「魂」という言葉を使いたくないと言われてしまいました。でも「サンタルチア」はカタカナだから、そこはいいということです。

復興の中の格差の問題

森田哲也 復興と同時に被災者の中に格差の問題が出てきたと言われました。その格差に対して、コミュニティあるいは行政は何らかの手を打っているのですか。格差の問題はずっと続くのではないかと思うのですが、現状について教えていただけますか。

長谷川(間瀬) 格差を感じるのは、やはりまずはお金です。たとえば私たちは毎年卒業時に各家庭に1万円をお渡しします。それをものすごくありがたいと思ってくださる人とそうでもないと思う人がいる。それをすごく感じています。また、シェルターから出て新しいところに引っ越せる子どもとシェルターに続けるしかない子どもたちがいます。そういう話には敏感なところがあって私たちは子どもたちとそうした話はできません。すごく悲しい状況にはあります。

稲垣 地域の主な生業は漁業ですか。

長谷川(間瀬) そうです。ホタテとかワカメです。ワカメ漁協の人たちにも10万円をお渡ししてきた年もありました。風評被害によって、せっかくワカメができたのに買ってもらえないから支援者に配ってくださったという年もありました。

稲垣 そのお金は募金からですか。

長谷川(間瀬) ネットでEEC通信を見てくれた支援者が募金してくれたり、エスペラントに翻訳しているので、その関係でフランス等海外からの支援金が届いています。

持続的なケア——お金(フィジカル)と魂(スピリチュアル)

井上 きっかけとなった高館千枝子さんは先生のご友人だということですが、宗教的なケアということ

森田哲也



についてはどうお考えなのでしょうか。

長谷川(間瀬) 震災後の電話で彼女は、「とにかく金銭的な援助のことしか私には考えられません。恵美さん、何か他のことを考えられない?」と尋ねられました。そこで初めから私は「魂への配慮(スピリチュアルケア)」を担当することになりました。私がクリスチャンだということも彼女は知っていますから、クリスチャン的な要素をたくさん持ってくることはある程度わかっていたと思います。彼女自身はクリスチャンではありません。

彼女は平気で人の心の中に土足で入っていくようなおばさま(笑)なので、どんどんやりたいことをしていく。ただただ助けたいというのが彼女のミッションです。それに私たちはブレーキをかけながら、サポートしていく。お金も周りがちゃんと管理していないと、「なければ自腹で」というくらいの人ですから。

井上 会の名前を変えたりとか具体的な学校の校長先生とのやり取りの中で、高館さんがあいだに立つということはあるのですか。

長谷川(間瀬) そこはノータッチです。もちろん金銭的な援助は高館さんとそのグループでやってくれています。また彼女は盛岡に住んでいますから、毎月のように唐丹に訪ねていって、そこで信頼関係を築いてくださっています。

森田 地元に教会はあったのでしょうか。

長谷川(間瀬) ないです。中心は盛岩寺です。

森田 教会がそこにあれば、協力関係の中で宗教的な魂のケアということに関して持続的にやっていくことも可能と思ったので質問をさせていただきました。

持続性ということを考えると、町の産業が肝心だと思います。子どもたちが2年3年と経て心が落ち着いてきたときに、生活を安定させるためには親の職の問題がかなり大きい。中学生になれば自分の将来についても考えるでしょう。「ここは自分が将来暮らす町(あるいは、帰ってくる町)だろうか?」ということも彼らのスピリチュアリティに関わってくると思います。持続性といったときに、スピリチュアルな面とフィジカルな面を同時進行でトータルに捉える必要があるという私自身の問題意識があります。

震災によって船や港のインフラが壊滅状態となったワカメ養殖業に投資をするというプログラムを見て、私はそこに投資をしました。見返り(といっても5年か10年後にその製品が届くといった程度)を期待する投資ではなくて、地域の産業を少しでも自分たちで支えていこうとする目標がはっきり見えたからです。慈善事業ではない。持続的にその地域が経済的にも社会的にも機能していくというための支援です。震災後には、こうした「倫理的な」投資が広まってきています。

持続可能性といったときには、そうした地域の経済的な側面も同時に考えていくこと、そしてそこに宗教者として何ができるかというのもまた一つ課題だと思います。

地元住民の意識と外部者の意見

傍聴参加者B 唐丹町は3回津波に遭ったというお話がありました。今回の被災後も、地域によっては高台に移転するとか、高い堤防を建てるとか、ニュースで聞きます。この唐丹町は新校舎を建てるという話も出てきましたが、結局、原状を回復する形になるのでしょうか。

長谷川(間瀬) 水没した小学校のあった場所は更地になっています。そこには建てません。かろうじて残った高台にある中学校に小中学校を合併したものを建てるということです。堤防も、高くしようという話もあったのですが、途中で打ち切られました。「高くすることによって危機意識が低くなる」という意見が住民側から出たそうです。また、町民はそこに先祖代々住んでいて、お骨も全部盛岩寺にある(盛岩寺は鐘楼などが倒れたが、お骨は流されていない)、高台移転は「外部者の意見だ」とはっきり言われました。

傍聴参加者A(ジャーナリスト) 漁師町は特にそうですね。アイデンティティの問題で、「山に上ると漁師でなくなる」と、彼らはそう言うんです。

稲垣 3回津波があって、明治29年には高さ16.7メートルの津波、今回はもっと高かったと思います。それでも町の人は高台には移らない。これからも津波があればその被害を覚悟して生きていくということなのでしょう。

長谷川(間瀬) こうしたことは、海外でもあるようです。谷の下に住んでいる人たちがいて、何回も洪水に遭って流されている。なぜ上に上がってこないんだろう?と思うわけですが、彼らは絶対に上に上がってこない。そういう話を聞きます。現地の人たちの生き方というのは外部者には理解不可能なことが多いです。

グローバルというのは結局、普遍的にみな同じにして、マクドナルド化しようとする。でもローカルの人たちの持っているアイデンティティというのはものすごく強いというのは感じています。

傍聴参加者A(ジャーナリスト) 低地であっても、いざというときに命が守れるようにシェルターをつくるのが行政の役割だったりします。避難塔みたいなものです。たとえばバングラデシュで洪水がしょっちゅう起こるところにはそういうものが、NGOが資金援助したりしてできつつあります。でもスラム街は依然としてそこにあるわけです。

稲垣 大洪水が来て、人も畑もたくさん流されたけれども、洪水が起きることで土地が肥沃になってたくさんの生産物ができるというメリットがある。だから本当にその土地に生きている人の魂を推し量ることはむずかしい。持続可能性と先ほど森田さんは言われたけれども、何を以て持続可能なのか。彼らは、持続なんかはしなくてもいいという考えかもしれませんね。それを尊重しなければいけないのか。たいへんにいろいろ考えさせられますね。

傾聴ボランティアと地域の特性

石野徳子 私はこの3年間というのはすごく重要だと思います。人生の中で多感な時期に、あれほどの災害に遭って、親しい人・身近な者が亡くなるという喪失体験がされている。その中で今回こういった音楽を聴く、祈る、ロウソクを灯す、そうした一つひとつのことが心にすごく浸透していく。そういうものによって涙を流す。この時間というのは、一人ひとりの参加した子どもたちの中に焼きつく、すごくインパクトの強い時間だと思います。その中で本当に価値観が変わってしまうということすらあるのかと思うので、これはすごい関わりだと思うんですよ。

アンケートも、震災のことを思い出させたくない、PTSDの再燃をさせたくないという意味もあって、断られたのかもしれない。結果的に何年か後に、あるいはその人たちが成人になったときに、冷静にこのことを思い出すときが必ず来ると思うので、その時に意見を聞くというのも一つの方法ではないかと思っています。やっていることはすごく良いことだと思うんですね。継続してやる意味は大きいと思います。

長谷川(間瀬) ありがとうございます。それこそ本当に10年後20年後ですね。そういう関わり方、そういう宗教の役割というのはあっていいと本当に思います。

稲垣 スピリチュアルケアがテーマですが、人間の生活は、スピリチュアルな面、メンタルな面、ソーシャルな面、フィジカルな面と多層的です。PTSDは、今は、臨床心理士といった人たちがすごくケアの対象にしています。持続可能性ということでは、経済的な意味のまちづくり、インフラ整備も含みます。スピリチュアルもソーシャルも含め全体、トータルで人間です。一つの部門だけで支援ということは難しいと思います。まちづくりも含め、行政、インフラ、税金なども含んで、持続可能な支援ということを考えなければいけない。

傍聴参加者A(ジャーナリスト) 学校側がアンケートを拒否したというのは、もし子どもたちにフラッシュバックが起きたときにどう対応していいかわからない、対応できないという警戒からだだと思います。私

石野徳子



が取材をして聞いている話では、傾聴ボランティアというのがあって、それはとにかく話を聞くだけなんです。聞いてあげることによって心の底に押し込めていた思いを吐き出すことができるので、癒しが早くなるそうです。今は表には出ないかもしれないけれども、思春期になったときに何か出てくるかもしれない。たぶん学校というシステムの中ではそれに対応しきれないと思うんです。それで警戒されたのだと思うのです。

傾聴ボランティアは相当の事例を聴いています。子どもたちが表面的にはずっと平気な顔をしていたけれども、何回も通って仲良くなっていく中で、ぼろっとつらい気持ちを教えてくれたとか、そういう事例はたくさんあります。

井上 学校側としてはとりあえず在席している子どもたちに何かあったら困るということだけで、その先のことについては考慮されていないし、自分たちに責任はないと思っている。しかし、そのときに適切な吐き出し方ができれば、思春期など成長してから何か起こってくるよりはいいかもしれません。だからアンケートではなく、インタビューができれば、話しているときに、この子はこれ以上聞かないほうがいいとか、聞いても大丈夫だとか、そういう判断もできていいのかもしれません。ただこうした方法では統計がとれるだけの数がこなせませんから科研費が取れるような研究にすることは難しいでしょうが、何らかの方法で子どもたちの声を残していくことはできると思います。

長谷川(間瀬) 傾聴ボランティアというのはどういう方がやられるのですか。

稲垣 臨床宗教師もやっていますが、多くは臨床心理士、カウンセラーですね。

傍聴参加者A(ジャーナリスト) そういった専門家の指導の下で、素人でも基本的な手解きを受けて傾聴ボランティアをしている人はたくさんいます。

石野 心の中を吐き出すこと(カタルシス)によって、その悲しみから立ち直るのも時間的に早くなるし、逆に押し込めておくと、心や体に悪影響を及ぼすことが多くなったりしますので、意図的に出してあげたほうがいいと思います。

長谷川(間瀬) 今回気がついたことは、東北の人は忍耐強いということです。小中学校の先生に、「カウンセラーは来るけれども、子どもたちは話しません」と言われました。そこで、祈る時間というのがけっこう大切ではないかなともう一回思ったのです。しーんとした中で1分間の黙祷をするときに、子どもたちは真剣です。傾聴ボランティアがいいことはもちろんよくわかっているし、そういう例もたくさん見てきていますが、でも唐丹町に果たしてそれが合うのかといえば、私は、合わないと感じています。私は、祈る時間が大切だったと思いたいです。そこは難しいですけども。

稲垣 地域性、ローカル性があります。岩手県は柳田国男が『遠野物語』を書いたように、村々に伝わる先祖の話やいろんな神様が出てくる民話の宝庫だったわけです。そういう風土というのはある。だからサンタルチアの女神もその一つになっていくのかもしれない。

長谷川(間瀬) それはわからないですが、10年後20年後というのが大切かもしれないですね。

震災ボランティア活動と若者の宗教心の発達

岡村直樹

私の研究内容は、震災ボランティア活動に参加した学生の体験、参加した学生の内的変化、ボランティア活動の教育効果、そして教育的有用性に関する調査・研究です。

私の専門は宗教教育学です。公共の学校でどうやって宗教を教えるかという意味での宗教教育ではなくて、欧米を中心に、宗教を教育するための方法論とか、人間理解とかを中心に確立されている学問です。残念ながら日本では宗教教育学という学問は確立されていません。私が教育を受けたのはクレモントという学校で、ジョン・ヒック(John Hick)とかジョン・カブ(John Cobb)という先生から教えを受けました。ですから、長谷川先生の言われた宗教多元主義というのは、私自身も影響を受けた部分です。

研究の出発点と意義

震災ボランティア活動に参加した学生の体験、内的変化、教育効果、そして教育的有用性の調査・研究ですが、大きく分けてそこには2つの目的があります。「学生の中に何が起ったのか」を明らかにし、「教える側としてどういう教育効果をそこに見出して、どういう教育を今後めざせばよいのか」ということです。

この研究をしたいと思ったきっかけは2つあります。

1つは、ニュース報道等を通して被災地と被災者にさまざまなスポットライトが当てられる中、あまり注目を浴びることのないボランティア活動に送りだされた学生の現地での体験や、彼らの心の中に起った変化等について興味を持ったことです。被災地の人たちにスポットライトが当てられるのは当然ですが、数千人の学生が日本各地からボランティアとして送り込まれているのに、彼・彼女らが一体どんな体験をしたのか？ということがあまり研究されていないと感じたことがきっかけでした。

もう1つは、2011年6月30日付けの「産経新聞」に、その時点で、東日本大震災のボランティアにおける学生の占める割合は約2割で、阪神淡路大震災の6、7割と比べて非常に低いということが報じられました。これは地域的な要因が大きいのですが、「もっと大学は学生を送るべきではないか、ボランティア活動に力を入れるべきではないか」という、個人的な思いからです。

研究方法と研究対象者

1 | 研究方法

研究の方法は、グラウンデッド・セオリーという質的研究の方法を用いています。とくにマイケル・クイン・パットンのメソッドを使っています⁰¹。グラウンデッド・セオリーは、アンケート等を通して量的なデータを収集しそれらを数的に分析するいわゆる量的研究とは異なり、研究対象とするさまざまな現象を深く掘り下げ、より狭く、より深く学ぶことに焦点を当てた質的研究に属する研究方法です。グラウンデッド・セオリーは、量的に表わすことの難しい、宗教心、信仰心、感情、心の動き、対人関

01 | MichelQuinnPatton, *Qualitative Research and Evaluation Methods* (Thousand Oaks, California, Sage Publications, Inc., 2002), pp.124–27.

係といった分野において、特にその力を発揮する研究方法であると近年認められつつあると思っています。

グラウンデッド・セオリーを用いた実証研究は、科学的ではないと考えておられる学者もいらっしゃいますが、私は、科学的な実証研究のつもりでやっています。つまりグラウンデッド・セオリーとか質的研究は、現象学的研究の方法論に属して、なるべく自分が考えていることや先入観を排して、そこで起こっている現象をそのまま捉えて、そこから理論構築をしていく方法です。ですから、なるべく、先入観や結果予想を持たずに進める研究方法です。

2 | 対象者

研究は、マイケル・クイン・パットンの均衡サンプリングの方法を用いて対象者を以下のように限定しました。1…今回初めて震災ボランティア活動に参加した。2…震災以降50日以内に活動に参加した。3…ボランティア活動の場所は岩手県、宮城県、福島県のいずれか。4…実際に被災地を目の当たりにし、また被災者とのコンタクトがあった。5…ボランティア活動終了時から1か月以上が経過している。

「今回、ボランティア参加は初めて」ということにした理由は、たとえば阪神淡路大震災の際にも参加して、前の体験と今回の体験を比べるという考察ではなくて、初めてのボランティア体験ということに限定したかったからです。また2、3、4番にあるように、50日以内とか、場所とか、被災地に実際に行った人に限った理由は、震災のツメ跡が色濃く残る時期に、特に被害が甚大であった地域で実際に被災者と触れ合った体験を持つ学生からのデータを収集するという意図からです。5つめは、研究参加者の宗教性や信仰心の変化に焦点を当てるという本研究の性格上、学生がボランティア活動から戻ったあと、しばらく時間が経過しており、そのあいだの変化をデータとして収集するという意図がそこにあります。

実際の対象者(研究参加者)となったのは、東京基督教大学に在籍する2年生と3年生の9名(男性3名、女性6名)の学生です。

本研究では、より質の高い研究の実施に向け、データの収集及びデータ分析にトライアングレーション(triangulation)の方法を用いました。トライアングレーションというのは多角性を表わす言葉で、さまざまなアングルからのデータ収集と同様のデータ分析の必要を表わしています。データ収集におけるトライアングレーションでは、個々の研究参加者からの返答と、彼らに集まってもらってグループディスカッションしてもらった内容、それから彼らの非言語コミュニケーション(口調、表情、声の大小等)もデータとして取り込んでいます。分析の段階では、宗教学、社会学、心理学からトライアングレーションで分析をしています。

パットンのガイドラインに従って、open-ended questions、いわゆる反構造化インタビューをしています。インタビューの質問内容は以下の非常にシンプルな3つだけです。

- [1]…震災ボランティア活動に参加しようと思ったきっかけや理由について自由に述べてください。
- [2]…被災地での体験を通してどのような感想を持ちましたか。自由に述べてください。
- [3]…ボランティア活動から戻って自分にどのような変化がありましたか。自由に述べてください。

この3つの質問だけを軸に、1人約1時間から1時間半、そのセッションを2回ずつ持って、あとはグループディスカッションを2回、全員を集めて行ないました。

結果

いくつか内容を紹介します。

—

結果1 ▶ まず「震災ボランティア活動に参加しようと思った理由について自由に述べてください」という[1]の質問の答えから、研究参加者の多くに共通するボランティア活動参加のきっかけや理由が浮かび上がってきました。それらを解説すると、第一は「何かしたい」「何かしなければならない」という強い気持ちが起ったことと、第二は「被災者の身に起っていることを実際に見てみたい」、また「体験したい」という欲求が起ったということでした。

実際に彼らが語った言葉は、「テレビに映る被災者の様子を見て、行かずにはいられなかった」「同じ日本人が苦しんでいるのを見て、放っておけなかった」「震災の様子をテレビで見て、このことを人ごとにしたくないと感じた」などでした。またこんな意見も出てきました。「実際に被災者の様子を見て、同じ苦難を体験したいと思った」「被災地の人の苦しみをリアルに体験したいと思った」「実際の被災者の状況をこの目で見たいという思いもあった」と。研究参加者の多くには「何かしたい」「何かしなければならない」という強い気持ちが起った。そのことが引き金として多く語られています。テレビに映る被災者の苦しみの様子や、震災に関する友人・知人の行動や言葉などもきっかけとなったということです。

また、こんな言葉も出てきました。「原発の問題もあったので、被曝し、健康に害が加わることも覚悟した」「身の安全は保障されていないということを覚悟した」というふうに、「覚悟」という言葉が結構出てきました。「生活は不自由になるだろうと覚悟した」「周りの反対を押し切って行っただが、賛同してもらえなくても良いと思った」と。「体験したい」「知りたい」「何かしたい」という思いで行ったということが浮かび上がってきました。

—

結果2 ▶ 被災地の人々のために何かしたいというモチベーションに押し出されて、東北三県に向かった研究参加者を待っていたのは、想像を絶する光景でした。津波によってできた瓦礫の山や、何百人もが一カ所に身を寄せる避難所の様子を彼らは以下のように言い表しています。

「先に被災地に行った人から『言葉にならない』という感想を聞き、自分は違う感想を持つのではないかと思ったが、やはり実際言葉が出ないほど驚いた」「本当にこれが現実なのかなあと思った」「そこに広がっているのはファンタジーの世界の光景なんじゃないかなあと思った」「始めは車から惨状を見て、夢なのではないかと思ったけど、実際に車から降りて、とくに魚の生臭いにおいを嗅ぎ、ああ、本当に現実なんだなと感じた」と。「絶句した」「信じられない」「理解できない」「ここに自分がいることが不思議だ」、そういう意見がたくさん出てきました。これが明らかになった2つめのことです。

—

結果3 ▶ インタビューやディスカッションの中で、想像を絶する被災地の光景と同等に感情を込めて語られたのは、目の前に広がる悲惨な光景の中でボランティアとして動く自分自身のありようや自分に対する思いに関する感想でした。こんな言葉が出てきました。

「行く前は、被災地についたら、さっとするべき事を始めようと思ったけど、実際に多くの被災者の姿を見て、足がすくんで立ち尽くしてしまった。前に進めず、考え込んでしまった」「あまりの被害の大きさに、私なんかが、ちょっと手伝うことに意味があるのかなと思った」「何か役に立てるんじゃないかなと思っていただけ、自分の働きは本当に役に立つのか疑問を持った」と。「ドロ出しのボランティアをした家の住人に対し、本当に大変だなあ、辛いんだなあと感じつつも、ベースキャンプに戻ってシャワーを浴びたいと思う自分がとても小さく思えた」「安全な時に安全な場所から災害の様子を見る自分に対し、自分は何様だろうと感じ、申し訳ないと思った」「自分は何もできないということ。それだけを

学んだ気がする」「自分の欲望がすべて罪深いことのように思えた」「一人のおばあさんが、家の瓦礫の中で何か探しているのを見て、『何かお探ですか。お手伝いします』と軽く言ったら、『どんな死体を探しています』と言われ、返す言葉がなかった。苦悩のレベルの違いを感じ、また自分は本当に傲慢だったと思う」というように、ここは一番リアクションが多く出てきました。

研究参加者の多くは、被災地ボランティアという活動の中で、自らの能力や技量を再確認し、そのことを通して自分の実状を直視することを、ある意味「迫られた」と感じたようです。またそれは、たとえば「自分は何もできないということだけを学んだ気がする」という言葉に代表されるように、「何かしたい」「被災者の苦しみを共有したい」といった思いを胸に、意気揚々と被災地に乗り込んだ自らの「甘さ」や「安易さ」に対する反省という意味合いが強いように思われました。

—

結果4 ▶「ボランティア活動から戻って、自分にどのような変化がありましたか。自由に述べてください」という[3]の質問に対して最も多かった答えは、上記の3と同様に、自責の念を含むものでした。東北三県から戻って1カ月以上が経過した時点で、多くの研究参加者は、被災地での体験の鮮明さや、被災者に対する思いが薄れつつあると感じ、それに対してフラストレーションを感じているようでした。

「もう帰ってきてから2カ月経つんですけど、だんだん被災地の体験が薄れてきてしまっている自分がいる」「今も避難所生活をしている人がいるのに、私は普通の生活に普通に戻っている自分がいやだ」「被災地の人の苦しみ、それを感じた自分を忘れたくないという思いがある」「被災者のための祈りが、最近ありがたくなってきている感じがする。祈る思いを忘れてしまう時もあり、反省する」「帰ってきてたった2カ月なのに、もう100だった被災地への思いが30くらいになっていて、結局自分は自己中心的だなと思う」というようなことも言っています。

研究参加者の多くは、被災地でのボランティア活動の中で受けたさまざまなショックが、時間の経過と同時に徐々に薄れつつあることに、大きな危機感を感じているようでした。同時にそのような変化を通して自らの弱さを認識し、それを強く反省しているように思われました。

—

結果5 ▶「ボランティア活動から戻って、自分にどのような変化がありましたか。自由に述べてください」という[3]の質問に対して、4と同様に多かった答えは、ボランティア活動を通して得た、物事に対する新たな観点、「以前は○○だと思っていたが、今は○○と思う」という表現が多く見受けられました。具体的な内容はさまざまですが、「以前はあまり目を留めなかったこと」「以前はあたりまえと思っていたこと」等に対して、上記の結果3と4に対するのと同じように、自責の念も込められた表現を用い、それらが「改められた」ということを語っていました。

たとえば「日常生活で起こるさまざまな出来事の一つひとつに、小さな喜びを見いだし、この限りある地上の生活の中で、それを楽しんでもいいんだと思うようになった」「震災前は、水道が出たり、電気がついたり、道路が平らなものも当たり前だと思っていた。そういう当たり前が当たり前ではないと思うようになった。当たり前のものが、実は崩れやすいものだということに気がついた。人間が作り上げてきたものが、たとえば新宿の高層ビルなんかも、実はもろいものなのだと感じるようになった」「色々なことに目を向けなければいけないんだなあと思うようになった。震災も大変だが、世界の他の国々にも多くの苦しんでいる人がいるという現実にも目を向けなくてはならないと思った」とか、「この震災で亡くなったのと同じ数の人が、毎年自殺という形で亡くなっていることに気がつき、被災地で苦しんでいる人もたくさんいるが、自分の周りにも苦しんでいる人がたくさんいるんだなあと思うようになった。被災地でもそうだが、自分の周りの苦しんでいる人に目を向けることの大切さに気がついた」と言っています。さらには「新しいものの見方」の中には、実は被災地でのボランティア活動の最中に気がつき、今に至るまでそれを続けているとする言葉もありました。たとえば「ボランティア活動のベースキャンプ

での留守番を任せられ、現場に出て行かれないことに不満を感じたが、留守番をしながらの皿洗いや仕分け作業も大切な活動の一部だということを思われ、現場に出ていった人たちのためのそのような働きも大切だと思い、小さなことにも意味を見いだせるようになった」と。私がかちょっと感動してしまったのは次の言葉です。「ドロの中にあつた球根から芽が出て、スイセンが咲いていたんですけど、そんな些細なことに感動する自分がいました。神が造つた自然がそこにあることに感動したんだと思います」と。

また宗教的なこと、宗教観の変化に対する言葉も出てきました。「被災地に行く前は、神は愛であり、すべての事が神の愛から出ていると確信していた。被災地から帰ってきて、神は愛であるという信念は変わらないが、そのことを簡単に口に出したり、そのことを安易に祈ったりするべきではないと思うようになった」「被災地での祈りの中で、神様の計画とか、神のみこととかいう言葉が、まったく使えなかった。以前は、そういった言葉を頻繁に使っていたけれど、物事をあまり深く考えずに使っていたと思う」とか、そういうものの新しい見方が出てきました。

—

結果6 ▶ 研究参加者の全員に、質問[3]へのフォローアップとして、ボランティア活動後にどのような「振り返り」の機会があったかを尋ねました。「友人や家族と少し話をした」「自分の中で反省した」といった答えは多くありましたが、「ボランティア体験を振り返る」という目的をはっきり設定し、きちんと時間を確保した上でのグループディスカッションやインタビューの機会はなかったと答えました。また本研究のインタビューとグループディスカッションに対する感想を求めたところ、以下のような返答がありました。

「インタビューの質問で、色々な感情や思いが引き出された」「自分が自分の体験を口に出して話すことによって、自分の考えがはっきりとした部分もあった」「ボランティア体験について、感覚的な記憶はあるけれど、それを口に出して伝えるのは難しいと思った」「グループのほかの人の話から、教えられたことがたくさんあった」「人の言っていることを聞いて、自分の思いとの相違点や、思い出したことや、気がつかされたことが多くあった」「ボランティア体験の内容は似ていても、そこから受け取ることや考えること、学ぶことは人それぞれなんだなと思った。ああ、そうなんだと思うこともあった」というようなことですが、これらは結果として出てきたものを私が抽出して並べ直したものです。

分析

収集されたデータ、およびそこから浮かび上がった結果を分析するために、本研究では、宗教学、社会学、心理学という、複数の観点からなされた学術研究結果がその参考とされました。これは、より多角的な、より精度の高い分析を目指し、質的研究におけるトライアングレーション (triangulation)の方法を用いるということです。

—

分析1 ▶ ボランティア活動を、社会心理学の観点から研究するジェラルド (David Gerald)らの研究は、さまざまな人間がボランティア活動に足を踏み入れる経緯を調査、分析し、それをボランティア活動を決定づける要素として、以下の4種類の形態に分類しています⁰²。

1…社会奉仕活動が属するグループの強いアイデンティティがあるから出掛けた、2…社会奉仕活動の必要性に対して強い信念を持っているから出掛けた、3…自分のスキルアップや自己充実のために出掛けた、4…純粋に人を助けたいと強く思ったから出掛けた、という4通りです。

ボランティア活動に従事する者は、必ずこれらの4つのモデルのどれか一つに当て嵌まるということではなく、複数の要因の中でどれが最も強いかということを経ラルドたちは言っているのですが、本研究に参加した大学生が震災ボランティア活動に挑むきっかけとなったのは、「被災者の苦しみ

02 | David Gerard, “What Makes a Volunteer?”, *New Society*, 8 (1985), pp.236–38., Penner, Louis A. and Marcia A. Finkelstein. “Dispositional and Structural Determinants of Volunteerism,” *Journal of Personality and Social Psychology*, 74 (2) (1998), pp.525–37.

を他人事としたくない」「被災者の苦しみを知ることによって彼らを助けたい」といった強い思いからであったということが、結果1で出てきました。それを見る限りでは、この分析の中の2番と4番が私がインタビューした学生の中では一番モチベーションになったのではないかと思います⁰³。

—

分析2 ▶本研究の参加者は、被災地で彼らが目にした光景を、「口では言い表せない」「信じ難い」という言葉をもって伝えようとし、さらには「異様な光景」「絶句した」「不思議だった」「ファンタジーの世界」といったフレーズも飛び出したことは研究結果2で言いましたが、このような日常を超えた震災危機体験は、どのような宗教的インパクトをもたらすのでしょうか。社会心理学者で、宗教改心論を専門とするランボー（Lewis R. Rambo）は、危機によって個々に生じる宗教的变化を、「危機によってもたらされる無秩序と混乱は、個々がそれまで『当たり前』と思っていた世界観に疑問を投げ掛ける役目も果たすものである」と説明しています⁰⁴。

またランボーは、危機を、外的な危機と内的な危機の2種類に分類します。内的な危機は、体や精神の病、個々の考え方の変化に起因し、外的な危機は、政治的变化や天変地異、さらには人間関係の変化等の人間的な要因もそこに含まれるとし、また危機を通して個々の日常に鋭く投げ掛けられた疑問に対して、それぞれがどのような態度で臨むかによっても、宗教心の変化に大きな違いが現われると主張しています⁰⁵。ある者は、この疑問に対して消極的な態度を示します。その場合、大きな宗教心の変化が起こることは少ないと述べています。ある者は、積極的にその疑問に対する答えを模索しようとします。その場合、その過程で世界観が変化して宗教的改心につながるが多いとランボーは主張しているのです。つまり、体験したままではダメなんです。振り返りの体験、振り返りをして、どういことなんだろうと自問自答する。またはグループディスカッションでそれを考えるということが宗教心の変化につながるということをランボーは言っているわけです。

また宗教教育学者で、若者の宗教性を専門に研究するスティーブ・フォートン（Steve Fortosis）は、危機体験について以下のように述べています。「発達論の立場から考えて、危機体験は、若者が成長した宗教性を持つに至るプロセスの中で、非常に重要な位置を占めるものである。多くの若者は、危機体験を意図的に避け、それによって（ポジティブ）な宗教性の成長の機会を逃してしまうのである」と⁰⁶。フォートン（Fortosis）はランボー同様、若者の危機体験を宗教性のポジティブな変化と結びつけ、それを宗教的成長の好機と位置づけています。

これに関しては私の以前の研究でも同じ結果が出ています。日本の若者を対象にした研究としては、私が2009年にアメリカの宗教教育学会の学会誌 *Religious Education* で発表した、米国のキリスト教系大学に在学する日本人大学生の宗教心の変化に関する調査があるのですが、そこでは留学中に起こったさまざまな内的危機体験が、研究参加者の宗教に対する思いに大きな変化をもたらし、またそのことによって宗教に対するネガティブな感情がポジティブなものに変わったという研究結果が出ています⁰⁷。留学生というのはアメリカに意気揚々と行くわけです。特にカリフォルニアに行く学生はヤシの木とかビーチとかを思い浮かべていくんですね。でも彼らを実際に待っているのは何かというと、車がないとどこにも行かない。また都市部の大学は犯罪の危険と隣り合わせでもあります。つまり自由を求めて行ったのに、そこにあるのは不自由ばかり。言葉もしゃべれない。そういう危機体験の中で彼らの宗教性が少しずつ変わっていったのです。

—

本研究の参加者はどうでしょうか。まず彼らは、東日本大震災という危機に対して、ある意味自分自身の身の安全や、自分の時間を犠牲にして、そこに積極的に足を踏み入れた若者たちであると言えます。また自分が置かれた危機的状況の中で、彼らの多くは、そこから投げかけられる大きな疑問を、自分自身の問題として受け止め、結果3、4にも示されているように、「思い知らされた」「傲慢だった」などという言葉を用いて、新たにされた自らの思いを説明しています。本研究に記録された事柄

03 | Thoits, Peggy A. and Hewitt, Lyndi N., "Volunteer Work and Well-Being", *Journal of Health and Social Behavior*, Vol. 42, (June, 2001), pp. 115-31.

04 | Lewis R. Rambo and Charles E. Farhadian, "Converting: Stages of Religious Change," in Christopher Lamb & M. Darrol Bryant, *Religious Conversion: Contemporary Practices and Controversies* (London: Cassell, 1999), p. 25.

05 | Ibid., p. 26.

06 | Steve Fortosis, "The Religious Education for College Students" in *Handbook of Young Adult Religious Education*, ed. by Harley Atkins (Birmingham, Alabama: Religious Education Press, 1995), p. 241.

07 | Naoki Okamura, "Intercultural Encounters as Religious Education: A Phenomenological Study on a Group of Japanese Students at a Christian University in California and Their Religious Transformation," *Religious Education*, 104-3, 2009, pp. 289-302.

邦題 | 「異文化体験と宗教教育: カリフォルニア州のキリスト教系大学に在学する日本人留学生の宗教心の変化に関するグラウンデッド・セオリーを用いた質的研究」

の中で、宗教に関する直接的な言及の占める割合は比較的少なかったのです。震災ボランティア活動は、少なくとも上記の社会心理学や宗教教育学の立場から、彼らにとってポジティブな宗教的变化をもたらす可能性を内包する「チャレンジ」であったということは言えるのではないのでしょうか。

—

分析3 ▶ 宗教性のポジティブな変化について、それを「成長」や「発達」という側面から、さらに具体的に分析します。米国における宗教心理学研究や宗教教育学研究に多大なる影響を与えたエモリー大学のジェームズ・ファウラー (James W. Fowler) は、エリクソンの発達心理学とか、コールバーグの道徳発達論のモチーフに基づき、自らの Faith development theory (信仰発達論) というものを構築したことで有名ですが、彼はティリッヒやニーバーの人間理解に近い考え方を持っていて、信仰を超越者との関係性に関して、すべての人間の持つユニバーサルな要素として扱っています。さらに「信仰」の成長を「心理的」な発達と区別せずに、ここがユニークなところですが、一つの発達の枠組みの中に入れて両者を理解するということを提唱しています。彼の提唱する発達論の第一から第五段階は以下ですが、とても興味深いですね。ご自身が宗教者であるとすれば、自分の宗教の歩みを振り返って、どの時点でどう変わったかを見るとすごくおもしろいかもしれません⁰⁸。

第一段階「Intuitive – Projective faith: 直感的信仰」… 子どもが親の「目に見える信仰の形」を直感的に模倣する。自らの信仰に対する論理的な考察は無い。

第二段階「Mythic – Literal faith: 神秘的で文字通りの信仰」… 現実と非現実を識別し、親以外の「信仰の形」を受け入れることができる。しかし物事を抽象的に考えることはできない。

第三段階「Synthetic – Conventional faith: 模造された紋切り型の信仰」… 家族や友人といった自分の周囲にある大切なグループや権威に自らを合わせる形で信仰を形成する。理論的な考察は浅く、物事を短絡的に考える傾向がある。

第四段階「Individuative – Reflective faith: 個人的で熟考された信仰」… グループや権威による信仰の形を批判的に見ることが可能。自主的な信仰の形成を試みるが二者択一的な理論展開が多い。

第五段階「Conjunctive faith: 関連性、関係性を重視する信仰」… 信仰の自主性に限界を感じ、他者の異なる主張や、逆説的なメッセージに理解を示す。相対主義的にはならず、自らの信仰の形を大切にしつつも、異者との対話や共存の可能性を探る。

第六段階「Universalizing faith: 普遍的信仰」… 真実の多元性や逆説性に対する迷いと共に自我を捨て、神の意志に身を任せ、社会貢献に尽くす信仰の形。

ファウラーの信仰発達論によると、高校生世代から大学生世代 (16–17 歳から 21–22 歳) は、ちょうど第三段階と第四段階の狭間に位置すると考えられています。第三段階の信仰は、重要な周辺他者に強く依存する形で成立し、第四段階の信仰は、そのような他者の影響から離れ、自主的な信仰の形成を目指すものです。繰り返しますが、ここでファウラーが「信仰」と言っているのは、いわゆる神様を信じるとか、聖書を読むとか、また一宗教、一教派に限定されたことではなく、すべての人が持っている神的な存在に対する畏敬の念のような、そういう意味合いの強いものです。主体的な信仰の形成というのは、たとえば若者が属するコミュニティの中の重要人物 (先生、親、先輩) から強い影響を受け、その信仰の形を模倣していた者が、さまざまな世界観や価値観の課題、また自らのアイデンティティの課題に自主的に取り組むことができるようになる。これが第三段階から第四段階への変化で、この変化は青年期に訪れることが一般的でも、大人になっても第三段階の信仰で止まって前に進まないケースもある、とファウラーは言っています⁰⁹。

ここで本研究の参加者の体験をもう一度見てみましょう。ボランティアとして自らが置かれた状況の中で、彼らの多くは、そこから投げ掛けられる大きな疑問を敏感に感じていたようです。結果 5 にも記されているように、彼らの多くは、それまで大きな疑問を持つこともなく受け入れていた事柄や、

08 | James W. Fowler, *Stages of Faith* (San Francisco: Harper & Row, 1981).

09 | Fortiosis, “The Religious Education for College Students,” p.231.

「当たり前」と思っていたものの見方が、実はそうではなかったという結論に辿り着いています。研究結果3、4からは、参加者の多くが、自らの「足りなさ」や「弱さ」に直面し、それを繰り返し反省する様子を見ることができますが、このような内省もまたファウラーの語る信仰発達が起こった証と考えることができるかもしれません。とはいえ、これは全員に同じように起こったということではなくて、一部の学生にはそれが顕著に見られたということです。

分析4▶ 研究参加者たちが、本研究で用いられたインタビューやグループディスカッションという方法そのものに対して、非常にポジティブな感想を持ったということにも言及する必要がありますでしょう。研究者は今回の研究過程において一切、研究参加者に対して自らの意見を述べることも、助言をすることもありませんでした。インタビューをさせていただきとお願いしただけで、彼らの体験や思ったことに對して何一つコメントしませんでした。しかし彼らの多くは今回の研究が、自らのボランティア体験を深く、また客観的に振り返る良い機会であったとコメントしています。

本研究に用いられた質的研究は、人間の生きた経験 (lived human experience) の本質を記述し、それを研究することを目的とするという点において、フッサールにより提唱された現象学にその起源を見いだすことができます。ボストン大学の神学部学部長で、宗教教育が専門の、私の恩師でもある、メリー・エリザベス・モアー (Mary Elizabeth Moore) は、その著書の中で、現象学に基礎を置く現象学的教育方法を、宗教教育における一つの最も重要な教育方法として挙げています¹⁰。それは従来の「先生が語り、生徒が聞く」というトップダウンの教育方法ではなく、学ぶ者がそれぞれの体験を持ち寄って、そこに起こるインターアクション (相互作用) を通して、各々の結論を形成するという教育方法です。

結果6からは、「インタビューの質問で、色々な感情や思いが引き出された」とか、「人の言っていることを聞いて、自分の思いとの相違点や、思い出したこと、気づかされたことがあった」というふうに述べています。

分析5▶ 本研究の参加者のリフレクションの中から次のような心境の変化を見ることができます。研究参加のモチベーションは「被災地の人の苦しみを体験したい」「どのような困難や苦しみがあるかを知れると思った」ということから、活動参加後の感想は、「自分が東京で持っていた不平や不満は被災地の苦しみに比べたら何でもないと思った」「被災した人と同じ気持ちを味わえると思っていたけれども、実際に行ったらまったくレベルが違い、到底それを感じることはできないと痛感した」「被災者に対して『大丈夫ですよ』などという言葉を手軽に使えないと思った」「高齢の被災者が『もう死んだほうがましだ』と言っていたが、返す言葉がまったく見つからなかった。気軽に答えることはできないと思った」という意見が出てきました。

私の分析ですが、これらは表層的な他者理解ではない、もっと深い部分での他者とのつながりに関する思いや表現であると言えるかもしれない。これらの感想を読んだ研究者の頭には「共感」という言葉が思い浮かびました。「共感」という概念に関する研究は、ドイツ人哲学者で心理学者のテオドル・リップス (Theodor Lipps) が用いた *Einfühlung* というドイツ語に始まり、米国人心理学者のエドワード・ティッチナー (Edward Titchener) によってそれを *Empathy* と訳されて以降、心理学の分野に広がってきました。*Einfühlung* はやはりドイツ語の *Verstehen* と比較されて理解することが多い言葉です。*Verstehen* が「相手に対する理解」と訳されるのに対して、*Einfühlung* は「感情移入」や「自己投影」といった概念を持つ言葉です。すなわち「共感する」ということは、単に相手を理解することではなく、感情を伴って相手に対して一歩も二歩も歩み寄り、相手と共にいることを指します。

また英語の *empathy* はやはり英語の *sympathy* と比較されることによってその意味合いの明確化が図られることが多いですね。*empathy* が「共感」や「他者に対する深い理解」という意味を持つ

10 | Mary Elizabeth Moore, *Teaching from the Heart, Harrisburg* (Pennsylvania: Trinity International, 1998), p.99.

のに対し、sympathy は「同情」や「憐れみ」と訳されます。すなわち「共感」とは、理性的に相手を理解しつつも、感情的にも相手を察するという言葉でもあると思います。キリスト教教育の現場において頻繁に語られ、さらに多くのキリスト教系学校の建学の精神にも謳われる「博愛」や「他者理解」は、理性と感情の両方を含んだ「共感」に近い概念なのではないかなということです。

本研究におけるボランティア活動の結果分析において、少なくとも研究に参加した一部の学生は、その活動がもたらした彼らの共感性の醸成をそこに見ることができるのではないか、という分析をしました。

提言

本研究は、震災ボランティア活動に参加した9名の大学生の生の声というデータに基づいて考察されているものですが、研究者は、研究参加者のボランティア体験のごく一部を垣間見たにすぎません。特に個々の学生の内的な変化や、宗教的な変化は、人知を越えた神の働き(導き)を通して起こる現象であり、そのようなものがすべて表面化され、記録されたわけでもありません。さらに、質的研究は、研究者の主観的な判断が多用される研究方法であり、たとえば本研究の研究者が、研究参加者の所属する大学の教員であることが、インタビューにおける学生からの返答や、その分析に何らかの影響をもたらしたことも十分に考えられます。繰り返しになりますが、質的研究の結果は、量的研究のそれと対比させ、二項対立の図式の中でどちらが優れているか競われるのではなく、研究や教育の目的を果たすために、あらゆるデータを活用するというスピリットの中で、説得力を持つ実践的な取り組みの手掛かりの一つとして活用されるべきものであろうと思います。それを踏まえたくうえで、2つ提言をさせていただきます。

—

提言 1 ▶ 日本の社会にさまざまなボランティア活動の機会が存在する中で、震災ボランティアは、それが必要とされる場所、時期、また内容において、非常にユニークな活動です。特に東日本大震災は歴史的な被害をもたらした大震災であり、現場での活動と他のボランティア活動を単純に比較することはできません。本研究で記録された学生の生々しい感情の動きや感想がそれを明らかにしていると言えます。

しかし一方で、さまざまなタイプのボランティア活動が、特に高等教育機関においてその重要度を増しつつあることは事実だと思います。近年取りざたされている「サービスマーケティング」は、「大学が有する潤沢な知的資源は、大学や研究者、学生だけに占有されるべきではなく、広く地域社会の人々にも還元されるべきである」という大学開放の理念に基づいています。

しかし、大学を通して行われるボランティア活動を、「大学生による社会貢献」という一方のみから捉えるのではなく、ボランティア活動の現場で起こるさまざまな困難やチャレンジを通して、「社会が学生に成長の機会を提供する」という方向からの視点が私は重要であると思っています。さまざまなボランティア活動に共通して、それらが「満足感、達成感の体験」「健康的なセルフアイデンティティの醸成」「精神的安定」といったポジティブな結果をもたらすことは、すでに心理学や社会学の観点から頻繁に指摘されています。

またボストン大学の学生を対象として実施された実践的倫理の研究では、大学生の倫理的発達に関して、社会倫理の授業を受けただけの学生と、ボランティア活動等を用いた実地体験を授業と併用させた学びを体験した学生では、後者の学生の倫理発達がはるかに勝っていただけではなく、彼らの多くが、その後、社会の弱者に対する自主的な活動に積極的に取り組むようになったことが報告されています¹¹。

加えて本研究で明らかになったように、ボランティア活動が、ランボーやファウラーの指摘するような

11 | Margaret Gorman, Joseph Duffy, Margaret Heffernan, "Service Experience and the Moral Development of College Students" (*Religious Education*, Vol. 89 No. 3, Summer 1994), pp.422-29.

宗教心(または広義の「信仰」)のポジティブな変化や発達を促す経験になりうることを覚えるとき、大学におけるボランティア活動を通じた教育の重要性は、今後、特にキリスト教系教育機関や他の宗教系教育機関において再認識されるべきだろうということです。

言いたいのは、上から目線で学生を被災地に送るのではなく、うちの大切な学生を育ててくださる機会、育ててくださる人々が被災地にはたくさんおられるので、ぜひ送って、育てていただきたいという、このような視点からもボランティア活動を考えるべきだろうということです。特に宗教系の大学はそうでした。

—

提言2 ▶ 本研究を通して明らかになった研究参加者の具体的な内面的変化にもし題をつけるとすれば、それは「自己を反省する」「苦しむ者を思う」「自分の周りの弱者に目を向ける」といった言葉に集約することができるかもしれません。「被災者を助けたい」という思いから被災地に向かった彼らが直面したのは、想像を絶する苦難でした。その中で彼らの多くは、当初自らが持っていた正義感や同情心を安易であったと猛省しつつ、それでも彼らにできることを模索しました。その中で多くが行き着いたのは、被災者の苦しみを忘れない努力を続けることや、今自分が置かれている場所で苦しむ人に目を向けることでした。これらはまさに、キリスト教における人格教育の到達目標の一部ではないでしょうか。ボランティア活動によってのみこれらが体得することができるということではないにしろ、少なくとも、若者の世界観に大きな疑問を投げかける機会となる類いのボランティア活動は、キリスト教精神やキリスト教世界観を教育する上で非常に有意義なツールであることは間違いないと思われます。

これはキリスト教だけではなく他の宗教でもまったく同じです。先週、私は駒沢大学で行われた日本仏教教育学会で発表してきましたが、このことを話してすごく共感していただきました。仏教の先生方と「ボランティア活動を一緒にやっていきたいですね」という話で盛り上がりました。

キリスト教系の学校のみならず、若者をミニストリーの対象者として持つ地域教会や、若者に特化したミニストリーに関わるパラチャーチ・グループも、同様な活動に積極的に若者を送り出すべきだろうと思います。だからキリスト教会でユースミニストリーをしたいと思うのであれば、教会の中で若者を囲ってそこだけで聖書を教えるよりも、いったん教えたら実際に社会に出て、近隣のボランティア施設とか、介護老人ホームとかに送って、そこで体験をさせて、そこから帰ってきてからまた彼らの世界観がどう変わったかということを、グループディスカッションなどを通して考え直すようなミニストリーが、私はすごく有効なのではないかと思います。

ボランティア活動に継続して取り組みつつ、それをそのグループの大切なアイデンティティの一つにする努力は、キリスト者としての大切な成長の機会を、そこに属する若者に対して提供するだけでなく、さらに今日、特に必要とされている、キリスト者と地域社会とのきずなを確立し、また深めることにもつながるのではないのでしょうか。

「なぜボランティアに出ていくんですか？」と聞いたときに、「社会奉仕活動が属するグループの強いアイデンティティであるから」という場合は非常に多いようです。たとえば今、私が関西学院の先生と共同で行っているのは、まさにそのような現場での研究です。

学生は先輩がみんなボランティア活動に行っているの、伝統としてボランティア活動に一生懸命行く。そういう、ボランティア活動をする大学というアイデンティティをつくるということです。それによって、ボランティア活動の継続性みたいなものもそこで担保されるでしょうし、大学が地域社会とつながります。または教会やパラチャーチ団体が地域社会とどうつながっていくかということに対しても、すごくポジティブに作用するのではないかと感じています。

Session 07

市民ボランティア、地域ガバナンス、公共政策 | 2

Discussion 2



稲垣久和

稲垣 先生のやっておられることの意味内容がとてもコンパクトにわかりました。若者が成長する段階でのボランティア活動の必要性は今までも言われてきましたが、宗教の公共的役割を考えたときに、先ほどもいいましたが、日本の宗教はすごくプライベートに閉じていて、もっとパブリックに開かれて、市民社会を形成していく形に成長していかなければいけないと思っています。また、地域社会とのきずなを確立し深めるために、被災地に行くことだけではなくて、お話にも言われたように、身近で苦しんでいる人たちとも共に成長していくことが日本の宗教にとっても必要だと思います。宗教心の成長、スピリチュアリティの成長という点では、特定の宗教にコミットする人もしていない人も、生涯で魂が成長していく段階があると思うんです。そういう意味では人間の市民社会を豊かにするという面の一つの研究の試みとして興味深く拝聴いたしました。

調査対象(研究参加者)は若者でしたが、一方で、研究者ということでも何か別の可能性が出てくることはあるのでしょうか。長谷川先生もそうですが、岡村先生たちも被災地に結構行かれています。研究の内容をもっと社会に還元していく方向に変わる、そういう可能性についてはどうお考えですか。

岡村直樹 ボランティア活動は、「良い」ということはだいたいどの大学でもわかっています。「やるべきだ」ということもわかっている。そこで、「具体的にどういうメリットがあるか」と、問われたときに、「こういうメリットがあり、こういうポジティブな作用がある」ということを、ちゃんと提示することができたらもっと積極的に取り組むことができるようになると思います。たとえば今、私が行っている研究のタイトルは「建学の精神に特徴を持つ大学の震災ボランティア活動とサービス・ラーニングの導入」です。サービス・ラーニングとして、もうすでに良い教育成果を残している学校がたくさんあり、それを広く知っていただき、どんどんサービス・ラーニングを一般の大学に導入していただきたい。そういうモチベーションです。

稲垣 駒沢大学は禅仏教の曹洞宗ですが、東日本大震災を迎えたあとに、仏教界でも、「これでいいのか」といった声はすごくあって、いろんな試みが出てきています。宗教心の発達ということがたいへん重要だと思います。

教育の中のボランティアの意味と難しさ

長谷川(間瀬)恵美 質問とコメントです。質問は、桜美林大学もサービス・ラーニングを取り入れているので学生が毎年行っているのですが、これを単位制度として導入すると、ボランティアではなくなる、強制になってしまいますから。もちろん行った後で、考え方も変わってくる、教員側からすればプラスのこともいっぱいある。でも学生からは、「そんな時間があったら就職活動をしたい」といった言葉を聞きます。その点はどうお考えですか？

コメントの方ですが、私は先々週、天理で発表があって行ってきました。天理では、コミュニティの中でボランティアがちゃんと位置付けられている。もちろん教育の場でもできています。町自体がボランティアです。行ったときにすごく感動しました。キリスト教がもっと日本に inculturation(実生化)されて本当にこういう町ができたらいいなと思いました。天理教というのはもしかしたら私たち日本のキリスト教徒が学ぶべきモデルなんじゃないかと、先生の話を聞きながら思っていました。

岡村(直) ご質問の点ですが、そこがトリッキーなところですよ。ボランティア精神というのは自主的に行って見返りを求めずにやるという制約があります。サービス・ラーニングは単位を取るためにということなので矛盾します。そこを学校がどういう位置づけをしているのか研究するのが私のこの研究です。それをうまくやっている学校を知りたい。おそらく「今日からボランティアに行こう」と呼びかけても

岡村直樹



学生は行かない。まず、ボランティアとは何なのか、サービス・ラーニングとは何か、という教育がなされて、彼らを準備することが大切だと思います。準備期間の中でいろんなアングルから学生に学んでもらったり、学生の主体的な意見も取り入れてから連れていくことが大切だと思います。

長谷川(間瀬) 放射能の除染作業を行なった時は、反対する親が多かったです。私も自分のゼミ生がそれに参加すると決めた時、男子学生に対して「もし赤ちゃんができなくなったらどうするの?」と本気で心配しました。教育の場としてどのような場所に行かせるのか等々、そういった細かい配慮も必要です。お聞きしながらいろんな問題があると感じました。

岡村(直) 中には無鉄砲な感じの学生もいました。極端な例としては、報道されたような「イスラム国に行って戦いたい」という人も出てきます。でも、彼は彼なりに目的意識を持っているから、その辺は教育をする側としてもすごく難しいところですよ。

傍聴参加者A (ジャーナリスト) 対象となった9人の学生はまったくボランタリーに被災地に出掛けていたのですか。東京基督教大学(TCU)が「行きましょう」とは言わなかったのですか。

岡村(直) 彼らはみんな自主的に行っています。TCUにはまだボランティアのプログラムはありませんでした。今はボランティアセンターを立ち上げています。でもこれをサービス・ラーニングという形で学生に提供しようとは思っていません。学生の主体的な参加を学校で後押しする形です。

傍聴参加者A (ジャーナリスト) 「後押し」とは、たとえば授業期間中に行きたいと言ったらそれを認めるのかですか。

岡村(直) はい。教務課が便宜を図るとか、学校が募金集めに協力するとか、そういったことです。

稲垣 それにも意見はいろいろあって、私は基本的には認めない。特別に認める場合は、3倍くらいのレポートを課します。

岡村(直) そうですね。欠席して何も無いのではなくて、欠席する代わりに課題を出してくださいというふうに教務課からは必ずお願いすることにしています。

岡村清子 ジェンダーの問題はどうですか。男子学生と女子学生では、煮炊きとか、力仕事とか、担う仕事が違うと思いますが、そこは何かあるでしょうか。

岡村(直) 今回はその問題は目立って出てきませんでした。私が以前にした、アメリカの高齢女性のスピリチュアリティの研究では、ジェンダー問題はすごく昔からの課題でした。けれども今回は、グラウンデッド・セオリーで、open-endedで何も先入観を持たずにやったところ、わかる形では浮かび上がってきませんでした。

阪神淡路大震災との違い

傍聴参加者B 阪神淡路大震災のときよりも今回は学生のボランティアが圧倒的に少なかったと言われましたが、これは震災のあと間髪を入れずに原発事故の情報が広まって、放射能の影響を受けやすい若い世代である学生にそこが抑制として効いたのでしょうか。

岡村(直) そうだと思います。あとは地域的な理由です。阪神淡路大震災は人口密集地ですから周りに学生がたくさんいる。東北は人口が少ない。また、交通機関がないなかで、阪神ではボランティアは自転車で行って活動をしたみたいですが、今回は自転車で行けるようなところではなかった。井上貴詞 被害の規模も違いますね。500kmの沿岸がずっと被害を受けた。しかも福島が一番手前にあるので、そこが壁にもなってしまった。

ボランティアの背景としてのキリスト教

傍聴参加者A (ジャーナリスト) 今回の9人の学生のバックグラウンド(出身地や育った環境、高校時代の活動)

岡村清子





長谷川(間瀬)恵美

との関連性というのは何か考えられるでしょうか。

岡村(直) 今回はそうした情報はとっていません。というのは、バリエブルになってしまっ研究そのものにいろんな要素が入ってきてしまうんです。研究として成り立たせるために、均衡サンプリングだけにあえてしました。

傍聴参加者A(ジャーナリスト) 比較した他の大学の例とかはあるのですか。

岡村(直) ないので、今やっています。一部の人は「おたくはキリストさんだから」と言われることがあります。TCUは、信仰をはっきりと持っている人が多い。なので、どの辺がどう違うのかは私もすごく知りたいです。ただ私はあえてキリスト教にはこだわらずに分析しました。というのは、なるべく広くこの研究を使ってもらいたかったからです。

傍聴参加者A(ジャーナリスト) 震災ボランティア活動に参加しようと思ったきっかけを聞いた質問に、かなり多くの人たちが「被災地の人の苦しみを体験したい」とか、「同じ苦難を体験したい」と答えたということです。クリスチャンではない学生がこういう発想をするだろうか。TCUで普段教えられていることやクリスチャンとしてそういう教えを受けてきたからではないか。他大学の学生とは違うのではないかなと思ったんです。

岡村(直) それは確かにあると思います。ただ話を聞いていくと、ヤジウマ意識もなかったことはないんです。でもヤジウマ意識だけではなくて、クリスチャンなので「助けたい」という思いもあったという話です。その辺は他大学とは違うところかもしれません。でも他大学でも、自らボランティアに行きたいという学生の意識としては、「何とかしたい」という人が多いのではないかなとは思っています。

傍聴参加者A(ジャーナリスト) 「何とかしたい」とか「助けたい」はわかりますが、「苦難を共有したい」というのはキリスト者特有の感じですね。

岡村(直) それはそうかもしれないですね。

傍聴参加者A(ジャーナリスト) しかも「苦難を共有したい」という気持ちで行った学生たちが、「自分は傲慢だった」と気がついた。それまでは上からで、「私も東北の苦難を体験させていただきたい」という姿勢自体が傲慢だった。実際に行ってみて「そんなことは言えない」ということに気がついたという。だとしたら、3年後の今、彼らがどう答えるかに興味があるのですが、そういう研究はなさるのでしょうか。

岡村(直) しています。10年後まではどうかわかりませんが。

傍聴参加者A(ジャーナリスト) 彼らの福音理解が変わるのではないかと思います。たとえば牧師になったときの牧会の内容も、このボランティア体験がなかったら違うものになるのではないかな。ぜひ時系列で追いかけてほしいと思います。

岡村(直) そうですね。考えてみます。

ボランティアの見返り(単位)や「強制」の問題

稲垣 信仰の成長とか、宗教心の成長というときに、いろんなレベルがあると思うのですが、特定の宗教がないと称する人たちも含めて、スピリチュアリティというのはあると思います。

日本の今までの歴史を見てみると、重層的にいろんな宗教が入ってきていますが、それがどういうわけか、非常にプライベートなレベルで終わってしまっていて、市民社会に活かされる形で、社会形成ができていない。できていないから、国家のほうで、そのスピリチュアリティをさらって行って、利用していつてしまう。たとえばボランティア活動も、本来は自発的なものが、学校で必修とされるように、国家の中にかからめとられていく。そうした歴史を痛感しています。それを断ち切るためには、宗教者が、国家と一線を画した市民社会の中でそういうスピリチュアリティを涵養していく、形成していく努力が必要ではないかと思っています。今の文科省の動きを見ると、ボランティアについても十分に注意しなければいけないという気がします。

井上貴詞



長谷川(間瀬) ボランティアといいつつも強制になっていく怖さがあります。キリスト教の学校でサービス・ラーニングを取り入れて、単位を認め、行かせるのも一つの強制です。宗教教育の強制です。でも天理教はそうではない。天理教では自然と宗教教育がなされる。何が違うんでしょうね。

岡村(直) 「自然と宗教教育が」というのは、何がどう自然なのかというのはわからないですから、何ともコメントができないのですが……。

稲垣 私は天理教のことは現地にも行ってずいぶん調べたこともあります。中山みきという教祖に、江戸時代の末期に、天理王命という神様がシャーマンとして下ってきて(憑依して)、それで天理教を開く。中山みきがすごいのは、「天理王命なんていうのを拝んでいて天照を拝まないのはけしからん」と言われても、「私は天理王命しか拝みません」と。それで牢屋にぶち込まれてしまう。何十回もぶち込まれる。次世代になると妥協して、迫害を逃れるのですが、分派した方はまた迫害される。そういうことを繰り返しています。いずれにしても天理教の場合は極めて自発性が強い。誰か権力からどうのこうのということは一切関係なく、信仰心だけです。

長谷川(間瀬) それは一つのスピリチュアリティの形成ですよ。

稲垣 そうです。ものすごく大きいです。

長谷川(間瀬) 何かそういった形でキリスト教が学べるものはあると思うんです。

稲垣 大いに学ばなければいけないと私は思っています。

長谷川(間瀬) 私が言いたいのは、キリスト教の学校でのボランティアの育成のあり方は、単位を認めるだとか、サービス・ラーニングだとか、そういったものではない気がするんです。

岡村(直) 日本のキリスト教系の学校を深く知っているわけではないですが、今まではほとんど何もやってきていない。このまま指をくわえて、こうなったらいいなと思っているだけではだめで、たとえば10人連れて行って、9人が強制と感じても、そのうちの1人が「これは本当にいい体験をさせてもらった」とポジティブに思うことができれば、何もしないよりはいいと私は思うんです。

傍聴参加者A(ジャーナリスト) クリスマス新聞の調査によると、東日本大震災のときに、「建学の精神から、この未曾有の国難とも言える危機に対して学生を積極的に励まして送りだすべきじゃないか」と考えた学校がいくつかあります。明治学院もそうです。東北から遠い九州の学校でも中学生や高校生を送り出している。単位をどうしたかは学校によるでしょうが、彼らにとっては建学の精神に基づいた教育の一環として行っている。

岡村(直) 単位化に危惧を感じるのも理解はできますが、たとえば私は教務部長ですから、このクラスを取らなければ卒業できないぞ、とか、強制的なことはいくらでもやっているわけです。それが、ことボランティアに関しては、いや強制は絶対にダメだというのが、私はもう一つ理解できないところです。

長谷川(間瀬) 「キリスト教の建学の精神から」というのも気にかかります。きっとキリスト教だからじゃないんですよ、もっと人を助けたいという気持ちは。だから「建学の精神」とかいうのではなくて、もっと普遍的な、グローバルな言葉を使わないとだめだと思います。日本人について今回世界からさかんに言われたのは、「日本人は、どんなにお腹が空いていようがみんなきちんと並んで待っていた」「ジャパン・クールだ」というようなことです。では「ジャパン・クールでいきましょう。ボランティアはジャパン・クールじゃない?」といったように、ちょっと見方を変えないと学生はついてこないではないか。単位をあげるからではなくて。

稲垣 それはすごく重要な点だと私も思います。

岡村(直) 私も単位制にしたほうがいいとは思っていない。TCUもそれはやっていない。ただ、何もしないよりは、単位制にしてもやったほうがいいと思っています。たとえば桜美林のようにボランティア活動で成果が出ている学校がわざわざ単位化する必要は全然ないですが、何もしていない学校が、何もできないままで終わるのではなくて、単位制にしても「導入してみよう」というほうがいいと思います。

長谷川(間瀬) 悲しいことに、桜美林は、単位化、サービス・ラーニングのほうに進んでいます、私は反

対しているんです。

稲垣 東京女子大はどうですか。

岡村(清) やっていません。SS (Service & Sacrifice) というバッジなのに。

岡村(直) 今回の研究を通してその辺も明らかにしていきたい。どういう学校がどういう取り組みをしているか。もしかしたら単位化しなくても、もっといい方法があるかもしれない。その辺を発見して、それを発信していきたいと思っています。

井上 今日お話しいただいている研究では、まだ学内にボランティアセンターもない頃に、「何とかしたい」という思いで行った学生たちを対象にした。これが、単位化してある意味で強制的に行かせたときに、同じような体験はするけれども、逆にマイナスの面も、違った結果も出てくるのではないですか。

岡村(直) その後行なっている研究では、教員に話を聴くだけではなくて、学生に対する聞き取り調査をする予定です。そのなかでももしかしたらこういうやり方でボランティアをやったらネガティブなものしか出てこなかったということもあるかもしれません。そのへんも明らかにしていきたいと思っています。

井上 福祉制度でも、私の学生時代は自分でボランティアで行って体験するしかなかったですが、今は国家資格制度ができて、単位を取るために行く。そうすると、それが面倒だとか、なかなか意味を見いだせない学生もいる。

岡村(直) ある意味でそれはニワトリが先か卵が先かというようなもので、ボランティアに行きたいという心があつたのでボランティアに行って多くを学んだのか、それともボランティアに行くチャンスがあつて、わからないけれども行ってみたらすごく何かを学んだのか。どちらがどう影響しているのかということもまだよくわからない。人によっても違うでしょうし。

井上 少なくとも行くことに対して、単位だからと強いられることがないような心を育てて行ってもらえたらいい。そういう環境づくりをトータルに大学として1年生のときからしていくことが必要だと思います。

地域における大学とボランティア

傍聴参加者C (東京基督教大学大学院生) 去年、千葉県で社会福祉協議会が、大学のボランティアセンターでどういことをするかというセミナーを開催したので、私は代表で行ってきました。TCUは、被災地に特化したしかも学生主体というボランティアセンターで、特別な感じてしたが、他の大学のボランティアセンターは、基本的には、仲介役となって、地域の掃除や小学生以下の子どもたちへの遊び場の提供などいろいろとやっています。ボランティアをしたいという学生が、どこでどうやったらいいのかわからないときに、その仲介役が必要だということや、また経済的な問題が学生にはあって、ボランティアをしたい思いがあっても、アルバイトが優先されるということと、なかなかボランティアが活発にならないといった社会的な問題も含めて難しいという議論になりました。ボランティアセンターが大学にあると、そこが仲介役となったり、経済的な面でも補助できたりとか、少しでもそういうことができるのではないのでしょうか。今年になって社会福祉協議会からまた連絡があつて、今度は、「学生主体で、各大学で協力し合つて地域貢献や地域のボランティアを励ましていくようなことはできませんか」、という相談でした。また新しい試みが千葉県で起きているようです。

岡村(清) 以前であれば、ほとんどの大学にセツルメントとかBBS (Big Brothers and Sisters Movement) とかが自発的につくられていた。そういうものが今は衰退しています。やはり大学は地域貢献でも拠点になるべきだと思います。それを新しい形でどうやってつくっていくのかは重要な問題だと思います。

井上 私の母校の日本福祉大学は、建学の精神で、「万人の福祉のために真実と慈愛と献身を」と謳っています。私が学生時代にはセツルメントが盛んで、学生のボランティア活動が伝統としてありました。伊勢湾台風のときに、たくさんの学生ボランティアを送ったことが一つのきっかけになったそうです。だから何かのきっかけは必要で、今回の震災を機会にして、学生の自発的な自主的な活動

が生まれてくるように環境を整えていくことは重要だと思います。その中の一つとしてサービス・ラーニングもあっていいと思います。

岡村(直) アンケートを303校に送って今のところ143校から返事が返ってきています。おもしろいと感じたのは、宗教系の学校はよくやっていて、経済系はそうでもないのではと何となく思っていたのですが、全然違いました。宗教系の学校でも、ボランティアセンターもなく、ボランティアを取り仕切っている係もないところもありますし、一方で、〇〇経済短期大学とかがすごく熱心にやっていたりする。何がある背景にあるのだろうか。

建学の精神に「博愛」を謳っているのだったらもっとちゃんとやるべきだと思いますが、逆に、「建学の精神とはそんなに関係ありません」といった回答もあります。建学の精神とは全然かけ離れたところでボランティア活動が行われているところもあれば、建学の精神だからというところもある。非常に多様性があるとおもしろい。

危機体験の重要性

森田哲也 私は大学のときに、インドとバングラデシュに行く機会があって、自主的には行きましたが、別に何か大きな期待をして行ったわけではありませんでした。行ってみて日本の生活とまったく違う世界を見ました。路上で死んでいる人がいるという光景を目にして、危機感のようなものを感じたことが、人生を変えるきっかけになりました。阪神淡路大震災の年に卒業だったので、卒業式の1週間前に神戸に行ったんです。そこでもたいへんな状況を見た。この二つの経験をすごく今でも思い出します。今回、危機体験が、信仰だけではなく、成長にも影響を及ぼすという話が出ました。「成長」ということを考えたら、教育という分野に関わる者として、また私自身の経験からも、特に17歳から22歳くらいのあいだには、「危機体験」が不可欠だと思っています。

まず危機的な状況ということ、特に今の日本の若者は体験しないといけないと思います。その欠落の影響の一番最たるものが、北大生がイスラム国に行くという症状として現われていると思うんです。今、手を打たないと、若者がどんだんがそういうところに魅力を感じるようになってしまいかねません。

岡村(直) 学校の門を一步出れば危機的な状況がゴロゴロしています。そういうところに学生に気づいてもらうために、本当は門から自分で出ていって、自分で見てもらいたい。しかしそれができない学生には、「単位をやるから」と言っても行かせて危機体験をさせるくらいのカンフル剤が必要だと思います。

リーダー的人材の育成のために

稲垣 震災とかそういう場面ではなくても、日本社会は少子高齢化というとても危機的社会に飛び込んでいて、予算以前に福祉の現場で働く人がいない状況です。これから40年、50年後には、凄まじい修羅場が日本に訪れます。これはもう明確です。福祉政策や社会政策を国に任せずに、そうした危機に対して敏感に、「自分でやらなければ」という思いが一人ひとりから起こってこない、日本社会というのは持たないと、つくづく思うんです。

岡村(清) 主体になる人たちが地域社会にいないんです。

稲垣 コミュニティワークとか言っても、コアになる人が生み出されない。リーダー的な人材を生み出すのは、まさに教育の問題です。それがボランティア活動を単位化することで生み出されるのか。

岡村(清) 以前はリーダー的な人はたくさんいました。大学の周りの人たちが集まって討論して、「何かしよう」といった雰囲気があった。時代も時代だったんですが、今はおとなしい。全然ディスカッションもしない。ゼミに行ってもシーンとしている。びっくりするくらいおとなしくなっている。その



森田哲也

辺をどういう教育をしたらいいのか。

長谷川(間瀬) 単位をあげないほうが出てくるんじゃないですか。学生の視点から見たら、ボランティアに行くのに単位が必要でしょうか。単位を欲しいと思うでしょうか。

岡村(直) 必要ない人はいっぱいいます。それは認めます。でも、自主性に任せていたら何もしない人もいっぱいいる。そういう人たちに対して、じっと自主性が現われて手を挙げるまで待っているのか、それとも何か呼び水を少しやるのか。呼び水は、単位でなくても何でもいいのですが、何とかして彼らを行かせたいと思うのです。

長谷川(間瀬) 東北の経験でも、東京の人から「話せ、話せ」とハッパをかけられても、彼らはどんどん口を閉ざしていくばかりです。学生の問題もそれと重なってしまう。単位をあげるといって、閉じこもった学生を引っ張り出そうとしても、余計に閉じこもるだけではないのか。そうではなくて、友達や同じ学生から「一緒に行こうよ」と誘われた方が行く。

岡村(直) ボランティアの形というのはいろいろありますよね。人と直接ふれあうことなく、ただ黙々とドブさらいをするボランティアもあります。

長谷川(間瀬) そうですね。休学して1年間も行ったきりで、ずっと屋根を直すボランティアをやっていた学生もいます。その子も、友達に誘われて行ったんです。私は、単位化に進んでいるのは怖いと感じます。それで引っ張り出そうとするのは怖い。

森田 確かに継続的にボランティア的な活動に関わっていくのは、一人では難しいです。私も今、自閉症の子どもを支援している施設を支援していますが、それは友人がいるから、私も関わっているんです。何の報酬もないし、時間も結構とられるのですが、でもやっています。ピアプレッシャーというか、悪く言うと同調圧力でしょうか、お互いに一緒にやっていくことでボランティア的な活動を継続していく。

そういうきっかけがあるかどうか、そういう友達がいるかどうかという要素と同時に、岡村直樹先生がおっしゃったように学校側の制度も整える必要があるのではないですか。大学の場合は、システマティックにしていかなないと社会的な意義も果たせないと思います。

岡村(直) 思春期というのは一種の臨界期のようなものであると思います。だからその時期にしかできないこと、その時期にしか獲得もできないことがある。単位がいやだという学校はもちろん単位を出さなくてもいい。サービス・ラーニングが一番いいと思う学校であればそれでいい。ただ何らかの形でそういうチャンスを学生には与えるべきではないか。臨界期である非常に貴重な時期に何とか後押ししてできないかと思います。

意見交換が促す成長

石野徳子 結果の中で、インタビューやディスカッションによって、対象を理解したり、自分を内省したりというレベルがさらに高くなっているように感じました。これは先生がインタビュー前に何らかの導入的な言葉がけをしたのか、何もなくてお互いに話している中で今まであったものがもっと言語化されていったのか、その辺りの変化についてはどうお考えですか。

岡村(直) 私は後者のほうだと思っています。分析4でも話しましたが、彼ら自身は、それまでボランティア体験を他の人にシェアしたり、他の人の意見を聞いたり、というインタラクションがまったくなかった。それがグループワークの中の会話で、「えっ、そうだったの」という気づきとか、「俺もそうだった」という同調とかがワットと起こったんです。これも現象学的教育方法だと思うのです。

石野 相手をすごく思い遣り、自分自身を客観的に内省できるというのは、すごいと思います。つまりお互いに意見交換をして、体験したことをもう一回フィードバックしていく中で、自己成長がすごく効果的にできていると思いました。

岡村(直) 私のもう一つの専門がナラティブ・メソッドです。1年前にTCUで行なった授業ですが、

石野徳子



ボンヘッファー¹²のライフストーリーを15分だけクラスの前で語り、ボンヘッファーのライフストーリーのスキットをつくって演じるという課題を出した。そしてその前後にグループディスカッションをやりました。前のディスカッションでは、ボンヘッファーがなぜヒトラーの暗殺計画に加わったのか、それは倫理的にどうだったのか、というのが議論の中心でした。しかし、彼らがスキットをつくって、ボンヘッファーのライフストーリーを自分たちで演じた後では、フォーカスが、彼の背景とか葛藤のほうに移っていった。自分がその物語の中に入ってアクトするときに、ボンヘッファーがヒトラー暗殺への加担を決めるまでのプロセスを自分たちで想像したり、調べたりして、2週間でボンヘッファーに対する見方がまったく変わった。そういうことがこのグループワークの中でも起こったと思います。

石野　そういうことを考えると、教育者として関与していくときに、グループワークの状況を見ながら、教育的にどんなふうに動機づけをしていって、さらにそこで気づかせるかといった手法を教員が持っていれば、さらに学びが深められていくと感じました。

個々が感じたことをそこからもう一回視点を変えていく、そのためのヒントとなるものを出すことが教育者の役割ではないか。今回のケースは見事に変化しているので驚きました。

この時期はアイデンティティの確立の時期だと言うのですが、こういうふうに体験をうまく引き出すことによって、アイデンティティの確立というよりももっと奥深く若者が学ぶ、そういう大きな材料であり、そして学んだ学生が次に今度は引っ張っていく。そういう人がここから出てくる。そういうことかと思い、教育の大変さを教えられました。

井上　サービス・ラーニングで手法を導入したからうまくいくのではなくて、教員はそれだけのスキルを持っていないとダメだということです。

階層化された社会を前にして

岡村(清)　子どもは小さいうちから階層化されたルートを走っています。低所得の人と高所得の人では所属するコミュニティや教育レベルも違ってたりします。私たちの頃は、お金のある人もない人も見て育ちました。汚い家もある、ご飯も食べられない家もある、お父さんが酔っぱらってばかりいる家もあるとか、小さいうちにいろんな人や家族と出会っている。それが大事です。しかし今は階層化されて、いろんな階層の人たちが交わることができなくなっています。それがまた格差社会の大きな原因となっています。そこを解決していくためにも、いろんな人と出会うということが重要だと思います。

森田　日本の場合だと貧困が相対的な貧困なので、目の前にまったく食べられない飢えた人がいるという状況ではない。「子どもの貧困率が16%」と言われても、それがなかなか見えてこない。おそらくこれからは見えなくなってくると思うんです、日本の格差というのは。発展途上国でも、目の前にいる人も確かに大変だけれども、たとえば障害のある人は社会に出させないということもあるだろうから、見えなくなっている。もっと見えないものや隠れているものが貧困格差の中にはあると思うんです。であるからこそ、先ほど言ったように、人間として目の前にこうした人がいたら何かしなければいけないと皆が思う環境をつくっていかなければいけない。人間として本当に生きていくためには、人類がサステイナブルになるために、そういう見えない相対的な貧困の中で何ができるか、そういう課題を担うくらいの覚悟で大学教育もやらないと危ないと私も思います。

稲垣　6人に1人の子どもが貧困で、それが貧困の連鎖で格差がますます開くという時代に、大学まで来られる学生は上のクラスです。貧困家庭では、大学に行くどころではなくて、高校や中学でも働かないと生きていけない、そういう状況が今の日本の中で起きています。だから大学生になってからでは遅いかもしれない。その前の段階で篩い分けられてしまう社会に今はなっています。

岡村(直)　ある意味で、大学生でボランティアができるのは特権階層なのかもしれません。

稲垣　そうですね。

12 | ディートリッヒ・ボンヘッファー (Dietrich Bonhoeffer, 1906–45) は、ドイツの古プロイセン合同福音主義教会(ルター派)の牧師。キリスト教神学者の一人。第2次世界大戦中にヒトラー暗殺計画に加担。暗殺計画は挫折、逮捕され、ドイツ降伏直前の1945年4月9日に処刑された。

岡村(清) 昔は地域で体操をしたりして、子どもはみんなつながっていたんですね。

稲垣 そうですね。それがプツプツ切れている。

岡村(清) 子どもクラブとか、そういうものが全然ない。新しいコミュニティをどうやってつくっていくのか。

稲垣 そこも大きな課題です。コミュニティが崩壊していて、コミュニティの再生という課題を課せられた時代をわれわれは生きているんです。その際に、ボランティアをどのようにそこに入れていくかも大問題です。また、大学はどういう教育理念を持って、地域とどういう関係にあるべきか。今の日本では、大学には篩い分けられてしまった青年たちしか来ない。彼らもよいところに就職しないと、いずれは長時間労働でくたびれはてドロップアウトしてしまう可能性がある。だからまずは就職活動だ、となって、ボランティアどころではない。そういう現実も今の社会にはある。

地域社会と宗教の役割

傍聴参加者A(ジャーナリスト) 地域の中に密着していなければいけないのは教会のような宗教団体ですよね。

稲垣 宗教というのは本来は地域のパストラル・ケアを担っていた。それがもうなくなってしまっている。

傍聴参加者A(ジャーナリスト) そのパストラル・ケアという言葉、教会員に対するケアだとこれまで思い込んでいた教会が、この震災で、地域社会に対するパストラル・ケアだと気がついた。そういう東北の教会は結構多い。多くの教会の牧師は、否応なく、「困っていることはありませんか」「寒くありませんか」とやらざるを得ない状況に追い込まれてそれに気がついていった。

稲垣 そうですね。地域社会との絆を確立する、そこに宗教というものの生命が本当に蘇るかどうかの大きな鍵があります。何か囲ってある中間層だけが来ている教会ではダメなんです。その辺で今は少し転換期に日本が入っているという気はします。

井上 先生のこの研究の成果が、コミュニティの教会やお寺など、大学教育という枠だけに留めず、いろんなところで用いられればいいと思います。

行政とボランティアの関係

傍聴参加者D 私もときどきボランティアに行きます。社会福祉協議会が窓口ですが、段々と何か行政にからめとられていくイメージが拭えないんです。つまり行政の下請けをやっているというような。このへんの切り分けというか、論理の整合性というのはつくものなのかどうなのか。これはどういうふう考えたらいいのでしょうか。

岡村(直) そこはまさに長谷川先生が危惧されているところだと思います。今、文科省がサービス・ラーニングを導入しろと言っている。これまではお金を出していろいろなことをやっていただけども、もうお金が出ないので、学生にやらせよう、そんなところが透けて見えます。それは社会福祉協議会でもきっと同じです。ボランティアとか社会奉仕が、もともとどういう形で日本に存在していたかということがあまり意識されていない。

しばらく前にアメリカでブッシュ大統領が、thousand points of light という概念でボランティアワークをすごく提唱した時期がありました。コミュニティの中に千の光があって、その一つ一つの光が自分の周りのコミュニティをヘルプしていくんだと。だから国が大規模に福祉をやるのではなくて、自主性にもっと委ねる、その中で教会などがもっと力を持っていかなければいけないという主張です。それに対して民主党は、福祉にはもっとちゃんとカネを出し、口も出すとの主張でした。私はアメリカに26年間住んでいて、完全に共和党の支持者でした。ブッシュ大統領の thousand points of light というボランティア観は素晴らしいなと思った。でもどっちがアメリカに馴染むかという、階層によって違い

ます。上流階級には、ブッシュ大統領の thousand points of light がすごくしゅくりくる。しかし、貧困階級の人たちは、「何を寝ぼけたこと言ってるんだ。もっとカネを出せ」という感じてした。

日本もいろんな人がいるので、誰にどういうふうにな何を働き掛けるかということも多様化していかなるを得ないと思います。すべての人に一つの方法でボランティアを奨励するのではなくて、こういう人たちはこういう形で奨励するとか、エンカレッジすることになってくるのでしょうか。ただ、確かにその中で政府の手足となるということはちょっと癪ですね。

稲垣 これも大事なテーマです。アメリカ社会のヨーロッパと違った際立った特徴は、一口でいうとボランティアリズムです。ボランティアリズムによって「アメリカ共和国」というものがすごく強力な力を持つようになった。19世紀末までのこのボランティアリズムに対して、20世紀になってウエイトが増したのがリベラリズムです。

では日本はどういう社会をつくるのか。アメリカ的なリベラルな自発性が尊重される社会か、またはスウェーデンのような非常に高い税金を取って国で再分配する福祉社会か、そのせめぎ合いの中にあります。私はその中間の一つの形を提唱していますが、そこで言いたいのは、ボランティアの新しい側面、ボランティアの見直しです。ボランティアが国に利用されるという面も確かに歴史的にはありましたが、それだけではない。人間が人間としての自主的社會をつくるという、その原点に立ったときに、国家の役割はものすごく重要だと思います。その辺の選択は民主主義の形ということで非常に大事だと思っています。

井上 社会福祉協議会は住民主体といいます。でも市民主体とは言わない。そこが大きく違うところだと思います。地域福祉は住民主体といっても、烏合の衆ではまずいですから、やはり覚醒した自覚的な市民でなければいけない。そういう意味では天理教から学ぶべきことがたくさんあると思いますが、天理の場合は現実政治に対してものすごくニュートラルです。「秘密保護法についてどう思いますか」と聞いても、「私はそういうことには関わりません。意見は言いません」と言うわけです。先ほどの政府にからめとられない市民一人ひとりの自覚的なものであるというところは、単に住民主体というよりも、市民社会をどうつくるかという、それは稲垣先生の言う公共福祉という方向に向かっていくので、その違いを意識しながら一步一步やっていくことが重要だと私は思っています。

傍聴参加者A (ジャーナリスト) 行政とボランティアの関係ということで言えば、東日本大震災に関しては、確かに震災から数週間から1か月以後は、ボランティアなどは市町村ごとの社会福祉協議会が仕切って差配していました。そういう交通整理をしなければボランティアが集中するところとそうでないところが出てしまうからそれは必要だと思うのです。しかし、初動に関して言えば、行政機能はマヒしていましたから、クリスチャンなどが現地の教会を頼りに飛んで行って、その教会をベースにして、支援物資を配ったりしていました。彼らは、地元の人たちからどこが大変なのかを聞いて、この村よりももう一つ先の山一つ越えた向こうの部落のほうが大変だ、と聞くとそこへ行く。そうした現地の声を聞きながら手探りでやっていた。行政が3日後にしか来なかったところに、ボランティアが先に行っていた。そういう意味では相互補完的で、ボランティアの力はすごいというのを今回感じました。

また、ボランタリーでなければ悩んでいる人を助けられない現場というのは今でも福島にはたくさんあります。福島は行政がタタマエで動いているので、風評被害を防がなければいけないとか、あまり放射能の数値のことは言わないでくれとか、抑えにかかる。たいしたことはないんだという広報が行き渡ってしまっている。でも小さい子どもを持っているお母さんは心配でしょうがない。ノイローゼになりそうな人たちがたくさんいる。彼女たちを支える必要があるんです。ボランティアや現地の教会、そこにつながっている市民たちが一生懸命やっていますが、行政はタッチしない。行政には限界があるし、それを越えてボランティアだからこその分野というのはやはりあると思います。急性期だけではなくて、福島なんかは今後5年10年そういう支えが必要な現場です。

ボランティア体験と社会構造への疑問

傍聴参加者E たえば岡村直樹先生の学生たちは、そういう体験を通して、議論の中身が社会の仕組みとか構造にまで入っていくのでしょうか。

岡村(直) 今回はそこまでいっていないです。もう一回インタビューをしたらそんなことを考えている人もいるかもしれませんが、今の段階では見えてきていません。

稲垣 私もそれはすごく悩んでいます。どの大学でもそうですが、大学院くらいになると社会構造の仕組みを解体してもう一度再構築するみたいな話はわかるんだけど、学部のレベルではわからない。でもすごく重要なんです。

森田 社会構造も含めて幅広く考えることは非常に大事だとは思いますが、現場に出なければそれを考えるきっかけも得られない。教えることはできますが、たぶん通過してしまうだけです。ボランティアなどで社会との接点、地域との接点を持つことによってそのきっかけが得られる。すぐには意識に浮かばなくても、実際に社会人になったときとかに、そのときの経験が、点と点がつながるように意味をもつようになる。だから一つでもいいからそうした「点」を学生時代に残しておくことが重要ではないかと思います。それが後に、社会との接点をちゃんと抽象化して考えて自分の生活とか生き方に活かしていくということになると思います。

稲垣 ありがとうございます。時間になりました。



- 石野徳子
精神看護学、看護管理
昭和大学健康学部看護学科教授
—
稲垣久和
公共哲学
東京基督教大学大学院教授
—
井上貴詞
社会福祉学
東京基督教大学神学部キリスト教福祉学専攻准教授
—
岡村清子
老年社会学、福祉社会学、女性労働論
東京女子大学現代教養学部国際社会学科社会学専攻教授
—
岡村直樹
宗教教育学、宗教心理学、現象学的研究方法論
東京基督教大学大学院教授
—
河幹夫
社会福祉制度、ヒューマンサービス論
神奈川県立保健福祉大学教授
—
岸川洋治
地域福祉
横須賀基督教社会館館長
—
長谷川(間瀬)恵美
神学、宗教学 (キリスト教)
桜美林大学人文学系リベラルアーツ学群准教授
—
広井良典
公共政策、科学哲学
千葉大学法政経学部教授
—
松葉ひろ美
福祉思想
千葉大学特別研究員
—
森田哲也
公共政策、参加型開発、NPO 論
東京基督教大学神学部国際キリスト教学専攻 助教

広井良典 [ひろい・よしのり]

公共政策、科学哲学。東京大学教養学部卒業(科学史、科学哲学専攻)。同大学院総合文化研究科修士課程修了。厚生省(当時)勤務、マサチューセッツ工科大学客員研究員、千葉大学法政経学部教授等を経て、現在、京都大学こころの未来研究センター教授。著書に『日本の社会保障』『エコノミスト賞』『定常型社会』『生命の政治学』『ポスト資本主義』(いずれも岩波書店)、『ケアを問いなおす』『死生観を問いなおす』『コミュニティを問いなおす』[大仏次郎論壇賞](いずれも筑摩書房)、『ケア学』(医学書院)、『人口減少社会という希望』(朝日選書)ほかがある。

岡村清子 [おかむら・きよこ]

老年社会学、福祉社会学、女性労働論。千葉大学人文学部法経学部卒業、日本社会事業大学大学院修士課程修了。東京都老人総合研究所研究員、千葉大学法経学部助教授を経て、現在、東京女子大学現代教養学部国際社会学科社会学専攻教授。共編著に『テキストブック エイジングの社会学』『入門 職業とジェンダー——これからの女と男の働き方』(共に日本評論社)、『団塊夫婦はいま——どこから、どこへ』(高文堂)『少子化社会の家族と福祉』(ミネルヴァ書房)『女性とライフキャリア』(勁草書房)ほかがある。

長谷川(間瀬)恵美 [はせがわ=ませ・えみ]

宗教学(キリスト教)。東京女子大学文理学部卒業(哲学)、英国・ブリストル大学大学院修士課程修了(宗教学)、スウェーデン・ルンド大学神学・宗教研究科博士課程修了(神学博士)。国際日本文化研究センター共同研究員等を経て、現在、桜美林大学人文学系リベラルアーツ学群准教授。著書 *Christ in Japanese Culture -Theological Themes in Shusaku Endo's Literary Works* (Brill, 2008)、共著書『日本の近代化とプロテスタンティズム』(教文館、2013年)、*Interfaith Dialogue Global Perspective* (Palgrave Macmillan, 2016) ほか。

岡村直樹 [おかむら・なおき]

宗教教育学、宗教心理学、現象学的研究方法論。コロンビア国際大学卒業(B.A. 神学)、トリニティー神学大学院修士課程修了(M.A. キリスト教思想)、クレアモント神学大学院博士課程修了(Ph.D. 宗教教育学)。クレアモント神学大学院客員研究員、アズーサパシフィック大学講師等を経て、現在、東京基督教大学大学院教授。論文に“Intercultural Encounters as Religious Education: A Phenomenological Study on a Group of Japanese Students at a Christian University in California and their Religious Transformation,” *The Journal of the Religious Education*, 104 (May–June, 2009) ほかがある。

| コーディネーター |

稲垣久和 [いながき・ひさかず]

公共哲学、キリスト教哲学専攻。東京基督教大学大学院教授、同大学附属共立基督教研究所所長。東京都立大学大学院博士課程後期修了(理学博士)。ユネスコ・国際理論物理学研究所(Trieste)研究員、欧州共同原子核研究所(CERN)研究員、アムステルダム自由大学哲学部客員研究員、同客員教授等を経て現職。著書に『宗教と公共哲学 生活世界のスピリチュアリティ』(東京大学出版会)『国家・個人・宗教 近現代日本の精神』(講談社現代新書)『「公共福祉」という試み』(中央法規出版)『実践の公共哲学——福祉・科学・宗教』(春秋社)ほかがある。

Emergence | 創 発

Volume XIV
number 03

2017年 3月31日

発行人
稲垣久和

編集
赤羽高樹、梶野宏 [フォンテ]、中田有紀

編集協力
豊島集司

デザイン
森大志郎

印刷・製本
LIVE ART BOOKS

—

東京基督教大学
共立基督教研究所

〒270-1347
千葉県印西市内野3-301-5-12
telephone | 0476.46.1137
facsimile | 0476.46.1292
E-mail | ntaka@tci.ac.jp

<http://www.tci.ac.jp/info/institution/kci>

Emergence | 創 発 の
バックナンバーの
ご注文は当研究所まで
(I—IX 巻までは『共立研究』の旧称で発行)。

For even the Son of Man did not come to be served, but to serve, and to give his life as a ransom for many. [Mark 10:45]

